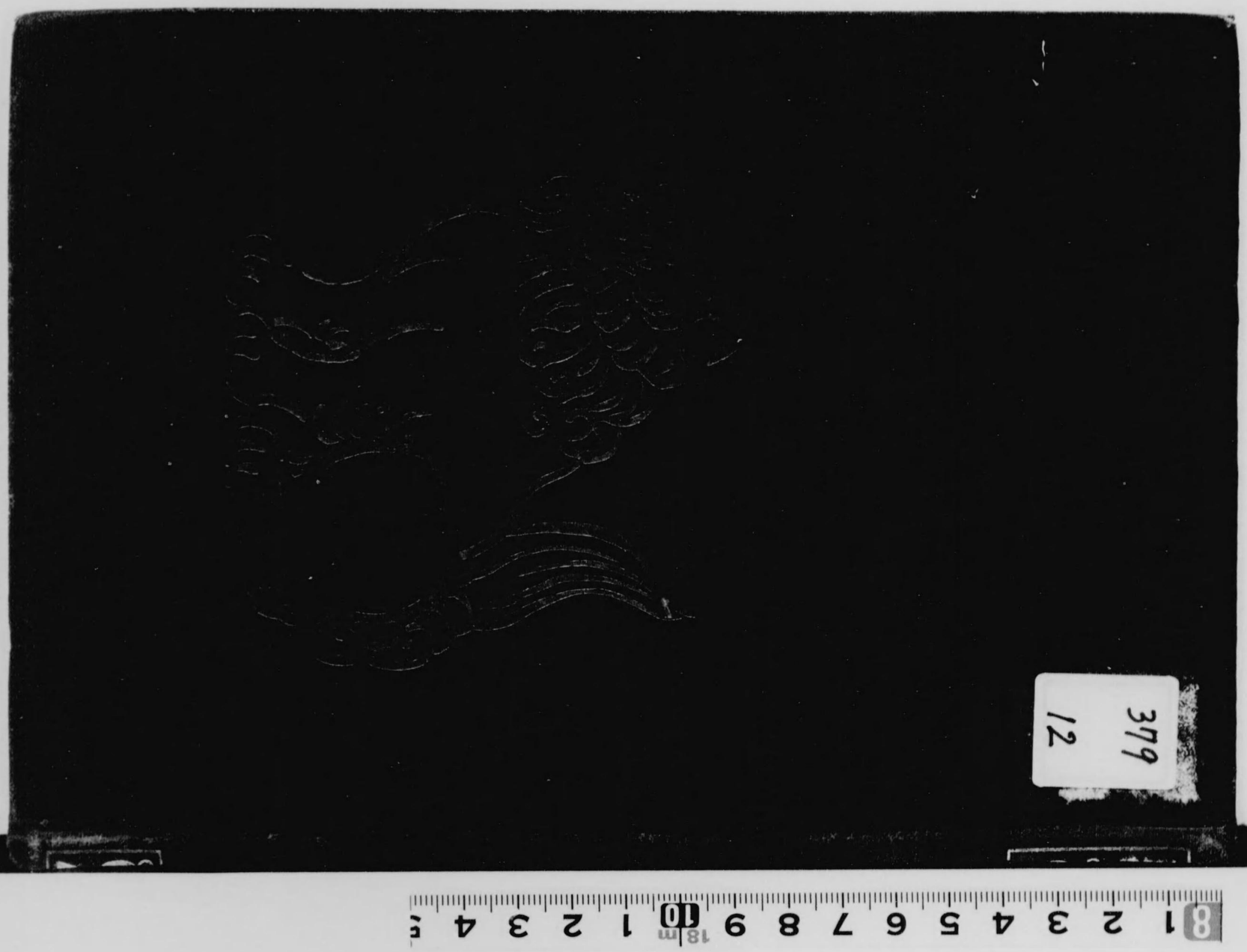

379
12

379-12

國譯

禪宗叢書

第拾卷

正
9.12.15
內交

國譯禪宗叢書第十卷凡例

一、本叢書第十卷に收むる所の書は、聖一國師語錄(一卷)、圓滿本光國師見桃錄(四卷)の二部五卷なり。聖一國師語錄は、元德三年國師の法孫虎關師練の纂輯に係り、國師の滅後實に五十餘年の後なり、故に之を國師一代の說法に比するに、太山の一毫芒に過ぎず。然れども本邦臨濟派祖の語錄としては之を其の稱有とせざるべからず。錄中收むる所は、東福寺語錄、法語、偈頌、佛祖贊、自讚、無準、了惠等の書牘なり。今次國譯につきては、元和六年十二月の重刻本に據りたり。又見桃錄は勅賜圓滿本光國師大休宗休和尙一代の語錄にして、足利末期に於ける禪界明星の遺篇なり。其の收むる所は、正法山妙心寺語錄、大龍山臨濟寺語錄、靑龍山瑞泉寺語錄、偈頌、追悼、詩、像贊、道號頌、立

地、拈香、掩壙、秉炬及び附錄等にして、元文二年の頃、法孫等の重編せしものなり。今次國譯に際しては、則ち元文の版本に據りたり。

一、聖一國師語錄は、我邦無準派下の語錄中、最古のものにして、國師機鋒の萬一を窺ふに足るべく、見桃錄は、關山派下、許多の語錄中、其の識見の超絕せる、文彩の典麗なる、本書の右に出づるものなし、是れ特に爰に收載したる所以なり。

大正九年十二月　　編者誌す

國譯禪宗叢書　第拾卷

目次

國譯聖一國師住東福禪寺語錄解題……一——一
國譯聖一國師住東福禪寺語錄……一——二一
聖一國師住東福禪寺語錄原文……一——二一
國譯圓滿本光國師見桃錄解題……一——二
國譯圓滿本光國師見桃錄……一——三三七
圓滿本光國師見桃錄原文……一——一九六

國譯聖一國師語錄

解題

聖一國師語錄は、國師の滅後、五十年後の蒐輯にして、國師一代の全錄にあらずと雖も、我邦入宋禪僧の語錄としては最古の物に屬す。此の書元和六年開版の識語に「以二國師年譜再刊助緣之餘資一重刻」云々の記あるも、未だ曾て舊版の世に存するものを見ず。今次國譯に際しては、元和六年十二月の刻本によれり。

傳を案ずるに、辯圓字は圓爾、俗姓は平氏、駿州藁科の人、母は稅氏、明星の炎を夢みて身むことあり、生るる時、金炎室を照らす、五歲にして、久野の堯辨法師に依る。八歲にして台教を學んで粗大義に通ず。十五にして、止觀の講席に則はる。「故四諦外別立法性」と云ふの文に至りて、講師潸然す。師進前解釋す、詞義渙然たり。十八にして、園城寺に削髮して東大寺の戒壇に登る。教外の宗を慕ふて、榮朝禪師を上野の長樂に禮して、衣を易へて參究す、辭して行勇禪師に相模の壽福に謁す。嘉禎元年海に浮び、僅に十日を經て、明州の界に著く、理宗の端平二年なり。天童山に入つて、癡絕沖に見え、笑翁堪に淨慈に、石田薰に靈隱に謁參す。寧退耕、北山の賓を典る、師と友とし善し、語つて

曰く、「輦下の諸名宿、子已に參徧す、然れども天下第一の宗師は、唯だ無準範和尚なり。子何ぞ顧眄を承けざるや」と。是に依つて師、徑山に登る、佛鑑一面罌許未だ浹旬ならざるに命じて巾缾に侍せしめ、痛く箴劄を加ふ。師晨昏參尋して、遂に開悟す。準、師に告げて曰く、「儞、學海浩渺、吾が竹篦下に一時に乾枯す、佗日國に歸らば、必ず無涓滴の處、橫に波瀾を起し、無勝幢を豎て、吾が道を發揮し、須らく乃祖の遺芳を踵いで、永く未來際を利すべし」と。淳祐元年三月朔夜、準、師を室に召し、香を燒いて語つて曰く、「儞化導時至れり、早く本土に還つて祖道を提唱せよ」と。乃ち密庵師祖の法衣幷に自贊の頂相、自筆の宗派の圖を付す。師、中夏に四明を發して、孟秋に博多に著く、卽ち本朝仁治二年なり。太宰府の湛慧、橫嶽山に就いて一精藍を擲めて、師の歸朝を待つて卽日來り請す。師乃ち崇福寺と名づけ、開堂說法す。肥前水上山の榮尊、敎寺を革めて禪刹と爲し、師を請じて開山祖と爲す、自ら版首に居す。宋人謝國明、博多の承天寺を創めて聘招す。太宰府有智山の徒衆、師の禪化を嫉んで、承天新寺を毀たんと欲す、執事朝に聞す。寛元二年敕して、承天、崇福の二刹を陞して官寺と爲す。師便ち無準の書する所の勅賜の大字を揭ぐ。湛慧事有つて京に入つて、相國二條良實に訴ふ、旣に入謁す。良實舊、慧の名を聞いて延いて宗門の事を問ふ、慧、酬酢響の如し。良實大いに喜んで、多大相國九條道家に啓す。良實問うて曰く、「上人、誰を師として此の智辯を得たるや。」慧曰く、「我が師圓爾、近ごろ宋に入つて親しく徑山無準和尚の正印を得たり。現に今崇福、承天の兩刹に住して佛心宗を唱ふ。」道家乃ち使を發して師を招いて、炎明峯の別墅に館せしむ。終日道を問ふて、就いて禪門の大戒兼て秘密灌頂を受く、因つて三子をして弟子の禮を執らしむ。是より先き、道家洛の東南に就いて大伽藍を搆へ、名けて東福寺と曰ふ、將に八宗の衆園として國家の安寧を祈らんとす。是に於て革めて禪刹と爲し、師を署して開山始祖と爲す。洪聲晩く成るを以て、先づ普門寺を建て、師をして假りに居らしむ。道家、僧正に任せんと欲す、師辭して受けず、復た日本國の總論師に補せんと欲す、師又受けず。遂に親しく聖一和尚の四字を書して以て之を授く。建長癸丑、師、相州に往いて龜谷山に館す。北條時賴、府內に請じて菩薩戒を受け、就いて玄旨を問ふ。七年六月市福落慶す、師入寺開堂す。後嵯峨上皇、師を龜山宮に召して大乘戒を受け、法要を敷宣せしむ。上皇手から親しく御扇を賜ふ。正嘉の初め、時賴招いて、龜谷山を董せしむ、鐘鼓魚版一時に響を改む。二年洛の建仁に遷る、佛殿、雲堂、回祿の後、壞圮蕭索たり、師皆鼎新す。師嘗て室中、理致、機關、向上の三種を擧して學者を接す、特に諸禪刹を董すのみに非ず、又敎寺を管する者多し。大和の東大、尊勝、攝の天王、洛の法成の如き皆勅を奉じて之が幹事を爲す。弘安三年春、遂和を示す。夏六月常樂庵に移る、龜山上皇、官醫をして診脈せしむ。丞相一條實經、山に宿して問候す。秋に入つて稍愈ゆ。十月朔、鼓を鳴し衆を鳩め、祝聖罷んで出世の始卒を演ぶ。大衆に謂つて曰く、「卻後十五日當に本寺に還つて寶華王座に末後の句を說いて大涅槃に入るべし」と。十四日の晩、侍僧に命じて舁

いて寺に歸らしむ、門人等可かず。望旦兩序耆舊、庵に詣つて問訊す、師復た其の緒を宮ぐ、衆亦聽かず。十六日行者に命じて曰く、「晩間客あり、房宇を灑掃せよ」と。黄昏に及んで果して無傳越後より來る、師五條衣を披して坐す、傳、燒香作禮す。師曰く、「最後の相見須らく九拜を致すべし。」傳、將に退かんとす、師之を留めて理致、機關等の三種を示す。夜已に三更を過ぐ、使を一條實經に馳せて辭を告げ、乃ち椅に登つて端坐す、諸徒遺偈を乞ふ。便ち書して曰く、「利生方便、七十九年、欲レ知二端的一佛祖不傳」と、筆を擲つて化す。龕を留むること三日、顏色變せず、全身を常樂庵に瘞む。林竹白に變じ、梧桐自ら枯る。正和の初め敕して國師と謚す、本朝國師の號茲に始る。

國譯聖一國師住東福禪寺語錄序

佛は唯說く而已、結集せず、結集は諸子の事なり。我が慧日祖の說法、海藏に盈つ可し焉。諸子の多きこと、宛も耆崛の如し。然も皆早く化を四方に敷いて、結集に遑あらず。忠首坐と云ふ者有り、予に謂つて曰く、「吾祖の貫花、綴緝する者無し、歲已に半百なり、更に數年を加へば、恐らくは微言の絕えん乎。師、意有らん哉。」予曰く、「兄と予とは共に貽厥なり、我、結集と言ふ者は諸子の事なり、予豈に敢てせん乎。」曰く、「結集する者は誰ぞ。」曰く、「妙德と大龜と及び慶喜なり。」曰く、「慶喜は阿誰にか嗣ぐ、」曰く、「大龜に嗣ぐ。」曰く、「寧ろ孫謀に非ず乎。」曰く、「似たる事は則ち似たり、是なる事は則ち未だ是ならざるなり。」曰く、「若し似たる者有らば、亦庶幾からん。」予、得て拒まず、纂集し竟りて、告げて曰く、「今の得る所の者は、蠹簡殘編なり、豈に能く共に收めて並べ畜へん乎。所謂、仙官、六丁に勑して、雷電して下り取り將る、人間に流落する者は、太山の一毫芒なる耳、方に今天下、惠日の手澤を緝衣十襲する者多し、兄は遍參の人なり、或は江、或は湖、剽聞切問して此の冊に糅へよ。元德三年二月初五日、三聖孼孫師錄敬序。

國譯㋑聖一㋺國師住㋩東福禪寺㋥語錄

㋭三聖嗣孫　㋬師錬　㋣校纂

元旦上堂、禪は意想に非ず、意を立すれば宗に乖く、道は功勳を絶す、功を建つれば旨を失す。新年の消息、鐵塵を動せず、節に應じて祐を納る、慶宜しからずと云ふことなし。若し佛法の㋭商量を作さば、鐘を喚んで甕と作す。若し世諦流布と作さば平地に喫交す。大衆還つて委悉するや。孟春猶ほ寒し、堂に歸つて茶を喫せよ。

㋮無準忌拈香、我れ昔行腳し、海に航し山に梯して拖泥帶水、南方を徧歴す。當時五髻峯頭、覺えず這の老師に撞著して儂の毒手に遭ふ、

○本書は師錬の序、東福寺集雲藤外二師の後跋あり、元和六年(一二八〇)臘月上梓す、但し東福寺藏版なり、上堂、拈香、小參、結夏、示衆、偈頌自贊より成る、一卷の紙數纔か卅一枚の小册子なるも、滅後逸散の聲あり、本朝禪宗渡來の初期なるを以て、最も古き語錄なり。

㋑聖一國師。諱は辨圓、字は圓爾と云ふ、駿河の國の人、姓は平氏、幼にして台學に通ず、十八歲にして髮を剃り、後榮西の資行勇榮朝等に禪を叩き、又海に航して徑山に無準に見え、嗣法す、壽七十一歲にして遷化す。遺偈あり、「利生方便七十九年、欲知端的佛祖不傳。」

㋺國師。高麗の國にては國尊と稱せしことあり、君臣共に歸依し、以て此の號を賜ふ、本朝にては夢窻國師生前に賜ひ、滅後には辨圓に賜ふ、卽ち國師の最初なり。

㋩東福寺。慧日山と號し、京都伏見にあり、建長七年(一九一五)九條道家公の創立にかかり、舊天台宗なりしを、聖一國師に歸依し改宗せらる、臨濟京五山の中に數へらる、紅

回避する處なし。眼上に眉を安ず、生涯を蕩盡して直に如今に至つて言の說く可きなく、理の伸ぶべきなし。而今衆に對して底を盡して揭翻す、香を擧して云く、「劫石は消する日あるも、此の恨幾時か休せん。」

㋟浴佛上堂、悉達太子、法身示現して、今日淨飯王宮に誕生す、九龍水を吐て金軀を沐浴し、地に金蓮を涌して其の足を捧げ承く、普天匝地自ら矜伐し、端なく口を開いて獨り尊と稱す、大人の相莊嚴を具足して、微妙の大佛事を施作す、且つ作麼生か是れ大佛事、良久して曰く、「下座普く露柱燈籠を請じて、同じく如來の香水海に入れ、這の老子を助けて大法輪を轉せん。」

㋠結夏小參、靈山の密付、少林の單傳、機機相投じ、言言相契ふ、大圓覺を以て我が伽藍と爲し、身心安居、平等性智、九旬禁足、三月護生、蠟人の冰を守り、鵝護の雪を憐む。大精進を起し大勇猛を發し、智慧の劒を秉りて一往に直前し、㋡有學㋢無學、一切皆殺す。一切を殺し已つて、山を見ば是れ山、水を見ば是れ水、全體恁麼にし來り、全體恁麼にし去らば、摠に許多路布の葛藤なし。正恁麼の時呼んで衲僧本分の事と作し得んや。萬仞懸崖須らく手を撒すべし、大千沙界に全身を現す。

復た擧す、㋣德山、㋤衆に示して曰く、「老漢が見處、佛も也た無く祖も也た無し、達磨大師は是れ㋥老臊胡、㋦十地の菩薩は是れ擔屎の漢、㋧等㋨妙の二覺は是れ破戒の凡夫、菩提涅槃は是れ繫驢橛、㋩十二分敎は是れ鬼神の簿、瘡疣ふ、曰く、聖道を修學するも尙ほ斷ずべき煩惱の殘餘を有するの義なり。

㋡無學。梵に羅漢と云ふ、見思の惑を斷盡して、修行位第四果に到りし人を云ふ。

㋣德山。實鑒と號し、又執金剛と字す、律藏を精究し、性相の諸經に通達す、天皇道悟の資、龍潭和尙に嗣法す、壽八十六にして遷化せらる、敕して見性大師と諡す。

㋤示衆。大衆に敎誡を示訓することなり、六祖壇經が古き典據なり。

㋥老臊胡。唐宋時代の俗語にて、「えびすのおやぢ」と云ふ程の義、字彙に、「胡人は血肉を好む、故に身に豚犬の臭を帶ぶ」と見えたり。

㋦十地の菩薩。歡喜地、離垢地、發光地、燄慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地の十地なり、十地とは菩薩所證の地位なり、一切の佛法之に依つて發生す、然して地位に淺深あるが故に、始め歡喜地より法雲地に終る、分ちて十と爲す、楞嚴經に出づ。

㋧等覺。天台所立の修行位、五十二階中第五十一位にして、菩薩の極意とす。

㋨妙覺。等覺の上位にありて、極果極聖の位にして、無明を破し盡し、佛果を證得したる無上佛智なり。

㋩十二分敎。舊譯には十二部經とあり、佛說法の十二樣なるを云ふ、卽ち長行說、重頌說、授記說、孤起說、無問自說、因緣說、譬喩說、本事說、本生說、方廣說、未曾有說、論議說。

㋪四果。須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果。

葉の名所通天橋は寺中にあり。

㈡語錄。禪宗に傳はる語錄は、生前滅後に拘らず、師の常談を以て宗旨を直說せらるゝを侍者や小師共が書寫したるまゝを筆錄せしものなり、故に華藻を離る、禪門寶訓の序の注に、「密に眞機を顯はすを語と云ひ、總て衆事を集むるを錄と云ふ」とあり。

㈠三聖。寺號にして、東福寺の北側にあり。

㈡師錬。聖一國師の上足にして、東山滿照禪師の法嗣にして、虎關と稱せしは師錬のことなり。

㈢校纂。詳校篇に、「校は點檢なり、纂は廣句に集なり」とあり。

㈣商量。他と應酬對機すること。

㈤無準。諱は師範、破庵祖先に法を嗣ぐ、聖一國師の師なり、理宗帝より佛鑑禪師の號を賜ふ。

㈥浴佛。灌佛に同じ、摩訶利頭經に曰く、「四月八日は是れ佛生日なり、人民佛を念じ佛の形像を浴す、卽ち釋尊降誕會の式にして又灌沐とも云ふ、浴佛に用ふる香湯は、沈香(一兩)、白檀(二兩)、薰陸(半兩)、苟藿(半兩)、鬱金(一錢三分)、丁字(半兩)、甘松(半兩)、此の七種を淨布囊に盛りて鑊內に投じ、淨水三揆を用て煎じて二揆に減じ、鑊に移し、之を冷し、然る後用ふ云云」とあり。

㈦結夏。一夏九十日の間、護生禁足して純一無雜に修行する掟あり、一名雨安居と云ふ。

㈧有學。四果の聖者の中、阿羅漢果の人を除くの外、卽ち預流果、一來果、不還の人を云

を拭ふの紙、㋓四果㋒三賢初心十地は是れ古塚を守るの鬼、自救不了。」拈じて云く、「德山逸群の用を得て古今を明辨す、綱宗を提振し、後進を誘掖す。」拄杖を拈じて曰く、「然も是の如くなりと雖も、老僧が拄杖子に鼻孔を穿卻せられて、直に得たり氣を出す處なきことを。衆中氣を出す底あることと莫しや。」卓一下して曰く、「具眼の者は辨取せよ。」

結夏上堂、高く十地を超えて㋑僧祇を歷す、物我一如、身心平等、萬法と侶たらず、千聖と途を同じうせず。佛祖の大機を全提し、人天の正眼を㋖獨露す、直に㋔孤峰頂上に居して禁足し、卻つて十字街頭に向つて手を垂る。殺活自在、檃縱縱横、且く道へ還つて聖制に應ずる分ありや也た無しや。良久して曰く、「日用回互なく當機卷舒あり。」

㋗解夏㋘小參、大機大用、自在縱横、千聖の機關を滯びず、諸祖の窠窟に墮せず、淨裸裸滲漏を絶し、赤洒洒覆藏なし、本地の風光、本來の面目、言發聲に非ず、言に和して擊碎す、色前物にあらず、物と俱に融す、布袋口を打開して、鐵門關を擊碎し、吹毛の劒を提げ、南來北往、田地穩密、步步踏實、且く道へ、如何なるか是れ實地を踏む底の一句、㋙蠟人の氷を喜ばず、何ぞ㋚鵝護の雪を憐れまん。

復た擧す、文殊三處に夏を度る、㋛自恣の日に至りて迦葉㋜白槌して擯出せんと欲す、纔に槌を擧ぐるに、便ち百千の文殊を見る、世尊迦葉に問ふ、汝那箇の文殊を擯せんと欲す、迦葉茫然たり、拈じて曰く、「三箇の㋝老凍膿、一人は㋞圓陀陀地、一人は㋟曲彎彎地、一人は㋠黑漆漆地、子細に點撿し將ち來らば、一得一失。」

解夏上堂、擧す、僧㋡雲門に問ふ、「初秋夏末、前程若し人ありて問はば、未審し佗に對して什麼とか道はん。」門云く、「大衆退後。」僧云く、「過什麼の處にか在る。」門云く、「我れに九十日の飯錢を還し來れ」と。拈じて曰く、「這の僧、釗刀上の事を用ふ。雲門は殺活の手段を具す、諸人還つて會すや。」良久して曰く、「如かじ無事にし

㋐三賢。十住、十行、十回向、位の修行人を謂ふ、此の諸位の菩薩を賢と稱するは別教につき論ずるなり。

㋑阿僧祇。と云ふ、今無數と譯す、無限の長時間を呼び表す語なり、智度論に阿、秦には無と云ひ、僧祇は秦には數と云ふ、問ふ、「幾時を阿僧祇と名くる。」答ふ、「天人中能く算數を知る者、數を極めて知ること能はざる、是を一阿僧祇と云ふ。」

㋒獨露。豁開の謂。

㋓孤峰頂上。佛祖も窠ふこと能はざる底の所。

㋔解夏。解夏、又は解制と云ふ、夏安居の制を解きて出遊期に入る、之れ七月十五日後なり、敕修清規に曰く、「解夏に曰く、七月十四日の晚念誦、湯を煎じ、來日陞堂、人事巡寮、煎點正に結夏の儀に同じ」と出づ。

㋕小參。祖底事苑に、「非時の說法之を小參と云ふ」と出づ、舊說に曰く、小參不時に之を講ず、鼓を鳴らすこと一通、其の規、大參より約す、故に小參と云ふ、大參は上堂なり、參は交參の義、勅修清規に曰く、「凡そ衆を集め開示する皆之を參と云ふ。」

㋖蠟人の氷。蠟は年臘をいふ解制受臘の日之を法歲といふ長幼(人)染淨(行)ありこれ其行の氷潔なるを云ふ。

㋚鵝護の雪。法苑珠林に昔日一の比丘あり鵝の命を護して身を惜まず我をして此の非法の事を造さしむと。雪は戒の潔白に喩ふる也。

㋛自恣の日。梵には鉢利婆剌拏(パリヤラド)と譯す、隨意の謂なり、結夏了りたる日、衆僧各自が其の罪過を說き、惡を改め善事を勤むるの日なり。

㋜白槌。衆白の義なり、白は事を告ぐるなり、謹んで大衆に白すと云ふが如し、卽ち世尊の律義、佛事を辨ぜんとするとき、必ず先づ衆白す、衆を糾むるの法となす。

㋝老凍膿。膿は膿血なり、虛堂錄鈔に、「蓋し老人の面に浮垢あり、而して凍膿の色に似たり。」

㋞圓陀陀地。自在圓轉の義、今は執制に拘はらぬを云ふ。

㋟曲彎彎地。弓を引いて曲ぐるが如きを云ふ、灣と類似の謂にして灣は水曲なり。

㋠黑漆漆地。黑うして正邪を辨じ難し。

㋡雲門初め睦州に參じ、門關を閉却せられて脚を折り、省悟して後、雪峰に參じて嗣法す、雲門宗を唱ふ。惜哉、日本に傳らず、而れども大師の語錄、今に傳はる、師は特に言句三昧を得て、妙唱奇絕なり。

て好からんには。」便ち下座。

㋐開爐上堂、今朝時節に應じて東福園爐を開く、三世の諸佛、㋑四聖㋒六凡、情と無情と盡く火焰裏に向つて、共に大法輪を轉ず、耳ある者は聞き、眼ある者は見る、灰頭土面、衲帔蒙頭、眉毛を照顧して炭裏に歸して坐す、且く道へ、人の爲めにする處ありや也た無しや、若し又會せずんば㋓丹霞和尙に問取せよ。

冬夜㋔小參、朕兆未だ分れず、虛空背面なし、一氣已に動いて萬象自ら崢嶸たり、晷運推移り、㋕日南長至、本分の田地に向つて向上の機を撥轉すれば、一段の家風、古今を輝騰す、釋迦彌勒退身するに路なく、㋖臨濟德山目瞪し口呿す。千里萬里片雲なし、擬議不來ならば㋗三十棒、正恁麼の時、諸人還つて委悉するや、群陰消剝し盡す、來日是れ書雲。

復た擧す、僧、㋘疎山に問ふ、「如何なるか是れ冬來の事。」山云く、「京師に大黃を出す。」拈じて曰く、「疎山明かに信旗を立て、密に陣敵を排す、鋒鋩を犯さず收放自在、然も是の如くなりと雖も、東福に若し冬來の事を問ふこと有らば、劈脊に便ち棒せん、何が故ぞ㋙殺人刀活人劍、具眼底は辨

㋐開爐。十月一日に爐開きの式を、禪門には行ふときに上堂す、故に名あり。
㋑四聖。聲聞、緣覺、菩薩、佛。
㋒六凡。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。
㋓丹霞。木佛を燒く話にて名あり、芙蓉楷祖に嗣法す、曹洞門下の傑出なり。
㋔冬夜。冬至の前夜也、此の夜慈明和尙は引錐せし因緣あり、幻住清規に「冬夜には土地堂念誦を爲す云々」と出づ。
㋕日南長至。書言故事十に曰く「秋分より日南陸に行き、冬至に至りて日南に極まる。」
㋖臨濟。諱は義玄と云ふ、黃檗の法を嗣ぐ、臨濟宗の祖なり、機鋒嚴峻、智見卓越、恰も將軍の機あり、臨濟錄廣く世に提唱せらる、七代目にして楊岐出で、的々傳來して妙心の關山を出し、後又白隱を出し

取せよ。」

冬至上堂、寒暑變遷して一陽來復す、百昌萠動して「ことやわいはな」劫外花を開く、拄杖を竪起して曰く、「老僧が拄杖子長きこと多少ぞ。」良久して曰く、「一冬二冬叉手當胸。」

㋙臘八上堂、黃面老子、正覺山前、謾に明星を覩て眼睛を打失す、古より今に至つて虛を承け響を接し、眼裏に沙を撒す、漏逗少からず、畢竟㋚作麼生、各々請ふ殿に上りて炷香禮拜せよ、宜しく眼を著けて看るべし、黃面老子面皮厚きこと多少ぞ、下座。

除夜小參、一機未だ露れず、毗盧元是れ凡夫、萬法揪然たり、㋛普賢其の境界を得、徧界曾て隱さず、故を改め新を換ふ、東村王老竹を爆して錢を燒く、神を驅り鬼を逐ふ、千聖も手を拱し、天魔も蹤を潛む、全體恁麼にし來り、全體恁麼にし去る、步步實地を踏み、句句根源を透り、箇の安排を通じ、箇の時節に應ず、驀に拄杖を拈じ卓一下して曰く、「還つて委悉すや、一聲雷發動すれば、蟄戸一時に開く。」

復た擧す、僧、㋜香林に問ふ、「如何なるか是れ衲衣下の事。」林曰く、「臘

て今日の隆盛を見、同じく楊岐と兄弟なりし黃龍は、的傳して建仁榮西に至り、天台に其の法を傳ふ。
㋗三十棒。古來より道ひ得るも三十棒、道ひ得ざるも三十棒とあり、棒にて亂打されるの義なり、此の棒に罰棒と勵棒とあり。
㋘疏山。撫州の人、匡仁禪師と云ふ、法を靑原下五世洞山良价禪師に嗣ぐ、五燈會元十三卷に出づ。
㋙殺人刀活人劍。無門關州勘庵主の話の無門和尙頌に曰く、「眼は流星、機は掣電、殺人刀、活人劍」とあり。
㋚臘八。十二月八日のこと、此の日大聖世尊は一見明星して大悟せられ、有情非情同時成道と一人獅子吼せらる、故に今日に至る、禪門は世尊の菩提樹下の勝躅を慕ひて一七日

月の火山を燒く。」拈じて曰く、「香林關捩を撥轉し、路頭を踏翻す、這の僧古に耀き今に騰る、歸家穩坐、且く道へ、如何か是れ歸家の一句、覿面若し宗正の眼なくんば、頭を回らして只だ見る翠山巖。

上堂、㊁十方佛土の中唯だ一乘の法のみあり、更に喚んで禪道佛法と作し得るや。若し作し得と言はゞ一雙の眼睛を打失す、若し作し得ずと言はば、千古の下人の笑端と作らん、本色行腳の人は須らく行腳の眼を具して始めて得べし、且く道へ如何なるか是れ行腳の眼、行いては到る水の窮る處、坐して看る雲の起る時。

上堂、棒頭に取證するも㋕塹に落ち㋖坑に墮つ。㋗喝下に承當するも虛を承け響を接す、向上向下轉た更に瞞頇、妙と說き玄と說く和泥合水、正恁麼の時、行いて塵を動さず、語りて唇を動さず、直に須らく大休大歇大安樂の場に到るべし、若し也た會せずんば、當來の彌勒慈尊に問取せよ。

上堂、萬機不到、千聖不携、要津を把斷して凡聖を通ぜず、然も是の如くなりと雖も、兎れず一線道を放ち、第二義門に向つて無言の處に言を演べ、無相の中に相を現ず、始終一貫前後差なし、恁麼の告報、諸人還つて甘ふや、㋙三生六十劫。

上堂、本色の衲僧家は須らく㋚行腳の眼を具すべし。若し未だ行腳の眼を具せずんば、二に落ち三に落ち了れり。且く道へ、作麼生か是れ行腳の眼。良久して曰く、「朝には東南を看、暮には西北を觀る。」

上堂、擧す㋛古德の云く、「一丈を說得せんより、如かず一尺を行取せんには、一尺を說得せんより、如かず一寸を行取せんには。然も是の如くなりと雖も東福は然らず、說も又說き得ず、行も又行じ得ず、何が故ぞ、意を得言を忘るも、猶ほ家醜を揚ぐ、寧ろ舌を截る可くとも㋜國諱を犯さじ。

上堂、靈山獨り㋝飲光に付し、少室可祖に單傳し、㋞黃梅半夜に衣を授く、㋟臨濟行に臨んの接心を修し、以て法乳の恩に報ゆるものとす。

㋑作麼生。怎麼生、做麼生、俱麼生、とも書く、支那の俗語にして眞の音は「つあ(作)、も(麼)、すゐん(生)」を發音の訛りにてそもさんと讀む、さーどうじや直に言へとの詰問詞なり。

㋒普賢。圓覺の疏に、圭峰曰く、體性周遍を普と云ひ、緣に隨つて能く成ずるを賢と云ふ。

㋓香林。青原下七世雲門宗の祖雲門の法嗣なり。

㋔十方佛土中唯有一乘法。法華經方便品に出づ、一乘法の下に無二亦無三とあり、要は方便說を採らざるの謂。

㋕塹。塹と同じ、塹は城を遶るの水。

㋖坑。阬なり、又壑なり。

㋗喝。此の字は叱咤の意にも用ひられ、又は言語思量の及ばざる事を示す爲に用ひらることありて、其の意味時により異なる、例せば臨濟には四喝あり、曰く、或る時の一喝は金剛王寶劍の如く、或るときの一喝は踞地金毛師子の如く或るときの一喝は探竿影草の如く、或るときの一喝は一喝の用を作さず云々と出づ。

㋘三生六十劫。遠うして遠しの謂を云ふ。

㋚行腳。佛道を修行の爲めに行雲流水の身となるを云ふ、祖庭事苑に、行腳と謂ふは、鄉里を遠離して天下に腳行し、——求法證悟するなり、所以に學に常師なく云云」とあり。

㋛古德。唐の大慈寰中禪師の語なり。修行の綿密な工夫と說法の不容易とを云ふ妙行と妙用となり。(傳燈九に出づ)

㋜國諱を犯さず。俗、九峰に問ふ、「先師(石霜禪師)、齒を敲む意旨如何。」峰曰く、「我れ寧ろ國諱を犯さず云々。」

㋝飲光。西天第一祖摩訶迦葉尊者を云ふ、姓は波羅門、梵には迦葉波、此處に飲光勝尊と云ふ、生るゝとき、金光室に充つ、光り盡く尊者の口に入る、因りて飲光と名く世尊より正法眼藏を傳授せられ、弟子阿難に法を傳へて慈氏の下生を待つと云ひて鷄足山に入る。

㋞黃梅半夜。黃梅五祖(淺磨より五傳の祖)大滿弘忍禪師、黃梅に住せらる、故に名あり、盧行者に夜半衣鉢を傳へたる因緣あり。

㋟臨濟行に臨んで付屬す。臨濟錄に曰く、「師遷化に臨む時、坐に據つて云く、吾が滅後、吾が正法眼藏を滅却することを得ざれ。三聖出でて曰く、爭てか敢て和尙の正法眼藏を滅却せん。師云く、已後に人有り、汝に問はんに、他に向

で付屬す、東福門下密傳付屬底の事なし、今日普く諸人の爲めに這箇の事を直示す、且く道へ古人と優劣ありや、各々宜しく眼を着けて著るべし。

上堂、靈鷲峰前白雲靄靄、少室巖畔白雪皚皚、蓬に拄杖を拈じ卓一下して云く、「瞿曇說不盡の處、祖師提不起底、山僧衆に對して八字に打開し了れり。諸人還つて見るや、」又卓一下して下座。

上堂、擧す ㋓乾峰、衆に示して曰く、「一を擧して二を擧することを得ざれ、一著を放過すれば第二に落在す。」雲門、衆に示して曰く、「昨日人あり天台より來りて、卻つて徑山に往き去る、㋔峰維那を喚んで云く、「來日普請することを得ざれ」と。拈じて曰く、「乾峰無陰陽の地に箇の消息を露はす、雲門袖裏に金鎚を藏す、高く祖印を持して頭正しく尾正し、始末相符す、敢て大衆に問ふ、這般底ありや、若し無くんば歸堂喫茶せよ。」

上堂、擧す、僧、㋕九峰に問ふ、「如何なるか是れ不遷の義。」峰云く、「東生の明月、西落の金烏。」僧云く、「師に非ざれば委せず。」峰云く、「理當りて卽ち行せん。」僧 ㋖禮拜す、峰便ち打す。僧云く、「仁義道中禮拜何の咎かあらん、」峰曰く、「來處明かならざれば須らく嚴令を行ずべし、」拈じて曰く、

つて什麼とか道はん。三聖便ち喝す、師云く、誰か知る吾が正法眼藏遺の諸驢邊に向つて滅却することを。言ひ訖つて端然として示寂す。」

㋓乾峰。洞山禪師の法嗣。

㋔維那。次第と譯し、悅衆と譯す、次第とは次第秩序あるなり、悅衆とは事を辨じ衆を悅ばしむるなり、寄歸傳に曰く、「梵には羯摩陀那、唐には綱維と云ふ、而も禪規には維那と云ふは悅衆と云ふは義に於て未だ盡きず」とあり。

㋕九峰。瑞州の人、普滿禪師と云ふ、青原下五世、洞山良价禪師に嗣ぐ、五燈會元十三卷に出づ。

㋖禮拜。梵語には邪膩悉羯羅、此に禮拜、又は和南と譯す、是に三等あり、一に頭至地、二に屈膝頭不至地、三に口禮となり。

「九峰的を以て機を奪ふ、嚴令當に行ずべし、這の僧劍刃上に向つて能く曲直を辨ず、互に肝膽を傾けて各々毫芒を出す、古に騰り今出で、聲に騎り色を蓋ふ、大衆還つて委悉すや、試に請ふ辨別して看よ。」

上堂、第一句下に薦得すれば、佛祖も命を乞ふ、第二句下に薦得すれば人天膽落つ、第三句下に薦得すれば虎口に身を橫ふ、毗盧頂を坐斷して釋迦文に稟けず、聲色を帶びず、見聞に落ちず、東福敢て囊藏被蓋せず、八字に打開し了れり、遂に ㋗拂子を擧して云く、「還つて見るや。」擲下して曰く、「分明に記取せよ。」

上堂、絃を動ずれば曲を別ち、葉落ちて秋を知る、向上の鉗鎚を提げ、㋘作家の爐韛を開く、德山の棒、手を下すに處なく、臨濟の喝口を啓くことを得ず、正恁麼の時、如何か信を通じ去らん。良久して云く、㋙「吃嘹の舌頭三千里、壺中の日月自ら分明。」

上堂、月一を生ず、乾坤廓落として大方外なし、月二を生ず、㋚師子奮迅、㋛象王回旋す、月三を生ず、蟭螟眼裏大鵬身を翻す、所以に道ふ、向上の一路千聖不傳、學者形を勞すること猿の影を捉ふるが如し、拄杖を拈

㋗拂子。「釋尊在世に諸の比丘、蚊虫の爲めに食はれて身體痒を發す、故に衆實を柄となし犛牛の尾を拂となす云々」毘奈耶雜事に記す。

㋘作家。「さつけ」と讀む、禪門にては斯道に老熟せし人を呼ぶ、臨濟錄に作家戰將とあり。

㋙吃嘹。祖庭事苑に曰く、「言只纖纖として紆戾するなり、其の舌を纖ふとは猶ほ舌頭を縮却するが爲めなり」と在り。

㋚師子奮迅。大般若經五十二卷に曰く、「獅子奮迅三昧とは諸の垢穢に於て縱に住し、又衆拾すること師子王の自在に奮迅なるが如し。

㋛象王回旋。華嚴經四十六卷に曰く、「爾のとき文殊師利、顯現の菩薩の爲に象王の廻るが如く、諸の比丘を顧視す。」

㋜漏逗。檢束なき場合と、物の

じ卓一下して云く、「意氣ある時意氣を添ふ、風流ならざる處也た風流。」

上堂、妙性圓明にして諸の名相を離る、本來世界衆生あることなし、衆生妄に因つて生あり、生に因つて滅あり、生滅を妄と名く、滅妄を眞と名く、喝一喝して曰く、「黃面老漢、當時若し遮の一喝を下し得ば、許多の ㋐漏逗を免れ得ん、何が故ぞ、既に是れ圓明にして相を離る、妄何れより起り眞何れより生ぜん、若し恁麼に見得徹し去らば、山河大地、萬象森羅、四聖六凡、情と無情と一揑を消せず、敢て大衆に問ふ、卽今是れ什麼の時節ぞ。」拂子を擧して云く、「盧舍の本身全體現ず、當機直下に纖毫なし。」

上堂、擧す ㋑金峰、衆に示して曰く、老僧二十年前老婆心あり、二十年後老婆心なし。」時に僧あり、出でて問ふ、「如何なるか是れ二十年前老婆心ある。」峰云く、「凡を問へば凡を答へ、聖を問へば聖を答ふ。」僧云く、「如何なるか是れ二十年後老婆心なき。」峰云く、「凡を問ふに凡を答へず、聖を問ふに聖を答へず、」拈じて曰く、「金峰大機を顯し大用を發す、這の僧、玉轉じ珠回つて正眼を流通す、然も是の如くなりと雖も、㋒東福は然らず、當時恁麼に問ふものあれば、劈脊に一棒を與へん、何が故ぞ、達者先づ知り、賢明早く悟る、久立㋓珍重。」

㋑金峰。撫州の人金峰に居す、名を玄明、號を從志と云ふ、洞山の嗣、曹山本寂禪師の法嗣なり。

㋒東福。聖一國師自らを呼ぶに東福寺に住せしに因る、例せば希運禪師は黃檗山に住す、故に黃檗と呼ぶが如し、本朝にあつては山號を喚はずして多くは寺號を呼ぶ慣例なり。

㋓珍重。猶ほ能く保重を加へよと云ふが如し、或は請ふ自愛を加へよ、能く消息せよ保惜すべしと同じ謂ひなり。

上堂、是れ目前の法にあらず、亦心外の機に非ず、直下に承當を絕し ㋔當陽向背なし、祖印を提持し宗乘を荷負す、覿面相呈して更に餘事なし、正恁麼の時作麼生、向上の一竅を撥開して、千聖齊しく下風に立つ。

上堂、孤峰頂上雲に眠り、十字街頭に手を垂る、全機大用觸處見成、澁目の淸光今古を貫通す、一塵法界を含み、一念十方に遍し、淨裸裸遺すことなく、赤洒洒全く露はる、出沒自在織塵を隔てず、然も是の「如くなりと雖も、更に須らく ㋕金剛王寶劍を揮つて、㋖直に根源を截つて當陽に顯露すべし、㋗不らざれば也た ㋘周由、正恁麼の時、一物に依倚せず、一句如何か道はん、萬象の中獨露身、百草頭邊著著親し。

㋔當陽。卽今を見よの義なり。

㋕金剛王寶劍。臨濟錄に曰く、「或るときの一喝は金剛王寶劍の如く云々」とあり。

㋖直截根源。證道歌に曰く、「直に根源を截るは佛印する所、葉を摘み枝を尋ぬるは我れ能くせず云々」と出づ。

㋗不者。「しからざれば」と讀む。

㋘周由。遑遽の義、今は遠くして遠しの義。

㊀法語

空明㊁上人に示す

祖師の直示、殊方便なし、諸緣を放下し萬事を休息して、晝三夜三鼻端を守看し、纔に境界の差別に涉るの時、只だ㊅話頭を擧せよ、佛法の想を作さず、破除の想を作さず、心を存して解の等しきことを用ひず、情疑殆を生ずることを用ひざれ、理路なく滋味なく鐵饅頭の如く、單刀直入、異想に涉らず、悠久歲月、自然に恰も睡夢の惺むるが如く、蓮華の開くが如くならん、正當恁麼の時、從前の話頭、只だ是れ門を扣くの瓦子、那邊に拋下して卻つて祖佛の機關語句を看よ、皆是れ㊁小兒の啼を止むるのみ、向上の一路、更に一線を通せず、凡聖の要津を截斷す、學者形を勞することは猿の月を捉ふるが如し、謂つ可し、自身を忘卻して外に向つて馳求すと、何の日か求め得べけんや、蒲團上に安坐して晝夜成佛を求め、生死を厭卻し菩提を證せんと欲す、皆月を捉ふる猿の如し、若し眞實相爲にする處を欲せば、只だ是れ無心是れ道なり、亦木石の如きに非ず、靈靈として常に知り、了了として分明なり、視聽尋常にして更に委曲なし、空明上座晝夜㊄面壁、語を求めて㊆警策とせんとす、家風を惜まず、筆に信せて之を書す。文永四年月日。

智禪上人に示す

祖師門下、直指人心、言說方便、特地に乖張す、見聞に墮せず、聲色に從はず、百草頭上に縱橫、萬象堆裏に坐臥す、㊇出息塵緣を假らず、入息陰界に繫かれず、盡大地解脫門、摠刹海眞實法なり、通方の作者は擧著すれば歸を知る、初心晩學は云何が湊泊せん、若し未だ薦得せざるに、且く第二義門に向つて一線道を放ち、無言の處言を演べ、無相の中に相を現せん、如何なるか是れ無言の處に言を演ぶ、磨盤空裏に走る、如何なるか是れ無相の中に相を現ず、㊈西河に師子を弄ず、日用緣に差別の境界に應ずる時、破除の想を用ひず、玄妙の會を作さざれ、理路なく滋味なく、晝夜寢食を忘じて此の話を看よ、若し亦未だ薦得せずんば、更に第三頭を說かん、心と說き性と說き、玄と說き妙と說く、一塵法界を含み、一念十方

㊀法語。「前輩有道の士、佛祖不傳の妙を提持し、學者を敎語するなり」と凝絕錄に出づ。

㊁上人。摩訶般若經に、「佛言はく、若し菩薩一心の阿耨菩提を行ひ、心散亂せず、是を上人と名く。」然れば上人とは內に智ありて外に勝行あり、人の上に在るが故に云ふ。

㊂話頭。古則公案いこと、太明錄七に曰く、「話頭之れ道に非ず、門を敲くの瓦子のみ。」

㊃小兒止啼。涅槃經第二十嬰兒品に曰く、「彼の嬰兒の啼哭するときの如き、今母卽ち揚樹の黃葉を以て之に語つて曰く、啼くこと勿れ、啼くこと勿れ、我れ汝に金を與へん、嬰兒見すりて眞金の想を生ぜん、便ち止んで啼かず云々。」

㊄面壁。普勸坐禪儀に曰く、「少林の心印を傳ふる面壁九年」とあり。魯祖和尙は凡そ僧の來るを見る、卽ち面壁すとあり、現今にても曹洞門下曉天の座禪には面壁す。

㊅警策。大潙山は警策一篇を著はして學者を策進せしむ、今日禪門に用ふる木製の警策は、學者の睡魔を打し、或は怠惰を戒むるの法器なり。

㊆出息塵緣を假らず云々。西天二十七祖般若多羅尊者は、逢磨大師の師なり、一日王室の供養に招かれ、讀經致さずして曰く、出息塵緣に涉らず、入息陰界に居せず、常に如是經を轉んず云々」と出づ。

㊇西河の師子。會元十一に、「汾陽竺照禪師上堂曰く、汾陽門

に遍し、故に古者の道く、「無邊の刹境、自佗毫端を隔てず、十世古今始終當念を離れず、」禪上人紙を袖にして語を求む、筆に信せて老草す、一見の後丙丁に付せよ。

智目禪人に示す

佛祖以來、大凡人を接するに ❶三種の機あり、若し是れ第一機は更に方便なく、義理なく、話會し難し、若し此に於て直下に承當せば、❷庭前の柏樹子、❸麻三斤、❹一口吸盡西江水と更に差別なけん、若し是れ第二機は、只だ是れ問端を發起し、手に隨つて點破す、則ち臨濟の黃檗に問うて❺六十の烏藤を喫するが如し、若し是れ第三は、泥に入り水に入り、箇の注腳を下して人の眼目を瞎して胡種族を滅す、只だ是れ眞正の衲子は、直に須らく撥卻して、活句に參じて死句に參せざるべし、目上人、人と爲り純實なり、若し能く活句上に薦得せば、祖佛の與に師と爲るに堪へん、老僧家風を惜まず、三種の機を示すと云ふ。

如❼上座に示す

佛佛手を授く唯だ佗にあらず、只だ是れ自己恩力の處、方木圓孔に投じ、

下西河の獅子あり、門に當つて蹲坐す、但だ來者あれば即ち復た咬殺す云々。」

❶三種の機。學人の根機に上根と中根と下根との三種あり。

❷庭前柏樹子。趙州に僧問ふ、「如何なるか祖師西來意、」門云く、「庭前の柏樹子。」

❸麻三斤。洞山に僧問ふ、「如何なるか佛、」山曰く、「麻三斤。」

❹一口吸盡。龐居士、馬祖に問ふ、「萬象と侶たらざるもの是れ什麼物ぞ、」祖曰く、「汝が西江水を一口に吸盡せんを待ちて即ち答へん。」

❺六十烏藤。六十の痛棒のこと、臨濟、黃檗の會下に打坐すること三年、師兄の睦州尊者の教を受け入室す、臨濟如何なるか佛法的々の大意を黃檗に問ふこと三度、三度又痛棒を受く。

十塊泥裏に洗ふ、祖祖相傳ふ、空谷聲に答ふ、南を呼んで北と作す、橫三豎四、坐一走七、未だ語訛を免れず、若し又一氣未だ兆さざる以前、杳冥恍惚たるに向つて信得及するも、尙ほ第二頭にあり、何に況んや更に混沌已に分るるの時に於て獲得し去らば、第三機に落在せん、自ら眼を著け去つて、直に佛祖の理致機關を超ゆべし、所謂佛の理致を超え、荊棘林を過得し、祖の機關を越え、銀山鐵壁を透得して始めて向上の本分あることを知りて、坐を得て衣を披し、人の爲めに黏を解き縛を去らん、如上座、座下に在りて積んで年あり、而今鄕に歸る、呼喚すれども回らず、羅籠すれども住まらず、赤腳にして歸り去る、故に筆に信せて書して之を送る。

覺實上座に示す

祖師の宗風、向上の一著、大丈夫の氣槩を具して那邊に承當し、隨處自在妙用無礙なり、金剛王寶劍を揮ふて語訛を坐斷し、殺活の杖子を用て是非を勦除し、棒喝時に隨うて坐一走七、是の故に黃面老師、三百餘會、❸四衆❷八部を集めて能く法王と爲りて、法に於て自在なり、碧眼の初祖、九年面壁、後學を提諭し、外諸緣を息めて內心喘ぐことなく。心墻壁の如くにして以て道に入る可しと云ふ、此れ等は皆是れ始めに方便を設け、後に自ら證知せしむ、諸緣放下、萬事休息、是れ第一の方便なり、若

❼上座。尙座とも書す、梵に悉替那と云ふ、上に更に人なきを上座と名く、阿毘達磨集異門足論に曰く、「上座とは生年の上座、世俗の上座法性の上座、と三種あり。」

❸四衆。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。

❷八部。天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽。

し此の方便に滯らば便ち不是、事已むことを得ず、老婆心、和泥合水、椚を以て椚を拔く、機を以て機を奪ふ、千變萬化、七縱八橫なり、若し口頭に則を取り、言に隨つて解を生じ、陰界に墮在せば、猶ほ方便を知らず、況や正宗をや、實上座、性を禀くる凡ならず、人と爲り純至なり、語を求めて警策とせんとす、故に書して之を與ふ。

禪人に示す

一頂顎上腳跟下、切に須らく薦取すべし、此の中一條通天の大路あり、普賢の行願を立てず、文殊の機智を說かず、毗盧を把斷して凡聖迹絕す、然して後に大機大用觸處に現成せん、百草頭上に權と說き實と說く、聲色堆裏に照を立し用を立す、接手方便自由自在なり、若し明眼の人をして見せしめば、猶ほ半途に在り、也た是れ枷を擔ひ狀を過す、然も是の如くなりと雖も、須らく接手方便あることを知るべし、一は坐禪方便、二は直示方便、(ヒ)坐禪とは大定なり、直示とは大慧なり、蓋し空劫以前威音那畔は師無うして自ら發す、此等の方便なし、達磨の示す所の瞞付密證とは是れなり、空劫以後は、悟あり迷あり、問あり答あり、(ソ)師あり資あり、皆是れ接手方便なり。佛祖出興して理致あり機關あり、向上あり向下あり、明頭來暗頭合、日面佛月面佛、手に夜明の符を執りて金剛劍を提取す、作家の眼目機に應ずるの鉗鎚、言詮を用ひず機境を用ひず、利

(ヒ)坐禪。坐は漢語、禪は梵語なり、具に禪那と云ひ、正思惟と譯す。
(ソ)師資。師は授業師なり、資は弟子なり、資は取なり、師の教に從つて取りて之を行ふの義。

根上智は直下に透達す、謂つべし天の普く蓋ふが如く、地の普く擎ぐるに似たり、寬豁たること虛空の如く、遍照日月の如し、古人の云く(ツ)「黃梅會中七百の高僧、皆是れ佛法を會せる底、只だ(ネ)虛行者一箇ありて佛法會せざる底」と、是れは此れ直示底の樣子なり、若し亦坐禪の方便は、某人已に此に熟せり、老僧が舌頭を煩はさず、適々帋を袖にして語を求む、筆に信せて老草す。

又

空劫以前は師無うして自發し、佛祖以來は師に因つて打發す、所謂自發打發は皆是れ人に接するの方便なり、蓋し從上佛祖の相傳ふる自在妙用、皆是れ機語投契のみ、達磨大師海を渡り(ナ)江を過ぎ、面壁端坐隻履獨歸す、又是れ機語投契邊の事なり。上人投契せんと欲せば、直に須らく生死の根株を誅し、賢聖の窠窟を破して淨裸裸赤洒洒、一物に依倚せずして始めて小分の相應あるべし、老僧與麼の說話、且く道へ、投契ありや投契なきや、若し能く撿點得出せば、謂ふこと莫れ、老僧汝が爲めに說かずと。

藤丞相道家に示す

此の段の大事は、自己の腳跟下を彰はす、淨裸裸赤灑々、沒可把、水上に葫蘆を放つが如し、佗を拘牽すること得ず、佗を惹絆すること得ず、云云、具眼の漢、大爐鞴を設けて、百煉千煅、一棒一喝、

(ツ)黃梅。黃梅山にして、達磨より五傳の祖大滿弘忍禪師を指す。
(ネ)虛行者。姓盧氏なるが故に云ふ、黃梅の法嗣にして慧能大鑑禪師を指す。
(ナ)過江。楊子江。

七顛八倒、淨に入り穢に入り、礙せず改めず、一々歴試して方に這の入頭の處を得て、少しく親近の分あらば、縱ひ能く之れを得るも之れを守り難く、之れを守るも之れを行じ難し、須らく知るべし此の事、直に是れ決定の志を具して、千差萬別の處に向つて、主宰となることを得べし、此降の外、畢竟什麼をか作さん。禪定殿下、我を閑靜の處に訪ひ、或は顯密性相の原を尋ね、波のごとく騰り、嶽のごとく立ち、或は直指單提の妙を問ひ、瓶のごとく瀉ぎ雲のごとく興る、余二十年の學力を以て僅に能く其の量に充し、其の飲を恣にするのみ、恁麼に筆を迅にす、請ふ、自ら看取せよ。

㊀偈頌

㊁佛鑑老師の生日を賀す

纔に胞胎を出で十方に歩す、遠く來り海を斟りて香湯を獻ず、嫌ふことなかれ惡水慕頭に灌ぐことを、往昔の毒龍毒最も强し。

新命天王の智長老を賀す　㊃別山

夙債未だ酬いず眞の鐵牛、身を横へ重を負うて鄽市に入る、腳頭踏斷す六門關、限りなき清風步趾に隨ふ。

新命定慧圻㊄長老を賀す　㊅方庵

春空春水蒼龍起る、雲衢に飛び上りて步步通ず、風雨私無く隨處に施す、須らく知るべし四海一雷同。

㊆蘭溪笋を送る韻を和す

竹林無數龍孫出づ、隱約春深く獨り門を閉す、惠意溫和にして頭角を寄す、憐む可し天性恩を知らざることを。

㊀偈頌。梵に伽陀、此處に孤起、又は玄妙と云ふ、重頌ならざるを孤起と云ひ、亦風頌と云ふ、西域には寄に偈と云ふ、又は偈他とも云ひて、伽陀を音訛したるなり。

㊁佛鑑。無準禪師の號なり、禪師の行狀初に載す。

㊃別山。佛鑑禪師の法嗣にて天童山に住す。

㊄長老。凡そ道眼を具し、尊ぶべき德ある者を號して長老と云ふ、西域に道高く臘長する須菩提等を呼んで云ふが如し云々。

㊅方庵。佛鑑禪師に嗣法す。

ト兀庵最明平　チ元帥を印するの韻を和す

大機大用大根の人、鼻孔遼天獨露身、凜凜たる威風闘外に行る、五湖四海一天眞。

リ圓明藤丞相の韻を和し奉る

台星知んぬ是れ本文星、槐門を交照して家業榮ゆ、輔弼匪躬紫極を扶け、ヌ權衡手に入りて蒼生を惠む、靈山の付屬固に能く記す、雙徑の宗風已に輿に盟ふ、駟馬時時梵宇に臨む、林泉此れより淸平を樂む。

藤ノ丞相に示す

妙は佛祖不傳の處に在り、高く理致を超えて機關を去る、機關を去りて窠臼沒し、水は是れ水山は是れ山。

又

五葉花開く無根の樹、一陣の香風天地寬し、天地寬し春萬國、家門盛えて民物安し。

ヲ術士月潭頌を求む

月潭底無うして人に逼つて寒し、本命元辰自ら謾せず、淡薄の家風處に隨つて樂む、淸貧の生計只だ吾れ安す、尤も憐む月魂の遙漢を照すことを、且喜すらくは溪聲遠灘を度ることを、切に忌む聲に隨ひ仍ほ色を逐ふことを、直に須らく北斗南に面して看るべし。

ワ天王を送る

處處の叢林妖怪多し、謾に平地に於て干戈を起す、天王住山の斧を提起して、南北東西凱歌を奏す。

子曇侍者か韵を次ぐ

絕學の道人カ帝寰に入る、玩水と游山とに隨はず、佛祖を烹る鉗鎚の手を具して、知んぬ是れ時に應じて鐵關を破す。

タ率庵を悼む

癡坐頽然として轉身を解す、鄧峰山畔變通新なり、千年の琥珀玉土に埋む、半夜珊瑚月人を照す。

レ寧レ知客を送る

從來道地は是れ蘇州、五馬の知音笑つて點頭す、十字街頭に ソ鋪席を開く、直に高價を須て輕く酬ゆこと莫れ。

ヘ隆溪。宋國の人、北條時頼公の請を受け、相州建長寺に住す、大覺禪師と賜號せらる。

ト兀庵。諱は普寧と云ふ、宋國の人、東福寺や建長寺に客席たり、爲めに衆僧集まる、後歸國するに北條時頼の使に逢らる、請して宗覺禪師と云ふ。

チ元帥。書言故事に、大將を元帥と云ふとあり、此のときの將軍は宗尊親王にして、時頼は其の執權なり、故に元亨釋書には副元帥平の時頼と出づ。

リ圓明。圓明寺殿、別に後一條殿とも云ふ、藤原道家公第三子にして一條家の祖なり、官には左大臣從一位攝政關白に昇進後出家して法名を行空、又は行雄と云ふ、六十二歲にして薨去す。

ヌ權衡入手。禮記に、「權衡は其の平を取る、故に先王是を貴ぶ、」文選の注に、「衡は平なり、權は重なり、權に任じて物を均しくして輕重を平ぐ」とあり、今此處にては天下の政務を柄るの謂なり。

ル藤丞相。圓明寺殿を指す。

ヲ術士。宇彙に術は道藝なり、按するに本文の術士は占卜者を謂ふ。

ワ天王。別山禪師を指す。

カ帝寰。帝都を云ふ。

タ率庵。諱は梵琛、光佛照に嗣ぐ、卽ち大惠禪師の孫なり。

レ寧知客。寧は杭州の人、退耕能寧禪師を云ふ。

レ知客。職名なり、賓客を接して來意を上方丈に、又は衆僧に報ずる役なり。

ソ開鋪席　出世開堂のこと、今此處にては蘇州府報國光孝寺を指す、是れ寧知客初開堂の地なり。

ツ蓬瀛。蓬も瀛も共に仙境なり。

堯知客を送る

當年臂を掉つて ㋐蓬瀛に出づ、㋑還丹を秘畜して直に今に至る、定慧門中に一粒を出さば、何ぞ憂へん鐵を點じて金と成さざることを。

梅花を剪る

陰陽の土地を假りて生せず、心に得手に應じて剪裁し成す、暗香些兒許りを缺くと雖も、松筠と弟兄と作るに堪へたり。

僧を送る

秋空水の如く水空の如し、衲子茲の時活路通ず、直に孤峰々頂上に向つて、草庵盤結して家風を展べよ。

㋑還丹。大藏法數五十九に還丹の圖あり。

佛祖㋐贊

達磨

海に航し遠く來つて筋力を費す、㋒梁王動せざること盤石の如し、長蘆を抹過して少林に入る 一花五葉甚だ狼藉。

又

葦を折り江を渡りて人知らず、少林九年空しく面壁、隻履歸らず西竺乾、大虛抹過して東國に入る。

又

草に入りて人を求むる處、相逢ふ斷臂の客、看よ佗位に依る時、標格と爲すに足らず。

又

祖師西來、少林一歇、天下の衲僧、之が橛を拔かず。

魚籃

㋐贊。叢林盛事に曰く、「前賢佛祖を贊するの偈句幷に自贊の語なり、各々吟式あり。」

㋒梁王。梁武帝のこと、俗に佛心天子と云ふ。

㋓寒山拾得。唐の高宗の代に、天台山に豐干禪師あり、偶々山中を經行して赤城に至る、道の側に數歲の一子あり、師之を携へ歸りて典座に付し、拾得と名づく、後に一貧子あり、寒嚴より來る、寒山と云ふ、最も詩を能くす、常人に非ず、代宗の時に二人相供に寒嚴に遁れ去れり、行く處を知らず、世に流布せる圖中、箒を持てるは寒山書卷を展べて立てるは拾得なり。

這箇の女人、魚を海濱に求む、籃を携へ拾ひ得て、綸を垂るることを用ひず。

㈧ 寒山拾得

路頭に拾ひ得て族親なし、直下に空を指して半途に在り、眉毛を剔起して相看て笑ふ、寒山歸り去つて工夫沒し。

㈨ 達磨

祖師西來、一字を說かず、聲前の語句、紅爐雪を點ず。

㈨ 達磨。西天の末葉にして東土の初祖なり。禪宗これを以つて第一祖と爲す。故に祖師西來と、一度嵩山に入りて又一字を說かず、慧可一人を得て安心す、慧可雪中に立ちて得法す、これあとの三句あり。

自贊

東山長老の請

老漢百醜千拙、擧動すれば輒ち勘過せんことを要す、看よ毗盧華藏海、幾許の風波をか鼓起す。

㈠ 藏山長老の請

生前の面目、色に非ず心に非ず、手裏の竹篦、能縱能擒、龍淵の水を攪動して、波濤萬尋に揚る。

辨雅長老の請

萬象堆中半身を現ず、當陽に驗盡す作家の人、機語相投ずる處を知らんと要せば、垂下の鼻頭萬鈞重し。

智㈡ 侃侍者の請

觀面全く提ぐ栗棘蓬、應緣投契宗風を振ふ、等閑に噴嚏すれば乾坤動く、十世古今盡く透通。

任淵上座の請

老漢一生曲牀に坐す、烏藤拈起す沒商量、機前毫髮も存せざる處、倜儻分明に獨り自ら彰る。

孝仙の請

㈠ 藏山。諱は順空と云ふ、東福五世に住す。

㈡ 智侃。直翁と云ふ、東福寺十世に住す。

手に無毛の拂子を把りて、寥寥たる㋑宇宙に清風を起す、今を照し古を鑑む頂門の眼、天下悉く知る㋺草本同じ。

三林長老の請

普門禪寺の長老、口に信せて㋩胡說亂道、誰か知らん葛藤を打するに慣れて、終に人の好む所に隨はず。

然奇山の請

吾儂一段の風、佛祖通じ難かるべし、端なく手を垂るる所、天下草木同じ。

顯正堂の請

盡大地これ㋥般若の光、光未だ發せざるの時生佛なし、形容才に露はれ㋭此の道を傳ふ、舌本瀾翻して口沸くが如し。

張四綱の請

久能の門下、法の人に與ふるなし、篦を握り座に據る、近前すれば便ち瓚。

明辨庵主の請

秉拂緣に應じて說き、神仙妙訣あり、佛祖無住の心、是れ途轍を守るにあらず。

㋑宇宙　淮南子十一に曰く、四方上下之を宇と云ひ、往古來今之を宙と云ふ。
㋺草本同　無準師曰く、若し是れ經山ならば然らず草本天下同と佛鑑錄卷二に出づ。
㋩胡說亂道　胡亂と熟し、說道はとくともいふ也。反語にして意深し。
㋥般若。梵語「にるばーな」にして智慧と譯す。
㋭此道。禪宗の命脈にして、是れ佛道をいふ也。

又

本命元神教外の傳、臨機の投契那邊の先、知るべし竹篦手頭の主、問著すれば時に隨つて月天に上る。

國譯聖一國師住東福禪寺語錄　終

師範、東福堂頭長老に和南す、印上人來つて、書幷に前の一書及び寶塔を收む、一々領得す、甚だ不忘を感ず、第だ相去る事阻遠、卽答するに由無し、且つ知る墨福より東福に遷り、四名刹に住して、衆を安じ道を行ずる事を、誠に老懷を慰む、但だ恁麼に操守して、力めて此の道を弘め、一枝の佛法をして、日本に流布せしめば、眞に宗乘中の人たるに忝ぢざるなり、長老は禪敎兼通す、又能く踐履す、殊勝ならざることを患へず、只だ貴むらくは始終一節、介然として改めざる耳、此れ老僧が望む所なり、餘は它祝無し、多々大法の爲に自愛せよ、一々ならず。

大宋徑山住持圓照老僧師範書して、

日本東福堂頭爾長老に復す。

師範和南して承天堂頭長老に手白す、向に曾て書を收む、已に嘗て回答す。就て錦法衣堂頭有りて附去す、乃ち是れ從上來諸知識の傳ふ所の者なり、以て付授の妄ならざるを表はす、且知る、長老故國に還り、緣法殊勝にして、至る所、響きの如くに合す、更に宜しく此の道を以て力め行ふべし、吾祖の敎をして、在々處々、熾然として興らしめよ、此れ至祝を爲すなり、便風聊か眷々の意を復す、未間、切に宜しく大法の爲め保愛すべし、餘は一々ならず。

師範和南して、

承天堂頭長老に手白す。

了惠頓首再拜、

東福堂上禪師法兄大和尙侍者に上覆す、卽日春事闌を告ぐ、恭く惟れば、尊候、萬福を相くること有り、了惠縞審、道福を以て住山す、王臣贊護、聲稱奕々として、遠く中夏に被ると、乃ち知る、先師の左券、全く老手に歸することを矣、欽羨々々、切に乞ふ、師門の爲め、益々珍護を加へ、以て眞風を永くせよ、不宣。

大宋寶祐乙卯三月二十五日

天童初祖比丘了惠頓首再拜。

了惠頓首再拜して、

建仁堂上聖一賢屬禪師侍者に上覆す、卽日仲夏之月、恭く惟れば　尊候動止、神龍冥相の祝を納め、了惠曩に大國の回舶に因りて、嘗て尺書を布き、幷に正績　施經を蒙る石刻を以て附納す、相望

むこと萬里、凡格に登徹するや否やを知ること莫し、神足元空二兄の提唱の妙語を傳授するを見る毎に、稟然として　老圓照の氣味有り、人をして毛骨を森聳たらしむ、中間且つ聞く錫を名刹に移すと、恨むらくは親しく法會に臨むことを得ず、但だ能く斫額、東望する也、了惠茲に風便に因つて、字無かるべからず、但だ客邸物の芹倚を見る無し、復狀を需めて未だ間あらず、萬告大法の爲め、後學の爲め强ひて復せよ、不宣、了惠頓首再拜上覆。

右語錄國師年譜を以て、再刊助緣の餘資、重刻する者也。

元和六年庚申臘月下浣

見二東福集一雲叟守藤之れを記す。

惠日國師、楊岐一宗を振起し、雙徑の正脈を流傳す、提唱語錄、舊刻漫漶、重ねて釐整を加へ、刊行流通、南谷の一衆、各衣資を抽んて、板を常樂禪庵に置く、伏して願はくは佛種、世々に斷えず、光明幡を建て、祖印親傳して、人々無盡藏を開かんことを。

文政丁丑十月濟北劣孫令材識す

聖一國師住東福禪寺語錄序

佛唯說而已、不二結集矣、結集者、諸子之事也、我慧日祖說法、可レ盈二海藏一焉、諸子之多、宛如二耆闍一焉、然皆早歸化於四方、不レ遑二結集一矣、有二忠首座者一、謂レ予曰、吾祖貫花、無二綴緝者一、歲已半百、更加二數年一、恐徵言之絕乎、師有レ意哉、予曰、兄與レ予共貽厥也、我言結集者、諸子之事也、予豈敢乎、曰、結集者誰、曰、妙德大龜及慶喜也、曰、慶喜嗣二阿誰一、曰、嗣二大龜一、曰、寧非二孫謀一乎、曰、似則似矣、是則未レ是也、曰、若有レ似者、亦庶幾焉、予不二得而拒一、纂集竟、告曰、今之所レ得者、蠹簡殘編也、豈能共收並畜乎、所謂仙官勅二六丁一、雷電下取將、流落人間者、太山一毫芒也耳矣、方今天下緇衣十襲惠日手澤者多矣、兄者遍參人也、或江或湖、剽聞切問、粃二此冊一焉、元德三年二月初五日、三聖孫師錬敬序。

聖一國師住東福禪寺語錄

三聖嗣孫　師錬　校纂

元旦上堂、禪非意想、立意乖宗、道絕功勳、建功失旨、新年消息、不動纖塵、應節納祐、處無不宜、若作佛法商量、喚鐘作甕、若作世諦流布、平地喫交、大衆還委悉麽、孟春猶寒、歸堂喫茶。

無準忌拈香、我昔行脚、航海梯山、拖泥帶水、徧歷南方、當時五髻峰頭、不覺撞著這老師、遭儂毒手、無回避處、眼上安眉、蕩盡生涯、直至如今、無言可說、無理可伸、而今對衆、盡底揭翻、舉香云、劫石有消日、此恨幾時休。

浴佛上堂、悉達太子、法身示現、今日誕生、淨飯王宮、九龍吐水、沐浴金軀、地涌金蓮、捧承其足、普天匝地自矜伐、無端開口獨稱尊、具足大人相莊嚴、施作微妙大佛事、且作麽是大佛事、良久云、下座普請露柱燈籠、同入如來香水海、助這老子、轉大法輪。

結夏小參、靈山密付、少林單傳、機機相投、言言相契、以大圓覺爲我伽藍、身心安居、平等性智九旬禁足、三月護生、守蠟人冰、憐鵝護雪、起大精進、發大勇猛、秉智慧劍、一往直前、有學無學、一切皆殺、殺一切已、見山是山、見水是水、全體恁麽來、全體恁麽去、摠無許多路布葛藤、正恁麽時、呼作衲僧本分事得麽、萬仞懸崖須撒手、大千沙界現全身。

復舉、德山示衆云、老漢見處、佛也無祖也無、達磨大師是老臊胡、十地菩薩是擔屎漢、等妙二

覺、是破戒凡夫、菩提涅槃、是繫驢橛、十二分教、是鬼神簿、拭瘡疣紙、四果三賢、初心十地、是守古塚鬼、自救不了、拈云、德山得逸群用、明辨古今、提振綱宗、誘掖後進、拈挂杖云、雖然如是、被老僧拄杖子穿卻鼻孔、直得無出氣處、衆中莫有出氣底麼、卓一下云、具眼者辨取。

結夏上堂、高超十地、不歷僧祇、物我一如、身心平等、不與萬法爲侶、不與千聖同途、全提佛祖大機、獨露人天正眼、直居孤峰頂上、禁足卻向十字街頭垂手、殺活自在、橫縱縱橫、且道、還有應聖制分也無、良久云、日用無回互、當機有卷舒。

解夏小參、大機大用、自在縱橫、不帶千聖機關、不墮諸祖窠窟、淨躶躶絕滲漏、赤洒洒無覆藏、本地風光、本來面目、言發非聲、和言擊碎、色前不物、與物俱融、打開布袋口、擊碎鐵門關、提吹毛劍、南來北往、田地穩密、步步踏實、且道、如何是踏實地底一句、不喜蠟人氷、何憐鵝護雪。

復舉、文殊三處度夏、至自恣日、迦葉欲白槌擯出、纔舉槌、便見百千文殊、世尊問迦葉、汝欲擯那箇文殊、迦葉茫然、拈云、三箇老凍膿、一人圓陀陀地、一人曲彎彎地、一人黑漆漆地、子細點撿將來、一得一失。

解夏上堂、舉、僧問雲門、初秋夏末、前程若有人問、未審對佗道什麼、門云、大衆退後、僧云、過在什麼處、門云、還我九十日飯錢來、拈云、這僧用劍刃上事、雲門具殺活手段、諸人還會麼、良久云、不如無事好、便下座。

開爐上堂、今朝應時節、東福開爐三世諸佛、四聖六凡、情與無情、盡向火焰裏、共轉大法輪、有耳者聞、有眼者見、灰頭土面、衲帔蒙頭、照顧眉毛、歸炭裏坐、且道、有爲人處也無、若又不會、

問取丹霞和尚。

冬至小參、朕兆未分、虛空無背面、一氣已動、萬象自崢嶸、晷運推移、日南長至、向本分田地、撥轉向上機、一段家風、輝騰今古、釋迦彌勒、無路退身、臨濟德山、目瞪口呿、千里萬里、無片雲、擬議不來、三十棒、正恁麼時、諸人還委悉麼、群陰消剝盡、來日是書雲。

復舉、僧問疎山、如何是冬來事、山云、京師出大黃、拈云、疎山明立信旗、密排陣敵、不犯鋒鋩、收放自在、雖然如是、東福若有問冬來事、劈脊便棒、何故殺人刀、活人劍、具眼底辨取。

冬至上堂、寒暑變遷、一陽來復、百昌萌動、劫外開花、竪起拄杖云、老僧拄杖子長多少、良久云、一冬二冬、叉手當胷。

臘八上堂、黃面老子、正覺山前、謾覩明星、打失眼睛、從古至今、承虛接響、眼裏撒沙、漏逗不少、畢竟作麼生、各請上殿炷香禮拜、宜著眼看黃面老子面皮厚多少、下座。

除夜小參、一機未露、毗盧元是凡夫、萬法擬然、普賢得其境界、徧界不曾隱、改故換新、東村王老、爆竹燒錢、驅神逐鬼、千聖拱手、天魔潛蹤、全體恁麼來、全體恁麼去、步步踏實地、句句透根源、通箇安排、應箇時節、驀拈拄杖、卓一下云、還委悉麼、一聲雷發動、蟄戶一時開。

復舉、僧問香林、如何是衲衣下事、林云、臘月火燒山、拈云、香林撥轉關楔、踏翻路頭、這僧耀古騰今、歸家穩坐、且道、如何是歸家一句、覿面若無宗正眼、回頭只見翠山巖。

上堂、十方佛土中、唯有一乘法、更喚作得禪道佛法麼、若言作得、打失一雙眼睛、若言不作得、千古下作人笑端、本色行腳人、須具行腳眼、始得、且道、如何是行腳眼、行到水窮處、坐看雲起

時。

上堂、棒頭取證、落塹墮坑、喝下承當、承虛接響、向上向下、轉更顢頇、說妙說玄、和泥合水、正恁麼時、行不動塵、語不動脣、直須到大休大歇大安樂之場、若也不會、問取當來彌勒慈尊。

上堂、萬機不到、千聖不携、把斷要津、不通凡聖、雖然如是、不免放一線道、向第二義門、無言處演言、無相中現相、始終一貫、前後無差、恁麼告報諸人、還甘麼、三生六十劫。

上堂、本色衲僧家、須具行腳眼、若未具行腳眼、落二落三了也、且道、作麼是行腳眼、良久云、朝看東南、暮觀西北。

上堂、舉、古德云、說得一丈、不如行取一尺、說得一尺、不如行取一寸、雖然如是、東福不然、說也說不得、行也行不得、何故得意忘言、猶揚家醜、寧可截舌、不犯國諱。

上堂、靈山獨付欽光、少室單傳可祖、黃梅半夜授衣、臨濟臨行付屬、東福門下、無密傳付屬底事、今日普爲諸人、直示這箇事、且道、與古人有優劣麼、各宜著眼看。

上堂、靈鷲峰前、白雲靄靄、少室巖畔、白雪皚皚、驀拈拄杖、卓一下云、瞿曇說不盡處、祖師提不起底、山僧對衆、八字打開了、也諸人還見麼、又卓一卓下座。

上堂、舉、乾峰示衆云、舉一不得舉二、放過一著、落在第二、雲門出衆云、昨日有人從天台來、卻往徑山去、峰喚維那云、來日不得普請、拈云、乾峰無陰陽地、露箇消息、雲門袖裏藏金鎚、高持祖印、頭正尾正、始末相符、敢問大衆有這般底麼、若無歸堂喫茶。

上堂、舉、僧問九峰、如何是不遷義、峰云、東生明月、西落金烏、僧云、非師不委、峰云、理當卽行、僧禮拜、峰便打、僧云、仁義道中禮拜何咎、峰云、來處不明、須行嚴令、拈云、九峰以的奪機、嚴令當行、這僧向劍及上、能辨曲直、互傾肝膽、各出毫芒、騰古出今、騎聲蓋色、大衆還委悉麼、試請辨別看。

上堂、第一句下薦得、佛祖乞命、第二句下薦得、人天膽落、第三句下薦得、虎口橫身、坐斷毗盧頂、不禀釋迦文、不帶聲色、不落見聞、東福不敢囊藏被蓋、八字打開了也、遂擧拂子云、還見麼、擲下云、分明記取。

上堂、動絃別曲、葉落知秋、提向上鉗鎚、開作家爐韛、德山棒無下手處、臨濟喝啓口不得、正恁麼時、如何通信去也、良久云、犵獠舌頭三千里、壺中日月自分明。

上堂、月生一、乾坤廓落、大方無外、月生二、師子奮迅、象王回旋、月生三、蟾螟眼裏、大鵬翻身、所以道、向上一路、千聖不傳、學者勞形、如猿捉影、拈拄杖卓一下云、有意氣時添意氣、不風流處也風流。

上堂、妙性圓明、離諸名相、本來無有世界衆生、因安有生、因生有滅、生滅名安、滅安名眞、喝一喝云、黃面老漢、當時若下得這一喝、免得許多漏逗、何故旣是圓明離相、安從何起、眞從何生、若恁麼見得徹去、山河大地、萬象森羅、四聖六凡、情與無情、不消一揑、敢問大衆、卽今是什麼時節、擧拂子云、盧舍本身全體現、當機直下沒纖毫。

上堂、擧、金峰示衆云、老僧二十年前有老婆心、二十年後無老婆心、時有僧出問、如何是二十年前有老婆心、峰云、問凡答凡、問聖答聖、僧云、如何是二十年後無老婆心、峰云、問凡不答凡、

問聖不答聖、拈云、金峰顯大機發大用、這僧玉轉珠回流通正眼、雖然如是、東福不然、當時有恁麼問、劈脊與一棒、何故達者先知、賢明早悟、久立珍重。

上堂、不是目前法、亦非心外機、直下絕承當、當陽無向背、提持祖印、荷負宗乘、覿面相呈、更無餘事、正恁麼時作麼生、撥開向上一竅、千聖齊立下風。

上堂、孤峰頂上眠雲、十字街頭垂手、全機大用、觸處見成、溢目清光、貫通今古、一塵含法界、一念遍十方、淨躶躶無遺、赤洒洒全露、出沒自在、不隔纖塵、雖然如是、更須揮金剛王寶劍、直截根源、當陽顯露、不者也周由、正恁麼時、不依倚一物、一句如何道、萬象之中獨露身、百草頭邊著著親。

法語

示空明上人

祖師直示、無殊方便、放下諸緣、休息萬事、晝三夜三、守看鼻端、纔涉境界差別之時、只舉話頭、不作佛法想、不作破除想、不用存心等解、不用情生疑殆、沒理路、沒滋味、如鐵饅頭、單刀直入、不涉異想、悠久歲月、自然恰如睡夢惺、如蓮華開、正當恁麼時、從前話頭、只是扣門瓦子、拋下那邊、卻看祖佛機關語句、皆是止小兒啼耳、向上一路、更不通一線、截斷凡聖要津、學者勞形如猿捉月、可謂忘卻自身、向外馳求、何日可求得耶、安坐蒲團上、晝夜求成佛、厭卻生死、欲證菩提、皆如捉月猿、若欲眞實相爲處、只是無心是道、亦非木石、靈靈常知、了了分明、視聽尋常、更無委曲、空明上座、晝夜面壁、求語爲警策、不惜家風、信筆書之、文永四年月日。

示智禪上人

祖師門下、直指人心、言說方便、特地乖張、不墮見聞、不從聲色、百草頭上縱橫、萬象堆裏坐臥、出息不假塵緣、入息不繫陰界、盡大地解脫門、摠刹海眞實法、遇方作者、舉著知歸、初心晚學、云何湊泊、若未薦得、且向第二義門放一線道、無言處演言、無相中現相、如何是無言處演言、磨盤空裏走、如何是無相中現相、西河弄師子、日用應緣差別境界時、不用破除想、不作玄妙會、沒理路、沒滋味、晝夜忘寢食、看此話、若亦未薦得、更說第三頭、說心說性、說玄說妙、一塵含法界、一念遍十方、故古者道、無邊刹境、自佗不隔毫端、十世古今、始終不離當念、禪上人袖紙

求語信筆老草一見後付丙丁。

示智目禪人

佛祖以來大凡接人有三種機若是第一機更無方便沒義理難話會若於此直下承當則與庭前柏樹子麻三斤一口吸盡西江水更無差別若是第二機只是發起問端隨手點破則如臨濟問黃檗喫六十烏藤若是第三入泥入水下箇注腳瞎人眼目滅胡種族只是眞正禪子直須撥卻參活句不參死句目上人爲人純實若能活句上薦得堪與祖佛爲師老僧不惜家風示三種機云。

示勳上座

佛佛授手不唯佗只是自己恩力處方木投圓孔土塊洗泥裏祖祖相傳空谷答聲呼南作北橫三豎四坐一走七未免誵訛若又向一氣未兆以前杳冥恍惚信得及猶在第二頭何況更於混沌已分時獲得去落在第三機自著眼去直超佛祖理致機關所謂超佛理致過得荊棘林越祖機關透得銀山鐵壁始知有向上本分得坐披衣爲人解黏去縛如上座在座下積有年而今歸鄉呼喚不回羅籠不住赤腳歸去故信筆書而送之。

示覺實上座

祖師宗風向上一著具大丈夫氣槩那邊承當隨處自在妙用無礙揮金剛王寶劍坐斷誵訛用殺活杖子勦除是非棒喝隨時坐一走七是故黃面老師三百餘會集四衆八部能爲法王於法自在碧眼初祖九年面壁提諭後學外息諸緣內心無喘心如墻壁可以入道此等皆是始設方便後自證知諸緣放下萬事休息是第一方便也若滯此方便即不是事不得已老婆心和泥合水以楔拔楔以機奪機千變萬化七縱八橫若口頭取則隨言生解墮在陰界猶不知方便況正宗哉實上座禀性不凡爲人純至求語警策故書與之。

示禪人

頂顎上腳跟下切須薦取此中有一條通天大路不立普賢行願不說文殊機智把斷毗盧凡聖迹絕然後大機大用觸處現成百草頭上說權說實聲色堆裏立照立用接手方便自由自在若使明眼人見猶在半途也是擔枷過狀然雖如是須知有接手方便一坐禪方便二直示方便坐禪者大定也直示者大慧也蓋空劫以前威音那畔無師自發無此等方便達磨所示潛付密證是也空劫以後有悟有迷有問有答有師有資皆是接手方便也佛祖出興有理致有機關有向上有向下明頭來暗頭合日面佛月面佛手執夜明符提取金剛劍作家眼目應機鉗鎚不用言詮不用機境利根上智直下透達可謂如天普蓋似地普擎寬豁如虛空遍照如日月古人云黃梅會中七百高僧皆是會佛法底只有盧行者一箇不會佛法底此是直示底樣子也若亦坐禪方便某人已熟于此矣不煩老僧舌頭適袖紙求語信筆老草。

又

空劫以前無師自發佛祖以來因師打發所謂自發打發皆是接人方便也蓋從上佛祖相傳自在妙用皆是機語投契耳達磨大師渡海過江面壁端坐隻履獨歸又是機語投契邊事也上人欲投契直須誅生死根株破賢聖窠窟淨裸裸赤洒洒不依倚一物始有小分相應老僧

與麼說話、且道、有投契耶、無投契耶、若能撿點得出、莫謂老僧爲汝不說。

示藤丞相道家

此段大事、彰自己腳跟下、淨裸裸、赤灑灑、沒可把、如水上放葫蘆、拘牽佗不得、惹絆佗不得、云云、具眼漢、設大爐鞴、百煉千煆、一棒一喝、七顛八倒、入淨入穢、不礙不改、一一歷試、方得這入頭處、有少親近分、縱能得之、難守之、守之難行之、須知此事、直是具決定志、向千差萬別處、得爲主宰、降此之外、畢竟作什麼、參禪定殿下、訪我於閑靜處、或尋顯密性相之原、波騰嶽立、或問直指單提之妙、瓶瀉雲興、余以二十年學力、僅能充其量、恣其飲耳、恁麼迅筆請自看取。

偈頌

賀佛鑑老師生日

纔出胞胎步十方、遠來掛海獻香湯、莫嫌惡水驀頭灌、往昔毒龍毒最强。

賀新命天王智長老 別山

夙債未酬眞鐵牛、橫身負重入鄽市、腳頭踏斷六門關、無限清風隨步趾。

賀新命定慧圻長老 方庵

春空春水起蒼龍、飛上雲衢步步通、風雨無私隨處施、須知四海一雷同。

和蘭溪送笋韻

竹林無數出龍孫、隱約春深獨閉門、惠意溫和寄頭角、可憐天性不知恩。

和兀庵印最明平元帥韻

大機大用大根人、鼻孔遼天獨露身、凜凜威風行閫外、五湖四海一天眞。

奉和圓明藤丞相韻

台星知是本文星、交照槐門家業榮、輔弼匪躬扶紫極、權衡入手惠蒼生、靈山付屬固能記、雙徑宗風已與盟、駟馬時時臨梵宇、林泉自此樂清平。

示藤丞相

妙在佛祖不傳處、高超理致去機關、去機關兮沒窠臼、水是水兮山是山。

又

五葉花開無根樹、一陣香風天地寬、天地寬兮春萬國、家門盛兮民物安。

術士月潭求頌

月潭無底逼人寒、本命元辰不自謾、淡薄家風隨處樂、清貧生計只吾安、尤憐月魂照遙漢、且喜溪聲度遠灘、切忌隨聲仍逐色、直須北斗面南看。

送天王

處處叢林妖怪多、謾於平地起干戈、天王提起住山斧、南北東西奏凱歌。

次子曇侍者韵

絕學道人入帝寰、不隨玩水與游山、具烹佛祖鉗鎚手、知是應時破鐵關。

悼率庵

癡坐頹然解轉身、鄭峰山畔變通新、千年琥珀玉埋土、半夜珊瑚月照人。

送寧知客

從來道地是蘇州、五馬知音笑點頭、十字街頭開鋪席、直須高價莫輕酬。

送堯知客

當年掉臂出蓬瀛、秘畜還丹直至今、定慧門中出一粒、何憂點鐵不成金。

剪梅花

不假陰陽土地生、得心應手剪裁成、暗香雖缺些兒許、堪與松筠作弟兄。

送僧

秋空如水水如空、衲子茲時活路通、直向孤峰峰頂上、草庵盤結展家風。

佛祖贊

達磨

航海遠來費筋力、梁王不動如磐石、抹過長蘆入少林、一花五葉甚狼藉。

又

折葦渡江人不知、少林九年空面壁、隻履不歸西竺乾、大虛抹過入東國。

又

入草求人處、相逢斷臂客、看佗依位時、不足爲標格。

又

祖師西來、少林一歇、天下衲僧、不拔之概。

魚籃

這箇女人、求魚海濱、携籃拾得、不用垂綸。

寒山拾得

路頭拾得族親無、直下指空在半途、剔起眉毛相看笑、寒山歸去沒工夫。

達磨

祖師西來、一字不說、聲前語句、紅爐點雪。

自贊

東山長老請

老漢百醜千拙、舉動輙要勘過、看毗盧華藏海、鼓起幾許風波。

藏山長老請

生前面目、非色非心、手裏竹篦、能縱能擒、攪動龍淵水、波濤揚萬尋。

辨雅長老請

萬象堆中現半身、當陽驗盡作家人、要知機語相投處、垂下鼻頭重萬鈞。

智侃侍者請

覿面全提栗棘蓬、應緣投契振宗風、等閑噴嚏乾坤動、十世古今盡透通。

任淵上座請

老漢一生坐曲牀、烏藤拈起沒商量、機前毫髮不存處、倜儻分明獨自彰。

孝仙請

手把無毛之拂子、寥寥宇宙起清風、照今鑑古頂門眼、天下悉知草本同。

三林長老請

普門禪寺長老、信口胡說亂道、誰知慣打葛藤、終不隨人所好。

然奇山請

吾儂一段風、佛祖可難通、無端垂手處、天下草木同。

顯正堂請

盡大地是般若光、光未發時無生佛、形容才露此道傳、舌本瀾翻口如沸。

張四綱請

久能門下、無法與人、握篦據座、近前便礙。

明辨庵主請

秉拂應緣說、神仙有妙訣、佛祖無性心、不是守途轍。

又

本命元神教外傳、臨機投契那邊先、須知竹篦手頭主、問著隨時月上天。

聖一國師住東福禪寺語錄 終

師範和南東福堂頭長老、印上人來、收書并前一書及寶塔、一一領得、甚感不忘、第相去阻遠、無由即答、且知自崇福遷東福、住四名刹、安衆行道、誠慰老懷、但恁麼操守、力弘此道、使一枝佛法流布於日本、眞不忝爲宗乘中人也、長老禪教兼通、又能踐履、不患不殊勝、只貴始終一節、介然不改耳、此老僧所望、餘無它祝、多多爲大法自愛、不一一。

大宋徑山住持圓照老僧師範書、復日本東福堂頭爾長老。

師範和南手白承天堂頭長老、向曾收書、已嘗回答、就有錦法衣堂頂附去、乃是從上來諸知識所傳者、以表付授不妄、且知長老還故國、緣法殊勝、所至響合、更宜以此道力行、使吾祖之教、在在處處、熾然而興、此爲至祝也、便風聊復眷眷之意、未間切宜、爲大法保愛、餘不一一。

師範和南手白承天堂頭長老。

了惠頓首再拜、

上覆東福堂上禪師法兄大和尙侍者、即日春事告闌、恭惟尊候有、相萬福、了惠竊審、以道福住山、王臣贊護、聲稱奕奕、遠被中夏、乃知先師左券、全歸老手矣、欽羨欽羨、切乞爲師門、益加珍護、以永眞風、不宣。

大宋寶祐乙卯三月二十五日。　天童初祖比丘了惠頓首再拜。

了惠頓首再拜、

上覆建仁堂上聖一賢屬禪師侍者、即日仲夏之月、恭惟　尊候動止、納神龍冥相之祝、了惠曩因大國回舶、嘗布尺書、并以正續蒙　施經石刻、附納、相望萬里、莫知登徹几格否、每見神足元空二兄傳誦提唱妙語、凜然有老圓照氣味、使人毛骨森聳、中間且聞移錫名刹、恨不得親臨法會、但能斫額東望也、了惠茲因風便、不可無字、但客邸無物見芹倚需腹狀、未問、萬告爲大法、爲後學强復、不宣、了惠頓首再拜上覆。

右語錄以國師年譜再刊助緣之餘資、重刻者也。

元和六年庚申臘月下浣　見東福集雲叟守藤記之。

惠日國師、振起楊岐一宗、流傳雙徑正脈、提唱語錄、舊刻漫漶、重加釐整、刊行流通、南谷一衆、各抽衣資、置板于常樂禪庵、伏願、佛種不斷世世、建光明幢、祖印親傳、人人開無盡藏。

文政丁丑十月　濟北劣孫令材識。

國譯圓滿本光國師見桃錄

解題

見桃錄は勅賜圓滿本光國師大休宗休和尚一代の遺錄にして、關山派下の語錄中、其の機鋒の峭峻、文章の典麗なること、蓋し群鷄中の一鶴を以て目すべきものなり。此の書は初め師の侍者等の輯錄せしものにして、所在傳寫秘珍せられしが、而も其の多寡均しからず、踳駁尤も甚だしきを以て、享保十六年に臻りて、師の遠孫等、胥議して諸家所藏の十數本を羅致し、一々交互に對照して、其の誤謬を質し、缺脫を補ひ、疊沓を刪除し、編定して乃ち四卷となして元文二年に刊行し、爾來廣く流布せられたり。今回國譯に際しても亦之に據れり。

傳を案するに、宗休號は大休、姓氏を詳にせず、少うして東福の永明庵に在つて、山中の知識に見ゆ。後、特芳に龍安に參じて親しく印記を承く。芳の順世するに及んで、移つて西源院に居して龍安を兼管し、永正十三年詔を奉じて妙心に出世す。又靈雲院を法山の側に剏めて、印を解いて退居す。享祿四年、駿州の太守今川義元臨濟寺を建てて、請招して法を開かしむ、一時の英俊輪下に奔歸す。久しからずして、洛に回つて再び妙心に住す、尋いで尾の瑞泉を董す。後奈良帝、師を召して法

を問ふ、奏對旨に稱ふ。帝、叡襟を啓いて弟子の儀を執り、屢召して參訊す、遂に所契あり。特に圓滿本光國師の號を賜ふ。天文十八年八月二十四日化す、壽八十二、靈雲に塔す。著見桃錄あり、嗣法十人を出す。

國譯見桃錄叙

㊀圓滿本光國師、徒を正法山に匡すの後、有馬郡主赤松氏の女、模堂夫人有り、國師の爲に、梵宮を山の㊁兌方に搬建して、拜請して之れに居らしむ。國師、靈雲を以て扁と爲す焉。晩に再び細川氏綱有り、一精舍を大雲山麓に營み、以て國師の禪燕に供ず、復た名くるに見桃を以てするなり。皆㊂志勤禪師の機緣を用ふ。必ず說有らん、今に迨んで而して其の旨を測るべからず矣。因つて國師平生の擧揚、開堂、示衆、立地、偈贊、當時撮蒐する者、題して見桃錄と曰ふ。其の錄傳寫して、所在秘珍す、祇だ是れ多寡均しからず、㊃踳駁尤も甚だし。㊄遙胄の諸老、常に以て憂と爲す焉。甲寅の歲、胥議して編定し、乃ち家々の所藏十數本を羅致し、交互摩研し、㊅魯亥を質し、閃脫を補ひ、疊沓を㊆鏟除し、畔散を

㊀見桃錄。本書の總名、全四卷より成り、本光國師の語要を集めたるものにして、國師の侍者編輯せしものなり。この序は、無著道忠の文なり。而して元文二丁巳の年重刊せるものなり。見桃の名は、國師燕居の地を見桃院と言へるに依る。蓋し志勤禪師、嘗つて桃花を見て大悟せるの機緣を用ふるなり。

㊁宗休は大休と號し、東福永明庵に入りて剃髮進戒し、特芳和尙に龍安に參じ、密かに宗記を受く、後妙心寺に出世し、駿州大守今川義元、敦く請うて州の臨濟寺に居らしむ、再び洛の妙心に住す、參究するもの雲の如く集まる、後奈良帝深く歸依し給ふ、天文十八年示寂す。

㊂兌方は西方なり。

㊃靈雲志勤禪師なり、大潙山にありて修業す、因に桃花を見て悟道す、頌あり曰く、「三十年來劍を尋ぬるの客、幾回か

㊀倫貫して、釐して四卷と爲す。是に於て乎、守塔、衆命を銜み、來つて㊁遯窩を款いて忠に告げて曰く、「參訂既に竣る矣、請ふ事情を卷首に引せよ。」道忠伏して惟れば、國師、海宇横潰の世に處して、天源所傳の㊅宗猷を墜さず、道德厖鴻、文章㊆藻繢、一代に卓絶す。聖主法を稟け、武豪化を仰ぐ。禪敎眞俗飜飛慕嚮す。委化より今に迄るまで、二百の年所に垂として、雲耳湧隨して、舊稿を點定し、之れを木に剞つて而して遺言を宣通し、以て毛滴の報答に擬す。源深く流長きに距ざるよりは、則ち豈に能く之を致さん耶。此れ卽ち是れ家庭の盛事なり。忠㊇衰颯十拗、㊈隨喜三歎、覺えず筆硯を鳴して、塗糊紙に滿つ。敢て茂めて衆囑に帥ふ耳矣。凡そ是の錄を展讀せん者、見桃の一着を昧却すべからず、苟も徒に葉を摘み枝を尋ねて、或は國師の面前に在らば、則ち必ず㊉熱梧三十を免れず矣。

元文二歲丁巳に次る壯月二十四日

遠孫稗比丘道忠謹書

葉落ち又枝を抽んづ、桃花を見しより後、直に如今に至りて更に疑はず」と、卽ち此の機緣に因るなり。

㊀色雜りて同じからざること、まだらをいふ。

㊁喬冑などに同じく、本光國師以後、同じ流れを汲む諸老をいふ。

㊂事文類聚に曰く、「亥と豕、淫と渭と分つなし、魯と魚と、濫と滬と辨ずるなし」と、文字の誤りをいふ。

㊃遯は龜に同じ、木の面を削る器なり。

㊄順序正しくまとむるをいふ。

㊅かくれ屋といふに同じ。

㊆宗道なり。

㊇五彩にて畫ける模樣の如く、鮮かなること。

㊈老衰などに同じ。

㊉他人の善根功德を修する行爲に對して、誠心誠意を以て贊成の意を表すること。

㊊梧は杖なり。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之一

遠孫比丘衆等重編

正法山妙心禪寺に住する語錄

侍者某編

師、㊀永正十三丙子の歲入寺す。

山門、指して云く、「大休歇の地、乾坤一人。」大衆を召して、「門外の雨滴聲を聞く麼。花は開く南浦の春。」喝一喝。

佛殿、「報化佛頭。」右足を擧げて、「誰か獨足にして立つ。」帽を卸して、㊁「尅耐なり汝州の風、吹き落す老僧が笠。」便ち禮拜す。

㊂土地、「㊃東坡居士、護法明王、箇の什麼をか護す。山色淸淨、溪聲廣長。」

㊄祖堂、「吾が這の獅子窟、㊅野狐精を容れず、去れ去れ、天下太平。」

㊀紀元二千百七拾六年後柏原天皇、將軍足利義植の時なり。

㊁尅は堪へるなり。

㊂土地堂なり、土地神及び護法神を祭祀する堂なり。

㊃蘇東坡は老泉の子、其の悟後の偈に曰く、「廬山烟雨浙江潮、未到千般恨不消、到得還來無別事、廬山烟雨浙江潮」と。これによりて其の大要を知るべし。

ト據室、「機關脫落、別に生涯を討ぬ。」竹篦を放つて、「拄杖不在、且坐喫茶。」

チ敕黃、「此れは是れ リ三十三天大威德天子、ヌ尼拘陀を折つて佛の爲に蔭涼を作す底の一枝なり。甚と爲してか山僧が手に落つる。拈じて春風に分付す、嫛桃笑つて口を開く。」

ル山門疏、「枯樹老僧、山門の境致、露柱古佛、今日交々參る。」疏を擧して、「是れ什麼ぞ、花は錦に似、水は藍の如し。」

ヲ同門疏、「太湖三萬の月に說向して、惠山第二の泉を品論す。誰か道ふ千里遠しと、元來一味の禪。」

ワ拈衣、「カ北秀の爲にする者は、右を袒げ、南能の爲にする者は、左を袒げ。」搭起して、「ヨ鷸蚌相持す、漁者の利なり。」

ヌ開山堂、祖師堂のことなり。

ネ野狐の精魅、化けものといふ意。

ト新命住職の晉山式に據室の法あり、方丈室中の正面に椅子を設け、椅前の卓に銀燭一對、香爐一口を備ふ、大衆丈室內の東西に雁立し、兩班は對立す、侍者は知事の後に一班立列し、門首は頭首の上肩に立つ、新命進んで直ちに椅に倚る、時に燒香、侍者、知事の頭邊を過ぎて卓前に進み、香を燒いて問訊す、之れを請法問訊といふ。侍者並びに歸るや、新命、法語を唱ふ、之れを以て據室の式畢る。

チ山堂肆考に云く、「唐の太宗の時、黃麻紙を用ひて詔勅文を寫す、將相を拜叙する制書には黃麻紙を須ふ」と見えたり、綸紙を賜ふことをいふ。

リ忉利天のことなり、須彌山說によれば須彌山の頂上に四峰あり、而して各峰に八つの天あり、その中央に喜見城ありて、帝釋天これに住す、四方の三十二天を統ぶと。

ヌ尼拘極陀、又は弱拘極陀などと譯す、無節と譯す、樹幹高大にして、葉は柿の葉の如く、果は枇杷に似たりと。

ル住持を勸請する宣疏なり。官府の疏なきときは、山門疏に聖壽を祝せよの語を加ふ。

ヲ賀疏の一種、新命の住持と同門の人が、同門の故を以て其の入院を賀して呈する所の文疏なり。

ワ法衣を拈ずること、衣は嗣法の信として師之れを弟子に授く、弟子衣を拈じて法語を擧して披す。

カ黃梅の禪、南北に別る、神秀は北、慧能は南なり。

ヨ兩者利を爭ひて、他の者に其

タ登座、「高々たる峯頂、正法の船を盪す。」レ囫「驪龍行く處浪滔天。」

祝香、「大日本國山城州平安城、正法山妙心禪寺、新住持傳法沙門ソ宗休、開堂令辰、虔んで寶香を爇き、端に爲に今上皇帝聖躬萬歲々々萬々歲を祝延したてまつる。陛下、恭しく願はくは、百王百代、芥城空しうして、而して壽山彌高し。乃子乃孫、ツ桑田變じて而も仁澤何ぞ竭きん。」

將軍、「此の香、大樹奕葉仙李盤根、爐中に爇向して、大檀越ネ準三宮の爲に鈞算を資倍し奉る。伏して願はくは、九州四海、遠人服し兮ナ戎狄和す。二京三都、大厦成つて而して燕雀賀す。ラ補衮の手を將つて、ム正法輪を轉せんことを。」

タ登座、高座に登ること、說法の座席に就くこと、陞座に同じ。

レ舟を漕ぐ時のかけ聲、又は發語の聲なり。

ソ本光國師の諱名なり。

ツ詩に曰く、「已に見る松柏摧けて薪と爲る、更にきく桑田變じて海と成る」と、時の永久の意にとる。

ネ三宮は三后に同じ、三后は太皇太后宮、皇太后宮、皇后を云ふ、之れに準ずるをいふ。

ナ東夷、西戎、南蠻、北狄。此等の四夷卽ちえびすをいふ。

ラ衮は天子の法服なり、龍を繡す、依つて天子を補佐し奉る手を將つてなり。

ム如來の說きたまへる法門のこと、法輪は摧破の義、轉法輪ともいふ。

ウ名藥なり、天蓼ともいふ。

ヰ漢書の蘇武傳に、「甘露三年、單于始めて入朝す、上麟閣の美を思ひて、遂ち其の人を麟閣に圖畫す、其の形貌に法り、其の官爵姓名を署す、後世之れを榮とす。」

ノ元祐は宋の宣宗の御位の年號なり、此の時司馬溫公、丞相の利をとらるゝに喩ふ。戰國策に、「趙の燕を伐たんとするや、蘇代燕の爲に惠王に謂つて曰く、「今日臣來りて易水を過ぐ、蚌方に出でて曝す、鷸其の肉を啄む、蚌合せて其の喙を箝む、鷸曰く、今日雨降らず明日雨ふらずば、卽ち死せる蚌あらんと、蚌、鷸に謂つて曰く、今日出でず、明日出でざれば、死せる鷸あらんと。兩者相捨つることを覺せず、漁者得て而して之れを並に擒にす、今趙、燕を伐たんとす、燕趙久しく相支へ以て大衆を敝す、臣、强秦の漁夫たるを恐る」と」。

ク高座に登ること、說法の座席に就くこと、陞座に同じ。

ヤ舟を漕ぐ時のかけ聲、又は發語の聲なり。

マ詩に曰く、「已に見る松柏摧け

敕使、「此の香天上の㋐棘林より貴く、海外の婆律より重し。爐中に蒸向して、敕使尊官左中辨の爲に祿算を資倍し奉る。伏して願はくは、宗門の功、第一、名、㋑甘露の麒麟に上る、洛社の會十三、齡㋒元祐の司馬に逮ばん、以て規し以て祝す。惟れ德惟れ馨し。」

㋓京兆、「此の香爐中に蒸向して、外護の檀越源府君右京兆の爲に、祿算を資倍す。伏して以れば、韓京兆、八代の衰を起す、才名を斗北に仰ぐ。神堯帝第一門の事の爲にす。義兵を晉陽に觀し、吾れ其れ庶幾せん乎、民の歸する所なり。」

嗣香、「這の一瓣香、昔㋔大燈國師、劈いで兩片と作し、㋕二神足に付するや、正法眼を以て、第一の神足吾が㋖關山祖に付し、諸莊園を以て第二の神足他の㋗徹翁師に付す。是れ十目の視る所なり。蓋し碧落の碑に贋本無き者は、只だ㋘花園の一枝のみ、餘薫八傳して山野に至る。山野之れを祕して、三重五重複子に裹む、卽今拈出して、前住當山特芳骨査に供養す。冥て法乳に報せず。爾に出づる者は、爾に返る。」

垂語、「㋙世尊密語有り、迦葉覆藏せず。」禪牀を擊つて、「會す麼、㋚鳥鵲啼く處百花香し。參。」問答錄せず。

㋛提綱、「乾坤の內宇宙の間、一物有り黑うして漆の如し。護身の靈符、願神の妙術、之れを得る者は、㋜二三に禍胎し、四七に濫觴す。著々出身有り、門々大吉を書す。㋝林際の風顛、之れを得て金剛王と作す。正令當行、巴蜀雪消して春水來る。㋞松源の職祖、之れを得て黑豆の法を用ふ。孤機峭峻、湘潭雲盡きて暮山出づ。恁麼不恁麼、依俙として越人の鳧と爲るに相似たり。不恁麼恁麼、彷彿として楚人の乙と爲るに同じからず。吾が皇之れを得て、西の方㋟混明を極め、東の方扶桑を略す。晝は㋠閻浮に降り、夜は㋡兜率に昇る。」拄杖を拈じて、「山僧今日之れを得て、國の爲に開堂し、此の事了畢、此の故に聖に在つては聖に同じ、巾上に堯天を戴く。凡に在つては凡に同じ、杖頭に佛日を揭ぐ。蕉芽敗種齊しく恩に霑ふ。森羅萬象全く一に歸す。直に得たり、石女立つて三臺を舞ひ、木人坐して㋢鬐簗を吹くことを。這の新翻の一曲、諸人還つて委悉す麼。倘し復た未だ然らずんば、高く一律を提げ去らん。」卓一下して、「摩訶般若波羅蜜甚深般若波羅蜜。」

㋐棘林　京兆尹は支那の官名、三輔のうちなり、以て帝室を輔翼す、尹は地方長官、卽ち京師の守護職なり、韓京兆は文公の事をいふ。

㋑大德寺開山の宗峰妙超禪師の號。花園上皇特に勅して興禪大燈國師と賜ふ。

㋒弟子の傑出せるものなり。

㋓妙心寺開山關山慧玄禪師なり、大燈國師に參じ、關の公案を透徹し印可を蒙り、關山の號を與へらる、花園天皇の歸依特に深し。

㋔大燈國師の上足なり、寬永中徹翁の遠孫澤庵彭公、道鄰世となる、溫公薨ずる年六十八、文正と諡す、著す所資治通鑑の外、文集八十卷、迂書、涑水紀聞等二十種あり、誠忠信實を以て顯る、德望一世に高し、之れに比するなり。

㋕弟子の傑出せるものなり。

㋖妙心寺開山關山慧玄禪師なり、大燈國師に參じ、關の公案を透徹し印可を蒙り、關山の號を與へらる、花園天皇の歸依特に深し。

㋗大燈國師の上足なり、寬永中徹翁の遠孫澤庵彭公、道鄰世に鳴る、後水尾上皇、宮に召して法をきく、上皇大いに喜び將に國師の號を賜はんとす、彭辭して曰く、「古來、徽號を蒙るもの皆名德の宗師なり、某甲何ぞ敢て當らん。徹翁禪師は大燈國師の上足、吾が門の宗匠なり、未だ此の號あらず、伏して願はくは重ねて追諡を賜はらんことを。」上皇其の言を嘉し、天應大現國師とたまふ。

㋘花園の一枝は關山國師をいふ、花園上皇の別殿を賜ふて寺觀となし、之れを妙心寺となす、故にしか云ふ。

㋙世尊拈華、迦葉微笑するの機緣をいふ。

㋚無門關二十四に「風穴和尙因に僧問ふ、語默離微に涉る、如何か不犯を通ぜん。穴曰く、長に憶ふ、江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し」と。

自序、「宗休、出頭の㋐跛鼈、顛倒の狂猿、吁、何の幸ぞ哉。天書遠く召す滄浪の客、是れも亦時なり。春衣夜宿す杜陵の花、慚赧々々、㋑忸怩々々。」

㋒白槌の謝、「開堂の次で、㋓共しく惟れば、養源堂頭大和尚、規行矩歩、馬勝の威儀を學ぶ、放去收來、洋嶼の宗旨を滅す。千古叢林觀を改む、㋔三代の禮樂重ねて新なり。茲に辱うす、尊を降つて卑に就き、槌を鳴して法を證す。下座して、必ず㋕十笏室に趨つて、一炊巾を展べん。伏して乞ふ道照。」

諸山の謝、「次に惟れば、諸位㋖東堂大和尚、㋗諸位西堂和尚、道香掩ひ難し。譬へば栴檀の葉葉風を起すが如し、禪林光有り、宛も珊瑚枝枝月を撐ふるに似たり。（撐を一に樗に作る。）

㋐提婆ともいふ、宗旨の大要を提起すること。勅修清規開堂に、「住持垂語、問答、提綱」とあり。

㋑禍の起る基は、六祖大鑑禪師に眙み、達磨大師に初まりたりと。

㋒林際は臨濟を云ふ、字音相通ずる故に用ふるのみ。風顛は狂氣なり。

㋓崇岳松源禪師なり、隆興二年白蓮精舍に得度し、慶元元年詔を奉じて靈隱寺に住す。大いに法幢を張る、靈石妙、大慧果、應庵等に參じて大いに得所あり。瞶は「みゝしひ」なり。

㋔漢書の西南夷傳に、「昆明國に池あり、方二百里、武帝昆明を伐たんとす、池を作して之れに象り、以て水戰を習はしむ」と。

㋕岡浮提婆の略、穢州、穢樹、城勝、金州、好金土等と譯す、古代印度の世界觀にて中央なる須彌山の南海中に存する三角形の島洲なりとす、もと印度大半島に名けたる名なれども、和漢の佛教徒は支那日本等も閻浮提の一部と考へ、南閻浮提大日本國などといへり。

㋖兜率は都史多、兜率陀、觀史多ともいふ、妙足、知足、止足等の譯あり、欲界六天の第四須彌山の頂上十二萬由旬の處にありと。

㋗笛の一種なり。

㋘足なへのかめなり。

㋙心に恥づる貌。

㋚白椎に同じ、白は事を告ぐる意、槌は椎にして擊つて響を爲す具、白椎は尙ほ講白大衆を云はんが如し。碧巖集に、「世尊一日陞座、文殊白椎して曰く、諦觀法王法、法王法

若し褒詞を證さば、恐らくは大德を瀆さん、衆慈賢察せよ。」

總謝、「又惟れば、山門東西の兩序、諸寮㋛辨事、一會の海衆諸位禪師、逐一の謝を致すべしと雖も、此の日開堂、專ら祝聖の爲にす。敢て繁詞せず、併せて小參の次でを期す。各昭亮せよ。」

㋜拈提、「記得す、報恩の逸禪師、因に僧問ふ、『佛、一大事因緣の爲に出世し、未審し和尚の出世如何。』逸云く、『恰も好し』と。一問一答、諦當なることは甚だ諦當、那の僧の作略、奴を認めて郎と作す。報恩好佛、只だ是れ光無し。人有り若し問はん、『㋝新妙心出世如何』と、他に祇對して道はん。『拂一拂して云く、「九萬里の鵬纔かに翼を展ぶれば、一千年の鶴使ち翺翔す。」

㋞當晚小參、垂語、杖を拈じて、「虛堂の拄杖殺活我れに在り、試みに觸著して看よ、毒花、毒果、在り麽。」問答錄せず。

提綱、拂子を豎起す、「吾れに一柄の拂子あり、千聖曾て携へず、列祖も提不起、豎に起る時は、則ち堅に㋟三際を窮め、横に拈ずる時は、則ち横に十方に亘る。是れに因つて明月清風を拂ふ、未だ㋠趙州をして一生受用

如是」とあり、禪林多く事を報ずるには白椎の法に依つてする風習、文殊の白椎に始まる。

㋛共は恭に通じ、うやゝしくなり。

㋜夏、殿、周をいふ、禮樂の最も整へたる時代なり。

㋝十笏云々は維摩方丈の故事をいふなり。

㋞西堂の對、當時前住の人の居處をいふ、蓋し東は主位なり、當時前住の人は是れ舊主なり、故に東堂に居る、又東庵ともいふ。

㋟他山退院の人、來りて化を助くる人をいふ。

㋠山門列職雜務の人を辨理する人を云ふ、即ち事務を辨備する雜役、又首座寮の行者なり、第三座とも云ふ、法戰式上にて開口闡契といふものこれなり。

せしめず。霹靂天地を驚かす、直に得たり百丈三日耳聾することを。來由有り、來由無し。此れに卽して用ひ、此れに離して用ふ。甚だ希有、甚だ希有。日本國裏に禪を說く。(ヲ)也太奇、也太奇。大唐國裡に鼓を打つ。(ル)正恁麼の時。」杖を拈じて云く、「同行の木上座、忍俊不禁にして跳り出でて云く、『和尙恁麼に道ふ、早く是れ龜毛長きこと數尺、(ラ)德嶠答話せず、汾陽夜參を罷む、之れを眞の家訓と謂ふのみ』と。山僧咄して云く、休みね休みね、儞が一拶、恰も兎邊に角を求むるに似て相似たり。只だ頭上に乾坤を定め、毛端に巨海を呑む底の一句子の如きんば、如何が箇の消息を通じ去らん。」卓一下して、「芍藥花開く菩薩の面、椶櫚葉は散す。(ワ)夜叉の頭。」

自序、「宗休、暗證の禪師、央庠の座主、忝く宸藻を拜して、叨りに名藍を汚す。顯に泚することを鮮からず。」

(カ)謝語、小參の次で、「共しく惟れば、南昌堂頭大和尙、西源の的流、急雪鶴鴿相並ぶ。(ヨ)南昌の故郡、落霞孤鶩齊しく飛ぶ、吾が法兄に愧づること莫れ、豈に尊貴墮と曰はん。春寒花遲く、保愛珍重。」

(ホ)古則を提示して之れを拈評すること、提唱、拈古に同じ。
(ヘ)宗休禪師をいふ。
(ト)古來禪林に於ては開堂の當日は必ず昏鐘後に小參を行ずるを例とす、これを當晚小參といふ。
(チ)過去、現在、未來の三世を云ふ。
(リ)南泉普願の法嗣なり。
(ヌ)「也たはなはだ奇なり」の意。
(ル)「まさに斯くの如き時」といふが如し。
(ラ)德山宣鑑禪師小參に曰く、「老僧今夜答話せず、問話の者あらば三十棒と、時に僧あり、禮拜す、山便ち打つ、僧曰く、某甲未だ問話せざるに、什麼としてか打つ、山曰く、儞は是れ何處の人ぞ、僧曰く、新羅の人、曰く、未だ船舷を跨らず、好し三十棒を與ふるにと、僧此に於て省あり。」

次に惟れば、養源堂頭大和尙、聲價大いに振ふ、天下德爵齒の達尊を仰ぐ。典刑猶ほ存す、僧中才學識の三長を得たり。誰れか嚴瞻せざらん乎。又惟れば、大心堂頭大和尙、大心の衲子、(タ)龍泉を舌端に掉ふ。本色の(レ)白拈、虎鬚を逗裡に捋づ。(ソ)造次顚沛、宗旨を失はず、誰か敢て近傍せん乎。

更に惟れば、山門(ツ)兩序、東班都寺禪師、兩翼相遙ぶ。鴛序鵠立班を分つ、百廢具に興る。(ネ)鯨唫鼉寂響を革む、亦偉ならず乎。監寺禪師、則監院、靑林の禪を扣く。(ナ)丙丁火を求む。(ラ)會和尙(ム)白雲祖を接す。玉人璠を治す、其れ然らず乎。悅可禪師、其の才や寔に後佛に紀綱たり、其の機や況んや仙陀を陶鑄す。是れ華姪の提唱にあらず乎。副寺禪師、副寺禪師、法財を護し、世財を護す。父の蠱を幹くし、母の蠱を幹くす。亦宜しからず乎。典座禪師、直歲禪師、(ウ)雲母を蒸して飯と作す、(ヰ)典座の妙手乎。虛空を束ねて棒と爲す、直歲の活機なり。

(ツ)梵語、勇健、暴惡と譯す、八部鬼衆の一、又捷疾鬼ともいふ、天夜叉、地夜叉、虛空夜叉の三種ありと。
(ネ)上堂、又は法戰の後、法要の終末に臨んで、當事者たる堂頭又は座首よりする隨喜の感謝の講。謝辭に同じ。
(ナ)此の二句は唐の王勃が滕王閣序に見ゆ。
(ラ)古の銘劍なり。
(ム)白晝、人の物を巧にぬすみとるをいふ。
(ウ)瞬時の間を云ふ。千字文に、「仁惡隱惻造次離れず、節義廉退顚沛虧けず」と。
(ヰ)西序、東序をいふ。
(ノ)鯨のほゆる、ねもりの默すること。
(オ)丙丁は火のえ、火のとにして、童子は火の擬人稱なり、火は火の神のこと。
(ク)楊岐法會禪師なり。

又惟れば、西班堂中座元禪師、佛祖の權衡、人天の眼目、徒を匡し衆を領ず、寧ろ講經の首座と曰はん乎。尊を降つて皐に就く、諸れを退位の菩薩に譬ふるのみ。蓋し瓜葛の法系を忘れざるの謂乎。

後班座元禪師、（後班を一に後版に作る。）吾が徒を輔賛して、小釋迦の懸記に合す。斯道を ㋑ 黼黻して大禪佛の高蹤を躡む。正に好し力を著くるに。

㋒ 記室禪師、翰墨の ㋓ 膏肓未だ療せず、螢雪の苦夫旃れを勉めよ。

㋔ 知藏禪師、知藏禪師、白傅が詩 ㋕ 大藏經に入る、老韓傳を同じうす。

碧岩集公子行を蹠ぐ。涇渭流を異にす、入と不入と、公其れ ㋖ 甄別せよ。

㋗ 知賓禪師、知浴禪師、㋘ 大應客を徑塢に接す。朝一人、暮一人、㋙ 太原、浴を雪峯に主る。火三昧、水三昧、古に今に、至れり矣、盡せり矣。

㋚ 侍香禪師、戒香定香解脫香、天生の司南を鼻孔に了す。麈說、刹說、熾然說、吾が道已に東するの證明を謝す。

侍狀禪師、侍客禪師、侍藥禪師、書を馳せて家に到らざるは侍狀なり、客を報じて帝鄉に在るとを知らざるは侍客なり、病を療するに驢駝の藥を假らざるは侍藥なり。桃紅李白薔薇紫、一以て之れを貫せり。珠簾玉案翡翠の屏、三重も也た有り。

㋐ 白雲守端禪師なり、楊岐法會の法嗣。

㋑ 彭祖齊て雲母山に隱れて雲母を服す、壽八百歲と。

㋒ 六知事の一、衆僧の辨食を掌る役。

㋓ ほふつは禮服なり、左傳桓公二年に、「火龍黼黻は其の文を明かにするなり」とあり、故に斯道を昭明にするをいふ、或は文飾する意にいふ。

㋔ 記室は叢林に於ける書記なり。

㋕ 不治の病をいふ、左傳に、「病盲の上、膏の下にあり、以て攻むべからず」とあり、習辯のぬけ難きをもいふ。

㋖ 藏主に同じ、經藏を掌る役なり。

㋗ 一切經のこと、釋尊所說の大小乘の三藏及び印度、支那日本の諸高僧の著書を藏めたるものなり。

目子、「某座元某座元、前資辨事二員の問前、一會の ㋘ 海衆諸位禪師、各般若叢に坐す。百千の ㋙ 文殊左右に彌布す。再び ㋚ 楞嚴會を開く、四敎の ㋛ 阿難、內外玲瓏、集めて大成す矣。亦盛ならず乎、各乞ふ恕宥せよ。」

拈提、「記得す、達磨大師曰く、『吾が法三千年の後に於て、未だ曾て一絲毫許りをも移易せず。』後來覃葛廬頌して曰く、『東西目を縱にすれば乾坤闊し、玉露澂秋氣宇高し、山は是れ山兮水は是れ水、何ぞ曾て一絲毫を移易せん。』㋜ 少室の單傳、自ら ㋝ 安期が棗有り。葛廬が一偈、㋞ 王母が桃を貪らず、子細に點檢すれば、虛を吠え實を咥む。一犬千 ㋟ 猱、休上座野狐の見解を打破し、葛廬の ㋠ 風騷を飜案し去らん。」拂一

㋘ 明かに別くるをいふ。

㋙ 知客に同じ、叢林における來賓の迎待應接を典る役なり。

㋚ 建長寺開山南浦紹明、支那に入り、虛堂愚に就いて法をうく、徑山にありて賓客を典らしむと。

㋛ 太原浮上座、雪峯義存禪師の法嗣なり、雪峯の室中に參じて師資の道を成す、浴室を掌り、玄沙の打水に遇ふて、大いに相看する所あり。

㋜ 法式の際、住持に隨侍し、香臺を捧持する役。五侍者の一たる燒香侍者と相鉦んで住持の後邊に隨ふ。

㋝ 叢林に衆會する一團の衆僧をいふ。一會の衆僧は大海の如し、諸河流れて一處に歸す、本名既に滅して大海の名のみ存す、故に海衆と名くと。

㋞ 文殊師利菩薩、普賢と相對して智慧を掌る。

㋟ 叢林にて衆僧の安居を所保する爲に修する法會なり、毎年五月十三日に建啓し、其の翌日より八月十貳日迄毎日朝課前又は午時にこれを修し、八月十三日を以て滿散となす。

㋠ 佛の十大弟子の一、多聞第一なり、佛の從弟にして甘露飯王の子、世尊に隨從すること二十余年、侍者の稱、阿難にはじまる、如來嫡傳第三祖となる。

㋡ 少室は達磨面壁の所なり。

㋢ 抱朴子に、「安期生藥を海濱に得る、耶耶の人、傳へて世々之れを見る、計るに已に千年」とあり。

㋣ 王母は西王母なり、列仙傳に、「漢の元封元年に武帝殿に降り、蟠桃七枚を帝に進め、自ら其の二を食ふ、帝核を留めんと欲す、母曰く、此の桃世間有る所に非ず、三千年に

拂して云く、「少室別傳の旨、誰か知らん來處の高きを。將に謂へり碧瞳窄しと、千里一秋毫。」

翌日㊂玉鳳院拈香、「大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺、凡そ新住持と爲る者、開堂の翌旦合山の清衆を率ゐて、玉鳳塔下に就いて諷經一上す。臣僧宗休、其の例を攀ぢて、謹んで此の妙兜樓を焚いて、以て㊆花園太上法皇尊前に供じ奉るの次で、拙偈を唱へ、聊か韭薄の奠に充つと云ふ。玉鳳花を銜む東海の東、太平の門戸春風を競ふ、三皇五帝果して何物ぞ。」香を擧して云く、「一朶の香雲梵宮を擊ぐ。」

退院、「祖翁一片の舊田園、自ら鋤犂を荷ふて後昆と稱す。啼鳥落花留むれども住まらず、倒に佛殿に騎つて山門を出づ。」

一實のみと。」

㊁猱は「むくざる」なり。

㊃文藻をいふ。

㊄妙心寺境内にあり、花園帝の御廟なり。

㊆第九十五代花園天皇、伏見帝第三子、正安二年皇太子となり、是に至りて踐祚、御年十二、文保三年春二月位を皇太子に讓り、建武二年十一月薨

髮し、法名運行、正平三年十一月崩ず、壽五十二、山城十樂院山上に葬る、天皇學を好み和歌をよくす、深く禪法を好み、妙超慧玄を以て師となし、花園離宮を捨てて妙心寺となし、慧玄をして此に居らしむ、一室を其の側に創め、玉鳳院と號し、之れに徙御す、遺像今尙ほ存す。

再び正法山妙心禪寺に住する語錄

侍者某編

冬節上堂祝香、「薩訶世界南贍部州、大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺住持傳法沙門宗休、書雲令節、欽んで寶香を焚いて、端に爲に今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。陛下恭しく願はくは、斬新の日月、㊀王事鹽きこと無きの詩を歌ふ。太平の山河、聖壽賢を得るの頌を奉らん。」

垂語、兩手を開いて、「線路を放開して、一氣潛かに回る。」拂を拈じて云く、「雲物を看んと要す麼、誠に魯臺に登れ、有り麼、參。」僧有り衆を出でて云く、「冬至日永し、一絲毫の閑工夫を欠少す。㊁妙高雪漫たり、五十三の善知識に相見す。時有り節有り、古に亘り今に亘る。」師云く、「暖律灰を飛し、繡紋線を添ふ。」僧云く、「記得す、天澤老師、至日上堂、僧問ふ、『群陰消盡して㊂一陽來復す。禪僧家此に到つて如何が轉身せん。』答へて云く、

㊀鹽は音こ、堅固ならざる義、王事は堅固ならざるべからず、故に王事に執掌して暇なきをいふ。詩經唐風に、「王事鹽きことなし、黍稷執うる能はず。」

㊁天童山妙高臺をいふ、眼藏諸法實相の卷に、「寂光室の西壁の前を過ぎて大光明藏の四階にのぼる、大光明藏は方丈なり、四の屏風の南より香台のほとりに至りて、燒香禮拜す、入室この所に雁列すべしとおもふに、一僧も見えず、妙高臺は下簾せり、ほのかに堂頭大和尙の法音聞ゆ、とき

『恰ら老鼠の牛角に入るが如し、端的なりや否や』と。」師云ふ、「蝦跳れども斗を出でず。」進んで云く、「學人轉身の處、和尚如何が祇對せん。」師云く、「門前の刹竿を倒卻し着せよ。」進んで云く、「天寒人寒、兩人一椀」師云く、「別別、珊瑚枝枝月を撐著す。」僧云く、「烏鉢は見易し」と。便ち禮拜す。師云く、「之れを見て取らざれば、千歲にも逢ひ難し。」

[illegible]「佛性の義理を識らんと要せば、當に時節因緣を觀ずべし、㊁作麼生か是れ時節因緣。冬時月頭に在れば、則ち被を賣つて牛を買ふ、木人倒に㊂葭管を吹く。㊃冬至月尾に在れば、則ち牛を賣つて被を買ふ、牧童遙かに金鞭を指す。僧堂今朝慈明の榜を掛着す、首座昨夜、㊄洞山の禪を掇退す。塞北天寒し、十三葉の牡丹雪內に開く、江南地暖かなり、一兩枝の梅花臘前に綻ぶ、正與麼の時。」杖を拈じて、「牀角の漆道士出で來つて咄一咄して云く、』㊅適來許多の緒餘土苴。徒に言詮を費す。巍巍乎堂堂乎、同得同證本來の因果、塵塵爾り、刹刹爾り。無縛無解應用無邊、時節に拘らす、全く變遷を絕す。別に佛性の義を識らんと欲す麼。」『卓一下して云く、

㊀作麼　どうじや、どうして、どう、如何、どうしてか等の語問詞なり。

㊂葭管　あしの管なり。

㊃冬至月尾　今大抵十二月二十二日なり、曆にては十一月中にあり、これを節日として賀す、殊に其の朔日にあるは朔旦冬至といひて、二十年に一度ありて、瑞祥として禁中に公事あり、卽ち被を賣りて牛を買ふ所以なり。月尾にあればはこれに反す。

㊄洞山　洞山良价禪師なり。

に西川の祖坤維那來りて同じく禮拜しをはりて、妙高臺をひそかにのぞめば滿衆おちがさなれり」とあり。

㊅昜の地雷復より來る語にして、陰極りて一陽來復するを云ふ、節にすれば冬至を云ふ。

自序、「宗休、麈頭鼠目、驢顏馬腮、江湖流離、將に謂へり木瓜杲風子と。天地の棄物、元來蓬髮の㊆休上人、慙汗す。」

謝語、上堂の次で、「恭しく惟れば、養源東堂大和尚、㊇勃窣理窟、天然の㊈作家、手に信せて麤竹篦を拈じて、臨濟の骨髓を敲出す。病を治する に長松草を以てす、普明の宿因を感じ得たり。尊候如何、保養珍重。」

次に共しく惟れば、大心東堂大和尚、才智山長く、(才智を一に才地に作る。)行藏雪潔し。一株の蔭涼樹既に倒るゝの日に丁つて、正宗を扶起す。五濁の優曇華再び現ずるの時に遇ふて、來つて補處と稱す。百里雲を興す者は龍なり、千仞鯼を覽る者は鳳なり、之れを㊉瞻、之れを仰ぐ。

更に惟れば、山門の兩序、滿堂の活衲、問話の禪客諸位禪師、機は東頭に居り、雲は西頭に居る。謂つ可し叢社の兄弟と。㊋蠻は左角に屬し、觸は右角に屬す。亂世の英雄と稱するに足れり、各乞ふ昭亮せよ。

拈提、「記得す、古德冬至上堂に云く、『恁麼も也た是、不恁麼も也た是、恁麼も也た不是、不恁麼も也た不是、恁麼不恁麼、總に是、總に不是。』何ぞ謂ふこと此の如くなる。陽氣發生して硬地無し、古德の提要、恁麼不恁麼、强ひて㊌鴻蒙を判つ。總に是、總に不是、兩處に

㊆休上人　休上人、慙汗す。

㊇勃窣理窟　天然

㊈作家　才智山長く、(才智を一に才地に作る。)

㊉瞻　之れを仰ぐ。

㊋蠻は左角に屬し、觸　右角に屬氏、各相戰つて死者數萬」と。これに出づ。

㊌天地自然の元氣を云ふ、莊子に、「鴻蒙方に脾を拊ち、雀躍して遊ばん」と。蒙はまた濛に作る、元氣の未だ分れざるをいふ。淮南子に、「鴻蒙の先を開く」と。

㊍先刻、先時に同じ。

㊎宗休自ら謂ふなり。

㊇勃窣は行緩の貌をいふ。

㊈斯道に老練なる作者、又は師家をいふ。支那唐宋時代の禪者が、詩文を以て禪を賞揚したるより、詩人墨客の家の語を其のまゝ引用したるなり。

㊉仰ぎのぞむなり。

㊋莊子に、「蝸牛の左角に蠻氏、

功を失す。陽氣發生して硬地無し、窮すれば則ち變じ、變ずれば則ち通ず。山僧が見處、他と同じからす。」拂一拂して、「清風明月を拂ひ、明月清風を拂ふ。」便ち下座す。

歲旦上堂祝香、「聖明を仰ぐ、日の如く月の如し。容算を祝す、地に同じく天に同じ。」

垂語、「造化の爐を開いて、㊂鐵崑崙を鑄る、見る麼、斬新の日月、特地の乾坤。」僧有り、衆を出でて云く、「萬歲古佛出世し、何ぞ舊歲新歲の送迎を管せん。高く祖印を仰ぐ、南極老人天より下る、寧ろ㋒無極太極の先後を分たん。仰いで皇圖を祝す、獅子の音を發して、鷄旦の賀を暢べよ。」師云く、「山門瑞氣を增し、草木光輝を發す。」僧云く、「記得す、趙王、趙州を訪ふ、州立たす、手を以て自ら膝を拍つて云く、『會す麼。』王曰く、『不會。』不審し佛法と王法と、是れ一般、是れ兩般。」師云く、「一鎚兩當。」進んで云く、「茲に承る、今上皇、綸命を下し、吾が正法の門を建立すと、謂つ可し山中雨露新なりと。」師云く、「這裡より入れ。」進んで云く、「興麼ならば則ち上皇の上方に於ける、趙王の趙老に於ける、之れを古にし、之れを今にす。豈に優劣有らんや。」師云く、「二十年來塵面を撲つ、如今始めて碧紗籠を得たり。」進んで云く、「山花咲み野鳥語る。」師云く、「吾れ爾に隱す無し。」

㊂支那にて、上代より四方にある高山の名とし、黃河の源は此の地にありと信ぜり、近世新疆和闐の南方、西藏の北方に聳ゆる山脈を以て崑崙山とせり。月江錄に「黃河九曲、分水崑崙に出づ」と。

㋒無中に有を生ずるをいふ、唐の杜順和尙の華嚴法界觀、また宋の周惇頤の大極圖說に見ゆ。

㋓智門光祚の法嗣、諱は重顯、雪竇は其の號なり。景德傳燈錄によりて古則一百則を拔き之れが頌古を作る、後に圓悟禪師評唱して碧岩集と稱するもの卽ち是れなり、其の遺錄を集めたるものに、洞庭語錄、雪竇開堂錄、湯泉集、祖英集、頌古集、拈古集、雪竇後錄等の七集あり。

進んで云く、「百千の㋓雪竇・圓悟、合して一人と爲る。」師云く、「低聲低聲。」

提綱、「年年是れ好年、春色高下無し。日々是れ好日、花枝自ら短長。水の器に隨ふが如し、圓ならす方ならず、㋔西乾に在つては新歲經と名く、釋氏に本く。㋕東震に在つては㋖先天易と曰ふ、㋗犧皇に始まる。法霈を九野に洒ぎ、壽域を八荒に開く。也太奇、也太奇。新羅國裡拄杖、舞を作す、甚希有、甚希有。古鄂城邊落梅上堂、諸人還つて聞く麼、是れ何の瑞祥ぞ。」杖を卓すること一下して、「臥龍纔に奮迅すれば、丹鳳も亦翔翔す。」

自序、「宗休、㋘繫れる匏、魯叟食はず、㋙朽ちたる木、宰予彫り難し。只だ材を取る所無きことを愧づ、何ぞ敢て職を補ふに堪ふ可けん。汗顏。」

謝語、上座の次で、「共しく惟れば、山門兩序、雲堂の四衆、適來の禪客、諸位禪師、東に鱗蟲有り、龍之れが長爲り、西に毛蟲有り、虎之れが長たり。南に羽蟲有り、鳳之れが長たり、北に甲蟲あり、龜之れが長たり。此れに由つて之れを觀れば、吾が佛日祖翁、麤竹篦下、四員の禪將を打發す。鳳なり龜なり、龍なり虎なり、斯れより一源を四派に分つ、允に以有る哉。抑々正法眼破沙盆を具する者、松源・破庵・曹源・萬庵、豈に中峯の道

㋔西乾は方角にて、印度をさす、乾はいぬゐの方にて、西北を云ふ、然れども必すしも爾か云ふにあらす、西方といふ意なり。

㋕東震は東方なり、震は卯に當り、正東なり、支那をさす。

㋖先天とは、人の生れ來る以前をいふ。易に、「天に先だちて天に違はず」とあり、蓋し易をいふか。

㋗伏犧は三皇の首位にあり。

㋘繫匏は棚にかゝれるふくべのこと。轉じて棚にかゝれるふくべの如く爲すことなく只だ徒らに日を過すことにも用ひろ。

㋙論語公冶長篇に、「宰予晝寢す、子曰く、朽木は雕るべからす、糞土の墻は杇るべから

を起さゞらん乎。猗歟、盛なる歟、各々道體萬福。」

拈提、「記得す、大川の濟禪師、歳旦上堂に曰く、『正月初一、若し佛法を說かば、三百六十日殺世法に使せられん』と。大川、恁麼の告報、誤つて㋐元字關を認めて、を說かば、三百六十日佛法に縛殺せられん、若し世法を說かば、三百六十日殺世法に使せられん』と。大川、恁麼の告報、誤つて㋐元字關を認めて、雙眼睛を打失す。何が故ぞ、會するときは則ち途中受用、會せざるときは則ち世諦流布、休上座、𤣥。拂子頭上に光明を點出し去らん。滿堂の㋑露柱元正を賀す、千年河水の淸を待たず、佛法に非ず兮世法に非ず、㋒綿蠻たる黃鳥花を出づる聲。」

歳旦上堂、「祝聖、大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、君を㋓周宣漢武の上に致し、㋔賢を莘夫渭叟の間に舉げん。」

垂語、拂を竪てゝ云く、「這の正法樹、微咲の花を開く、有り麼、風流當家に屬す。」僧有り、衆を出でゝ云く、「大王萬福の趙古佛、金雞曉を報じ、玉鳳花を銜む。侍者三喚の㋕忠國師、木馬風に嘶き泥牛月に吼ゆ。賴に法席に臨む、仰いで㋖不圖を祝したまへ。」師云く、「㋗日月秦樹に垂れ、乾坤漢宮を繞る。」僧云く、「記得す、西巖惠禪師、歳旦上堂に云く、『磨盤舊面を呈し、水碓新年を拜す。無作にして而して作し、然らずして、而して然り』と。是れ何の條章ぞ。」師曰く、「只だ雪の消し去るを待つて、自然に春到來す。」進んで云く、「法山今朝上堂、新舊に涉らず、賀正の一句得て聞くべ可しや。」師云く、「普。」進んで云く、「雲は北嶺に冷じく、梅は南枝に香し。」師云く、「侍者、禪に參得し了れり。」進んで云く、「人々襟袖に香を帶びて歸る。」便ち禮拜す。

提綱、「朝來花萬福、鶯は奏す起居の聲、是れ甚の聲ぞ。」杖を拈じて云く、「木居士側に在り、吾れと同年同行。晩節を松朋竹友に論じ、歳寒を攀弟梅兄に約す。其の鬚、履を拂ひ、其の髮、纓を脫す。特地に出で來つて、㋘胡盧軒渠して曰く、『鐘魚鼓板是れ甚の聲ぞ、蝦蟆蚯蚓是れ甚の聲ぞ、長老長老、何ぞ聰明ならざる、盲者の日月に依俙として、聾者の雷霆に彷彿たり。重ねて此の義を宣べんと欲す、諦聽諦聽。』昨は舊歳を送り、今は新正を迎ふ。是の故に一氣資けて始め、品物形を流く。四時忒はず、春は鳥を以て鳴く、秦嶺霞秀で、洛山雪晴る。節を擊つて歌を唱ふ東村の王太白、詩を作つて酒に換ふ南隣の張先生。門門大吉、戸戸太平。御園の牡丹紅を着く、四海の香風此れより起る。

す、予に於て何んぞ誅めん」と。

㋐凡字のこと、元字脚は凡脚ち凡字なり、又乙字のこと、元字脚は元字の脚の意にて元字の脚は乙、乙は一に通ず、故に元字脚は一字の意、又文字の總命をいふ。

㋑むきだしの柱、目に見え居る柱、無情又は非情を表するに用ふる語なり、古佛露柱に交る等の語あり。

㋒綿蠻は、黃鳥のなく聲なり。詩經小雅に「綿蠻たる黃鳥幽谷をいでて喬木に集る」と、又歐陽修の詩に「綿蠻巧に囀ず花間の舌。」

㋓周の宣王、漢の武帝のことなり。

㋔くさむらや、濱べの人の間からも、賢者をえり上ぐるをいふ。

㋕南陽慧忠國師は、甚の嚴整の人、姓は丹氏、自ら心印を受けて、南陽白崖山の黨子谷に居す、四十年山門を下らず、道行帝里に聞ゆ、被の大耳三藏を看破せしも此の時なりと、太曆十年十二月九日寂す、勅して大證國師といふ。

㋖大圖に同じ。

㋗秦樹、漢宮は只だ相對するのみ。

㋘胡盧は鈴の音、又は聲の不分明にとる、軒渠は自得の貌なり、聲を正しうして悠然として語るをいふ、又狼狽魶めて云ふ意にとる、又一說なれども前說よきに似たり。

官池の鷗波碧を蘸す、㋺五湖の煙景誰有つてか爭はん。㋻人境不奪㋼公案現成。向上の宗乘を擧揚して、釋迦を罵り彌勒を打す。年頭の佛法を商量して、明敎を欺き鏡淸を瞞す。崑崙の鼻孔を拈卻し、金剛の眼睛を突出す。然も恁麼なりと雖も、祝聖の一句、如何が施呈せん。」卓一下して、「龍、水の時を得て意氣を添へ、虎、山色に靠つて威獰を長す。」

自序、「宗休、麈頭鼠目、鳥背魚顋、宗門一世に衰ふ。烏虖、師の半德を減ず、千嶂の月を住持す、胡爲れぞ他の五緣を失す。慙汗。」

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門東西序、㋽單寮蒙堂前資辨事、一會の海衆、適來の禪客、諸位禪師、宗門惡毒の爪牙、賢劫第四の釋獅子を獲得す。㋾鉗鎚妙密の手段、洋嶼五百の活馬駼を捉敗す。末流を支分す、㋿四派を江河淮濟に譬ふ。常住を護惜す、一年を春夏秋冬に配す。㌀毎日食輪法輪を轉す、何の時か臺帖鈞帖を拜せん。叮嚀、德を損す、各乞ふ諒察せよ。」

拈提、「記得す、僧、雪峯に問ふ、『元正一日、四相盡く朝す、未審し王何の祇對か有る。』峯曰く、『四相、年に隨つて老ゆ、眞王春に預らず。』一人は曲を拗して直と作す、一人は假を弄じて眞に像る。擧燭の燕說を用ふるが如く、㋷鄧鼻の郢斤を運すに似たり。山僧亦偈を作りて㋸顰に效ひ去らん。三皇五帝百花の春、廚庫山門雨露新なり、陰陽造工の手を借らず、天然の㋹拄杖黑鱗皴。」

歲旦上堂、祝香して、「時昇平に屬して、扶桑樹頭鳳舞ふ。春新曲に入りて、碧梧桐裡鶯啼く。一に願はくは、君を堯舜の上に致し、而して堯舜の雨露を四溟に施し、二に願はくは、我れを季孟の間に待つて、而して季孟の風俗を萬世に移さんことを。」

垂語、拂を以て左を指して、「左邊は去年の梅。」右を指して、「右邊は今歲の柳。」中を指して、「若し中間底如何と問はゞ、顏色馨香舊に依る。㋻參。」僧衆を出でゝ云く、「太平象有り、綠髮の將百蠻を領ず。王事盬きこと無し、㋼緇衣の禮三代を復す。法社の盛なる、我が道光あり。」師云く、「烏藤舊に依つて㋽黑鱗皴。」進んで云く、「春風門に入つて、千花背を生ず。」師云く、「又秋露の芙蕖に滴るに勝れり。」僧云く、「記得す、天澤祖歲旦上堂に云く、『年々是れ好年、日日是れ好日。甚としてか新舊有る。』意旨作麼生。」師云く、「花に遇ふては花を成し、柳に遇ふては柳を成す。」進んで云く、「和尙

㋺太湖の名、其の周行五百里あるを以ての故に五湖と名づく、また一說に、太湖、射貴湖、上湖、洮湖、滆湖を以て五湖となす、又鄱陽、靑草、丹陽、洞庭及び太湖となすと、此の五湖は前說是なるに似たり。

㋻臨濟四料簡の第四、人は主觀にして、客觀の境の存立を放開して、一切を自由ならしむる積極的の手段なり。

㋼現成の當體卽ち公案の意、宇宙所現の萬法其のまゝが悟の現れといふこと、現成公案に同じ。

㋽單寮は、獨寮、又は獨房といふ、單身にして一寮を專有し、同舍のものなきをいふ、蒙堂は叢林にて勤舊退職者の安息する堂舍をいふ、蒙は靜養の義、易の蒙卦の彖に、「蒙は以て正を養ふ、聖の功也」とあり、故に此の蒙堂に住する退職の人を稱す、前資は叢林にて副寺以下の職を務め、三次を歷て退休したる老宿をいふ。

㋾鉗化の鍛なるた、鉗又は鎚の刀を鍊るに必要なるに譬ふ。

㋿妙心の四派をいふ、卽ち龍泉、東海、靈雲、聖澤それなり。

㌀財施及び法施に對して云ふ。

㌁莊子に、「郢人、鼻端に墨あり、蠅の翼の如し、匠をして之れを斲らしむ、匠、斤を運らし、風をなして、その墨を斲り盡す、而して鼻傷かず」

今日上堂、新舊に渉らざる底の一句、得て聞く可し麼。」師云く、「聞く麼。」進んで云く、「上來は且く置く、住山の㋓鏘斧花を開く時如何。」師云く、「見る麼。」進んで云く、「鳥銘常々在り。」師云く、「㋔後生畏る可し。」僧便ち禮拜す。

提綱、「祖師の妙訣、誰が家か春ならざらん。㋕年の元、月の元、日の元、元來縫罅無し。天一を得、地一を得、人一を得、一氣洪鈞を轉ず、之れに因つて、野外綿葩舊に復す。雨餘の鐘聲響新なり、玉毫光耀く紫栴檀、善住天子を拜屈す、青山涌出す黄金の宅。㋖釋提桓因を驚起す、塵塵說法、刹刹說法、處處全眞、物物全身。㋗烏張三、酒を喫すれば、黑李四、唇を濕す。放開するときは則ち夜都、地に落ち、把住すれば則ち幷汾信を絶す。」杖を拈じて、「且く道へ、放開するが是か、把住するが是か、喏漆桶痴兀兀、醉袈裟㋘笑閭閭。若し復た未だ會せずんば、看よ看よ、盡大地一箇の木上人。」卓一下して、「只だ補衮調羹の手を將つて、如來の正法輪を撥轉す。」

自序、「宗休、千年の常住、百日の主人、半德、師に減ず。蘇長公、庭堅が體に效ふと爾云ふ。至尊位を列ぬ、㋙韓非子、伯陽の傳を編する者乎。汗顏。」

謝語、「養源和尚、雪髮の獅子、金翅鳥王、㋚潙嶠善く其の源を養ふ。山下の檀越、蕭然たる行李、葉波別に何の法をか傳ふ。水光林影、勃窣たる㋛伽梨、翅に三千威儀經を諳んずるのみならず、況んや復た㋜六十華嚴の易を劃するをや。道體萬福、孟春猶ほ寒し。」

大心和尚、㋝大愚は愚ならず、正法は法無し。風㋞八極に生ず、虎丘虎頭虎尾一時に收まる。雲九天に連る、龍泉龍子龍孫兩處に化す。㋟何なる哉、後學の甘露、僉曰ふ本色の住山と。人其れ仰がざらん乎、師の存する所なり。

山門東西序、都寺悅衆、寶公、生薑の名を改めず、華姪誰か桃花娘しと道ふ。爾の音を玲瓏

と、鄧は楚の郡なり。

㋒西施は越の美女なり、吳王夫差、大いに之れを幸す、市に入る毎に、人見んことを願ふものは、先づ金錢一文を送ると雖に巧みなり、醜女之れを疑して、却つて醜なるを知らず、拙にして却つて巧に効ふを恥づるなり。

㋓魚鱗の形したる眞黑なる拄杖をいふ。

㋔垂示法語の終りに、喝、露、喏などの文字と同じく用ふ、此の場合更に言外の玄旨に參すべきを勸戒する意なり。

㋕宗門の禮威儀をいふ。

㋖拄杖に同じ、黑き故にいふなり。永平元禪師云く、「多歲住山の烏拄杖、一旦龍と化して風雲を起す。」

㋗鏘は小刀なり、斧はなの、まさかり、之れを般若の智劍にたとふ。

㋘後生は少年なり、年富み力强し、以て學を積みて待つことあるに足る、故に其の勢畏るべし。論語子罕篇に、「後生畏るべし、焉んぞ來者の今に如かざるを知らんや」と。

㋙年と年、月と月、日と日とのさかひめに、少しの隙間もないといふ義なり。

㋚具には釋迦提婆因陀羅、又は釋迦提桓因陀羅、梵音、シャクラ、デーヴーナーン、インドラ(Cakra-devānām-indra)能天主と釋す、帝釋と同じ。

㋛烏張三、黑李四は權兵衛、太郎兵衛といふに同じ。

㋜和悅して靜かなる貌なり。

㋝韓の諸公子なり、刑名、法術の學を喜ぶ、韓の削弱せるを見て、數々書を以て韓王を諫む、王用ふること能はず、是に於て、孤憤、五蠹、內外諸說、說林、說難等十餘萬言を作る、二十卷五十五篇あり。

㋞潙山靈祐、百丈懷海の法嗣、仰山と共に潙仰宗の祖となす。

㋟僧伽黎衣のこと、梵語、大衣は三衣中の最も王なるものにして、僧の王宮に入る時、又は衆落に入る時の袈裟なり。

㋠東晉の佛陀跋陀羅の譯出せる六十卷より成る華嚴經をいふ。

㋡老子の「大辯訥の如し、大工は拙の如し」などに同じ。

㋢八荒又は八方をいふ。

㋣梅恒麗耶と稱す、善薩の名、姓は阿逸多、無能勝と譯す、南天竺の婆羅門にして兜率天に生れ、現に兜率の內院に居て、當來には此の世に出興して、釋迦佛の處を補ひ、賢劫千佛中の第五佛となる。

㋤義玄禪師、黃檗の法嗣、臨濟宗の祖。

㋥雲門文偃、雪峰義存の法嗣、

にして、吾が道を黼黻す。

前版後版、釋迦前ならず、㊋彌勒後ならず、地を易へば皆然らん。㋐臨濟は夏の如く、㋑雲門は春の如し。維れ時至れり矣。

記室知藏、一人は積翠の三關を透過し、一人は少室の大藏を打開す。爛葛藤を胸襟に掃ひ、文章の花を㋕盆盎に輝かす。

侍香侍狀侍衣侍藥、這箇は㋔香嚴の本寂を卽す、鼻孔遼天。那箇は華林の大空に跨る、威風野に逼し。彼の紅粉侍者を想ふ、此の烏鉢の道人を得たり、中に一箇の叢社の風流有り。藥籠の人物、更に一杯の酒を盡せ。㋖三嘆の聲を認むること莫れ、夫れ是れ之れを侍藥の職と謂ふ。

堂中の㋗萬緇郎、適來の十禪客、諸位禪師、㋘渥洼の奇種志を馳す。㋙騅騑駰駱驪騮騵、㋚雲臺の諸將功を論ず。㋛井鬼柳星張翼軫、箇箇轉處に立在す。人人盡く光明有り。三年關山の月、誰か是れ知音、一日長安の花、各自に眼を着けよ。至祝至祝。

拈提、「記得す、西巖の惠禪師上堂、拄杖を拈じて云く、『只だ㋜鷲峯老漢の如きんば、百萬の衆前に於て、一枝の花を拈ず、直に得たり金色の頭陀、破顏微笑することを。儞且く道へ、是れ梨花耶、李花耶、梅花耶、杏花耶。』卓一下して云く、『一時に春風に分付與す』と。子細に點檢すれば首鼠兩端、世尊手に信せて拈じ來る。春人間に至つて棄物無し、西巖模に依つて脫出す、月花影を移して欄干に上す。㋝山僧、㋞鑽。梨梅杏李一般寒し、金色の頭陀熱瞞せらる。拄杖花開く太平の日、春風力を着けて試みに吹け看んぞ。」

㋐結夏上堂、祝聖、「大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、天地と其の德を合せ、日月と其の明を合せ、四時と其の序を合せ、鬼神と其の吉凶を合せたまはんことを。」

垂語、「圓覺の伽藍を開いて、安居の偈子を說く。諸人還つて聞く麼、葵花眼無く、芭蕉耳無し。參。」

提綱、「十五日以前は、㋟金烏東に轉ず、十五日以後は、玉兎西に移る。正當十五日、傍に漆道士有り、眼蒲萄朶の如く、手に珊瑚枝を攀づ。㋠圓陀陀地、得得として出で來つて、祖師の鼻頭に築着す。松は直く棘は曲れること、古佛の心膽を吐露す。綠暗く紅稀なり、一溪の雲を拾ひて衣鉢と作し、千嶂の月を接して住持と稱す。或時は與奪縱橫、聖を轉じて凡と作す、遮那珍御の服を脫却す。或時は開遮自在、凡を轉じて聖と作す。向上の惡鉗鎚を拈起す。濡首徧吉、二鐵圍に貶向す。空裡の磨盤

雲門宗の祖。

㋕盎はほとぎ、かはらけ。

㋔香嚴智閑禪師、青原下四世潙山靈祐の法嗣、擊竹の音を聞いて大悟徹底す。

㋖侍者の別名なり。

㋗堂中の衆徒をいふ。

㋘厚く深きをいふ。

㋙騅はあしげ、騑はそへ馬、騮はかはらげ馬、駱はどろあしげ、驪は黑馬、騮は栗毛、騵は白腹の栗毛馬、上文を受けて點出す、而して下文の井鬼云々に應ず。

㋚後漢の明帝三年、中興の功臣二十八將を南宮の雲臺に圖畫し、天の二十八宿に配すと。

㋛井、鬼、柳、星、張、翼、軫、皆二十八宿の一星なり、何れも南方の星なり。

㋜靈山に於ける拈華微笑の機緣なり、老漢は世尊をいふ。金色の頭陀は迦葉尊者をいふ。

㋝靈はものを指す語、又語助なり。

㋞夏安居の制をむすぶこと、結制、結衆に同じ。

㋟金烏は日の異名、玉兎は月の異名なり。

八角を生ず、㋔陝府の鐵牛兒を驚走す。與麼の時節、㋕臘氷鵞雪、修治を假らず、甚の護生禁足とか說かん、什麼の取證剋期をか論ぜん。然も此の如くなりと雖も、只だ殺中に透脫し、活處に機を投せんことを要す。」卓一下して云く、「限り無き春を傷む意を知らんと欲せば、盡く鍼を停めて語らざる時に在り。」（鍼を一に針に作る。）

自序、「宗休、七十古來稀なり、㋖菱花雪を照す。兩三竿も也た足れり、㋗脩竹門を掩ふ。慙汗慙汗。」

總謝、上堂の次で、「恭しく惟れば、鶴立東西の序、蟬連左右の侍、滿堂一會の龍象、泰山は寸壤を辭せず、故に能く其の大を成す。河海は細流を擇ばず、故に能く其の深を成す。顧みるに、吾が法山、高うして峯の頂無きが如く、深うして海の底無きに似たり。誰か瞻仰せざらん乎、各乞ふ諒察せよ。」

㋘解夏上堂、祝香して、「大日本國云々。陛下恭しく願はくは、南明公、北明公、左輔右弼の職を掌る。㋙東王母、西王母、天長地久の籍を奉らん。」

垂語、「關山の月を踏して、㋚夷則の律と作す。」禪牀を擊つて云く、「聞く

㋕圓陀々に同じ、圓くして美麗なるをいふ。
㋖支那陝州城外に鐵牛の廟あり、牛頭は河南にあり、牛尾は河北に在り、禹が鑄て以て河患を鎭すとあるに出づ、不動着、又は情識を離るる意に用ふ。
㋗氷雪修飾を用ひずして、自ら白きを云ふ。
㋖菱花は古鏡の名、故に鏡の異名とす、楊達の明妃怨に、「匣中鏡有菱花の鏡あるも、羞づ單手に向つて舊顏を照すことを」と、白髮雪の如き髮を鏡にてらすをいふ。

麼、一二三四五六七。參。」僧、衆を出でゝ云く、「大雲九丘を庇ふ、臨濟の龍、頭角を呈露す。清風八極に生ず、慈明の虎、爪牙を活弄す。玆に㋛自恣の令辰に臨む、仰いで皇圖の萬歲を祝したまへ。」師云く、「三雨全く清む㋜六合の塵。」進んで云く、「蘋葉風涼しく、桂花露香し。」師云く、「吾れ爾に隱す無し。」僧云く、「記得す、鹿門の燈禪師、僧問ふ、『西天解夏、臘人を以て驗と爲す、未審し鹿門、何を以てか驗と爲す。』門云く、『雨來つて山色暗く、雲出でゝ洞中明かなり』と、恁麼の酬對、端的なりや也た無や。」師云く、「公驗分明。」進んで云く、「西天鹿門、吾が法山、優劣如何。」師云く、「露柱に問取せよ。」進んで云く、「燈籠合掌、露柱證明。」師云く、「門外の金剛、甚に因つてか汗出づ。」進んで云く、「㋝溽暑猶ほ甚だし、伏して惟れば珍重。」師云く、「名下に虛士無し。」

提綱、「正人、邪法を說けば、邪法正法と成る、邪人正法を說けば、正法邪法と成る。何が故ぞ、法に定法無し、緣に逢ふて卽ち宗、薰風一聯の詩、果木瓜㋞禪和子を賺殺す。碧岩百則の話、勤嘉苴老凍膿を惹著す。力囚希、嘖嘖嘖。風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ。恁麼の時節、同行の漆道人、

㋛脩竹は長き竹を云ふ。
㋜解制、夏解に同じ。
㋝只だ南明、北明に對して語をなすのみ、實在するにあらず。
㋚十二律の內の一。月令に、「孟秋の月、律八夷則に中る」と、また史記律書に、「夷則は陰氣の萬物を殺ふをいふなり」と、その十二支に於ける申となす。
㋛梵音鉢剌婆剌拏、隨意と譯す、自恣は義譯なり、寄歸傳に、「凡そ夏罷歲終の時、此の日を隨意と名くべし、卽ち是れ見、聞、疑の中に於て意に任せて舉發して、罪を說き愆を除くに隨するの義なり。」
㋜天地四方を云ふ。
㋝醋著に同じ。
㋞師家が學人に對して云ふ語なり。
㋟口を大にして云ふこと、又は

驀路に相逢ふ。能殺能活、能擒能縱、㊐口吧吧地にして道ふ、秋初夏末、各自に西東す。萬里無寸草、何の處にか朕蹤を留めん。」卓一下して、「巨靈手を擡ぐるに多子無し、分破す㊑華山の千萬重。」

自序、「宗休、無着の文殊に對するに同じと雖も、末法の比丘と稱す。㊒巖頭の㊂欽山を嘆ぶに異ならず、後生の長老と作る。汗顏。」

謝語、「聖澤和尚、禪源竭くること無し、聖澤餘り有り、老松壑に臥す、萬牛動せず五丁愁ふ。㊃少林秋に向とす、衆角多しと雖も一麟足れり。至祝至祝。」

大心和尚、眞正の正傳、大心の心印、禪の炮炙、禪の本草、換骨顧神。或底は微笑、或底は拈花、直指見性、㊄歆羨歆羨。

山門兩序、一會の海衆、諸位禪師、百億の㊅彌樓山を合して、一山と爲す。高きことは則ち高し矣、吾が山門に較ぶれば、則ち只だ是れ蟻垤のみ。百億の㊆香水海を合して、一海と爲す。深きことは則ち深し矣、吾が海衆に較ぶれば、則ち只だ是れ㊇蹄涔のみ。貴ぶべき哉。

拈提、「記得す、㊈虛堂老師、解夏上堂に云く、『十五日以前は休し、十五日以後は住す、正當十五日、休も也た休し得ず、住も也た住し得ず。』虛堂叟、人に逢ふて、且く三分の話を說く。休上座、佗のために全く一片心を拋たん。臺前花の咲みを含む有らずんば、是れ東山一夏休す可し。」便ち下座す。

冬至上堂、祝香して、「大日本國云云。陛下、恭しく願はくは、春秋の筆を起して、曾て㊉一角の麟を西周に出す。㊋封禪書を上つて、必ず㊌比目の魚を東海に致さん。」

垂語、叉手して、「一冬二冬叉手當胸、會す麼。㊍闍黎飯後の鐘。參。」

自序、「宗休、少叢林の漢、大羅蔔の禪、獅子座に登つて、野狐涎を流す。慙汗。」

謝語、「養源和尚、甘棠の故笏、苦海の慈航、願はくは法要を聽かん。度生に倦むこと莫れ。」

大心和尚、岐陽の雪に哦す、是れ十三生の㊎蘇軾にあらず乎。震旦の風を化す、謂つ可し第二位の㊏顏回なりと。之れを瞻、之れを仰ぐ。

山門東西班、滿堂三千指、適來の禪客、諸位禪師、人人百千の日月の釋

㊐喧しくいふこと。

㊑華山記に、「山頂、池あり、千葉蓮花を生ず、之れを服ずれば羽化す」と、又搔首集に、「李白華山の落雁峰に登り、曰く、此の山最も高し、呼吸の氣、想ふに帝座に通ぜん」とあり。

㊒巖頭全豁禪師、德山宣鑑に嗣法す。

㊂欽山文邃禪師、洞山良价禪師の法嗣、巖頭、雪峰と友たり、常に其の所解を驗すと。

㊃禪風の廢れるを云ふ、師自ら倒瀉を未前に挽回するの抱負を見はすなり。

㊄欣羨などに同じ。

㊅梵音、スメールといふ、須彌山のことなり。

㊆須彌山の外に七金山あり、此の外圍に大鐵圍あり、此の中間は大海をなす、これを香水海といふと、古說須彌山說に

㊇馬蹄の土に印したる跡に、水の溜りたるもの。

㊈四明象山の人なり、運庵嚴に參じて、大いに契語する所あり。

㊉孔子春秋を著して、哀公十四年春西の狩に麟を得たりと。麟は聖人、世に出づる時に出づる祥獸なり。

㊋司馬相如が封禪のことを論じて、時の帝に上りし書なり、封は壇を築きて祭るを封といひ、地を堀りて祭るを禪といふ。管子に、「封泰山、禪梁父者、七十二家」とあり、即ち天神地祇に祈り、幸福を增進するなり。

㊌西周に麟を出したるやうに、日本の國にも麟が出るであらうとなり。

㊍阿闍梨の略、阿舍利、阿祇利とも書く、軌範師、正行と譯

天を繞るが如し、箇箇萬丈の波瀾の大海に歸するに似たり。吁嗟、偉なる哉、於戲、盛んなる哉。

結座、杖を拈じて一劃して云く、「㋝劃前に易有り、熱するときは則ち熱し、寒するときは則ち寒す。㋞刪後に詩無し、山は是れ山、水は是れ水、四序循環、一氣資つて始む。玆れに繇つて、梅花先づ漏泄して、達磨の眼睛を換卻す。桃李終に言はず、臨濟の骨髓を敲き出す。格外の玄談、㋟當陽の直指、何ぞ用ひん、周曆を開いて元正を賀し、魯臺に登つて雲氣を書することを。若し衲僧家に約せば、甚の弊皮履にか當らん。正與麽の時、喚んで拄杖子と作さゞらんが便ち是か、喚んで拄杖子と作さゞらんが便ち是か、不是不是。」卓一下して、「吾が道は一以て之れを貫く。曾子曰く、唯と。」

歲旦上堂、祝香して、「大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺云云。　陛下、恭しく願はくは、虎拜稽首して、屠蘇白散、齡萬年を祝す。鶴立侍臣、禮菓樂花、德三代に邁えましまさんことを。」

垂語、「一枝の笛を把つて、萬年の歡を奏す、這裡還つて知音の者あり麽。陽春白雪和すること皆難し。」僧有り、出でゝ問うて云く、「太平象有り、三臺の鶴花間に舞ふ、容算窮無し、千歲の龜葉上に游ぶ。時其れ至れり矣、德惟れ大なる哉。賴に夏正に値ふ、願はくは周爓に沐せん。」師云く、「紅日扶桑を照す。」僧云く、「記得す、世尊花を擧す、迦葉一唉す、意花に在るか花に在らざるか。」師云く、「兩箇落草の漢。」進んで云く、「百萬一唉を買ふ、風流當家に屬す。」師云く、「誰か家か春ならざらん、祖師妙訣有り。」進んで云く、「昔正法眼を將つて、迦葉一人に付す、謂つべし靈山及第と。」師云く、「衆角多しと雖も、一麟足れり矣。」進んで云く、「今日㋡花園、一枝の烏鉢を開く、誰か是れ微笑の人。」師云く、「腳下を看よ。」進んで云く、「與麽ならば則ち靈山の一會、儼然として未だ散せず。」師云く、「證明を謝す。」進んで云く、「㋛如來禪は且く措く、如何が是れ祖師禪。」師云く、「親しきものは問はず、問ふものは親しからず。」進んで云く、「也た秋露の芙蕖に濡るに勝れり。」師云く、「雪も亦梅に一段の香を輸す。」進んで云く、「宗門の遷固、謹んで答話を謝す。」師云く、「㋣鶴九皐に鳴いて、其の聲天に聞ゆ。」

提綱、「妙と說き玄と談ず、太平の奸賊、拈鎚竪拂、亂世の英雄、臨濟の金剛王、天に倚り雪を照す。㋤德山の木上座、雨を罵り風を打す。禪河敎海を㋥掀翻し、虎穴魔宮を㋦踢倒す。爾りしより來、劍を說くものは、㋧迂莊の㋨圈纜に墮し、射を學ぶものは㋩后羿が彀中に遊ぶ。限り無き衲僧跳不出、猶ほ梅花有りて路未だ通ぜず。是の故に㋪熊峯面壁九年、胡僧眼

㋝蘇東坡居士なり、東林常總禪師に就いて心要を得、宋中世の文學者なり。

㋞孔子十哲の中、世實に亞聖と稱す、性行併せて孔子家語にあり。

㋟易は伏羲初めて卦畫を作るに初まる、然れども易なるの理は其の畫前に矢張り照として存在するなりと。

㋠孔子古詩三千餘篇を刪りて三百篇となす、今の詩經之れなり、刪後は孔子の刪りたる後のことなり。

㋡分明の義、左傳に「文公四年天子陽に當つて諸侯命を用ふ」とあり、之れによる。

㋢妙心寺をいふ。

㋣祖師禪に對して云ふ。圭峰宗密禪師の所判なる五種禪中の最上なるもの、最上乘禪、又は如來淸淨禪ともいふ。傳燈錄仰山の章に、「汝只だ如來禪を得て未だ祖師禪を得ず」と。即ち後世宗密禪師の如來禪は達磨所傳の禪を把持するものに非ずとなす、之れ祖師禪の語を生ずるに至れり。

㋤詩經小雅鶴鳴に見ゆ、九皐は

瞎す。㋓馬師威を振つて一喝し、㋔海兄耳聾す。桶底脱する時、事々無礙、機輪轉ずる處、法々圓融。水を水に投ずるが如く、空の空に合するに似たり。正與麼の時、南山北嶺、雲起り雨下る、千門萬戸、柳綠花紅なり。祖意明々歷々、佳氣鬱鬱㋕菪々たり。泥人宗旨を擧揚し、石女聖躬を仰贊す。畢竟何を以てか驗と爲さん。布衣の㋖稷契詩書の澤、治世の㋗巢由㋘畎畝の忠。」（忠を一に身に作る。）

自序、「宗休、尺寸の祿に奔つて、蟻の㋙膻に附くが如し、一少伎に誇つて、虎の乙を狹むに似たり。慙汗慙汗。」

總謝、上堂の次で、「恭しく惟れば、山門東西班、丈室左右の侍、單寮蒙堂、前資辨事、滿堂一會の海衆、適來問話の禪客、諸位禪師、東に㋚馬鳴あり、西に㋛龍猛あり、南に㋜提婆あり、北に童壽あり、號して四日となす。能く衆生の惑情を照す、邪見の山を摧き、正法の炬を然す。顧みるに、此の山吾が佛日の下、亦四日あり。曰く、龍泉、曰く、東海、曰く、靈雲、曰く、聖澤。嫌々然として天地を照し、昭昭乎として古今に輝く。嗚呼、盛なる哉。」

九澤などに同じ、深山幽谷などの意にて、賢者の隱るゝと雖も、人或これを知るにたとふ。

㋕菪々たふすなり。

㋖稷契詩書の澤、治世の巢由畎畝の忠。

㋗巢由畎畝の忠。

㋘畎畝の忠。

㋙膻に附くが如し、一少伎に誇つて、虎の乙を狹むに似たり。

㋚馬鳴。

㋛龍猛。

㋜提婆。

拈提、「記得す、古德曰く、『佛法年年舊に依り、胡餅日日新鮮』と。古德恁麼の示衆、無義味の話、口皮邊の禪を說く、風流愛すべし、公案未だ圓かならず。超佛越祖の談は且く置く、賀正の一句、如何が敷宣せん。昨夜春風吹いて門に入る、初機の桃李新年を賀す。衲僧の活計多子無し、間に松聲を聽いて被底に眠る。」

歲旦上堂、祝香して、「大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、太伯の孫倭國を領し、日、若英に昇る。小月、走、汴河に都す、家、㋝葵藿を種う。」

垂語、拂を竪てて云く、「正月の㋞木犀樹、亂世の優鉢花、若し㋟仙陀の客有らば、我が馬に秣ひ、我が車に膏させ。參。」僧有り、衆を出でて坐具を擧して云く、「驪龍五色の珠を托出して、靈光照徹す盡閻浮、請ふ師春風の力を借らず、向上の鉗鎚下し得んや無や。」師曰く、「老いて筋力を將つて能と爲さず。」進んで云く、「四塞狼烟斷え、九天鳳瑞新なり。」師曰く、「時なる哉、時なる哉。」僧云く、「記得す、僧趙州に問ふ、『如何なるか是れ祖師西來意。』州云く、『庭前の柏樹子。』是れ什麼の陳葛藤ぞ。」師曰く、「一回拈

㋓馬師威。

㋔海兄耳聾。

㋕菪々。

㋖稷契詩書。

㋗巢由。

㋘畎畝。

㋙膻。

㋚馬鳴。

㋛龍猛。

㋜提婆。

㋝葵藿を種う。

㋞木犀樹。

㋟仙陀。

穀を種け」とあり、農事を主る官なり、契は書經に「契汝、司徒と作れ」とあり。

㋠許由、巢父なり、許由は箕山の隱士なり、堯之れに天下を讓らんとせしに、許由聞きて、耳の汚なりとて潁川の水に耳を洗ひたりと、巢父は同じ頃の隱士なり、許由の耳を洗ひし水を汚れたりとて渡ることをもせざりしと云ふ。

㋡畎畝は農夫などの微賤なる位置にいふ。

㋢「なまぐさもの」なり。

㋣阿那菩提、如來嫡傳第十二祖なり、梵音「アシュヴゲホーサ」の轉化なり。第十一祖富那夜奢尊者に依つて心要を得、西印度の人、大乘起信論は實に尊者の造出なりと傳ふ、周の顯王四十二年甲午歲寂す。

㋤梵名那伽閼剌樹那、又龍勝と

出すれば一回新なり。」進んで云く、「此の山近ごろ柏樹を法堂前に移す、是れ乃祖の惡芽㊁孽にあらずや。」師曰く、「移して宮墻に入れば別に是れ春。」進んで云く、「趙州道ふ底は且く置く、靈雲の桃花、紅を著くるや也た未だしや。」師曰く、「柏樹子の成佛せんことを待ちて、汝に向つて道はん。」進んで云く、「猶ほ梅花のみ有りて路未だ通ぜず。」師曰く、「只だ雪の消するを待て。」僧云く、「參寥㊂覺範合して一人と爲る。」師曰く、「吾が侍者に慚づること莫れ。」

提綱、「天何をか言ふ乎、四時行はる、地何をか言ふ乎、百物生ず。鶯は南燕は北、柳は暗く花は明かなり。㊃玄玄玄、㊄林際の骨髓を分張し、咄咄咄、㊅楊岐の眼睛を換卻す。重きことは則ち㊆九鼎の重きより重く、輕きことは則ち一毫の輕きより輕し。也太奇、也太差。青山白雲開進自在、不可量、不可說、清風明月與奪縱橫。然も恁麼なりと雖も、賀正の那一句、如何が施呈し去らん。東夷降り西戎伏す、野老農夫太平を樂しむ。」

自序、「宗休、暗桃李の俗又來る、前度の劉郎、黃楊木の禪、好し去れ、閏位の王莽。」

㊀南天竺の人、姓は毘舍羅、長者の子にして、龍樹菩薩の上足、三論宗義を確立せり。
㊁蘖蘖。ひまはり草なり、花の日輪に傾き向ふより、借りて君主、又は長上の德を仰ぎ慕ふ心をいふに用ひらる。
㊂香の高き花を開く。
㊃智慧群拔の者にたとふ、即ち此の語は王索仙陀婆の略、一に水、二に鹽、三に器、四に馬の四義を含む、譯語定かならず。
㊄ひこばえなり。木の切り株より生ずる芽なり。
㊅覺範慧洪禪師、潙潭の寶峰克に侍して修行し、張無盡居士の歸依を受く。
㊆林際は臨濟に同じ。
㊇惡明楚圓の法嗣、楊岐方會禪師なり。

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門東西の班、丈室左右の侍、滿堂一會の龍象衆、適來問話の禪客。諸位禪師、叢林の禮樂一新、鳳、花を啣み、雞、曉を報ず。華藻の文章三昧、犀、月を翫び、象、雷に驚く。嗚呼盛なる哉、各〻道體、起居萬福。」

拈提、「記得す、松源師祖香山に住する日、歲旦上堂に曰く、『歲去る酋に去らず、歲來る實に來らず。山僧都べて會せず、露柱笑哈哈たり』と。山僧も亦偈を作つて擊節し去らん、春風露柱笑怡怡、咄。箇の㊈岳翁聲梅に似たり、木上座新長老と呼ぶ、山門八字に南に向つて開く。」

㊉除夜小參垂語、「臘月の扇子、除夜納涼、若し寒毛卓豎する底の漢有らば、此の一杯の杏薑湯を盡せ。參。」僧有り、衆を出でて云く、「春舊年に入る、德山小參答話せず、月衆水に印す、斷際の全機後蹤を繼ぐ。幸に法筵に臨む、願はくは家敎を聞かん。」師云く、「今日早く暮れぬ矣。」僧云く、「記得す、㊋息耕老師、歲夜小參、僧問ふ、『門前の爆竹消息を通ず、何ぞ必ずしも重ねて新に話頭を擧せん。』師云く、『腦を刺して膠盆に入る』と、端的なりや無や。」師云く、「冷灰豆爆。」進んで云く、「燈籠合掌すれば露柱點頭す。」師云く、「諾諾。」進んで云く、「法山今夜小參、息耕の圈纘に墮せず。天は梅邊に到つて別春有り麼。」師云く、「有り。」進んで云く、「來年更に㊌新條の在る有り、伏して惟れば珍重。」師云く、

㊈夏の禹王九州より金を貢ぜしめて、鑄造せし鼎にして、夏殷周三代相傳へて寶とす。
㊉松源崇岳禪師なり。
㊋臘月卅日の夜をいふ、舊たなくり新を迎ふるの夜をいふ。
㊌慶堂智愚禪師なり。
㊍新枝なり。

「謂ふこと莫れ、今年學ばずして來年有りと。」僧禮拜す。

提綱、「臘雪天に連る、露地の牛を烹て消得恁麼、春風戶に逼る、村田樂を唱へて園梨を熱殺す。園梨卽ち雲水、雲水卽ち園梨、北禪の家敎を學び、㋑百丈の叢規を董す。只だ是れ尋常の茶飯、衲僧底未だ奇と爲さず、舌雷霆を走らしむ。臨濟の金剛喝、神號び鬼哭す、氣、佛祖を呑む。松源の黑豆法、斗轉じ星移る、冷冰冰地に生涯を喪盡す。去年の貧は錐有つて地無し、今年の貧は地も無く錐も無し。法山今宵分歲、何を以てか大衆の與にし來らん。龍肝鳳髓、暫く別時を待て。」杖を卓する こと一下して、「嫌ふ莫れ冷淡にして滋味無きことを、一飽能く萬劫の飢を消す。」

自序、「宗休、㋒擊柝抱關、三更五更、自ら㋓黃巾の賊を禦ぐ。打齋持鉢、一箇半箇、誰か紫衣の僧を愛せん。舊に依つて可憐生、元來㋔沒巴鼻。慙愧慙愧。」

謝語、小參の次で、「共しく惟れば、山門の兩序、東顧、一夜雨滂澎、蒲萄の棚を打倒す。知事行者人力を普請して、拄ふる底は拄へ、欂ふる底は欂ふ。欂へ欂へ拄へ拄へて天明に到る。子細に看來れば、吾が山の都寺禪師、雪の商量を打して、日日㋕廬陵の米價を論ず。花の因果を了じて、夜夜石窓の㋖燈檠を分つ。」

㋑百丈禪師の遺、百丈清規ないふ。

㋒擊柝は木を鳴して夜を警しむる者、抱關は關所、或は門等を護る人をいふ。

㋓後漢の靈帝の時、鉅鹿に張角といふものあり、妖術を以て敎授し、太平道と號す、人民を四方に遣はして、人民を誑誘すること十余年、皆黃巾を着け、所在燔劫す、之れ故に之れを黃巾の賊といふ。

㋔巴鼻は牛の鼻、孔を穿貫せる把り繩、把へ所の意。故に把へ所なしと云ふ意なり。

㋕支那の縣名、歐陽修、文天祥等の生地なり。

㋖燈檠のせる棚、又は臺をいふ。

悅衆禪師、宗因喩を擧して、陳那の因明を論說す、序正流を分つて、華嚴の提唱を剖判す。（悅衆を一に悅宗に作る。）

西顧、鳳林堂中座元禪師、雲門の樂を洞庭に張る、丹霄鳳舞ふ、瑞應花を濁世に現ず、㋗緇林麝の如くに臻る。

後版禪師、小釋迦夢を說く、木枕を率陁宮中に推す。大禪佛出頭、藤杖を集雲峯下に靠く。

記室禪師、僧中の㋘謫仙、酒杯に翰林の月を酌む。林下の㋙懶衲、袈裟に煨芋の煙を裹む。

知藏禪師、佛日を揭示して、千年の象敎春を回す。儒風を振起して、四庫の目錄古を稽ふ。

更に惟れば、滿堂三千指、丈室左右の侍、問話の禪客、諸位禪師、一毛頭の獅子、百億毛頭に現ず。百億毛頭の獅子、一毛頭に現ず。若し褒贊を罄さば、恐らくは威光を減せん。各乞ふ昭亮せよ。

拈提、「記得す、古德歲夜小參、因に僧問ふ、『一切の生死、何を以てか舟航と爲さん。』德云く、『年盡きて錢を燒かず。』㋚那の僧の問端、氷を敲いて

火を求む、古德の答處、門、桃符を釘つて曾てせざるに似たり。若し人有りて、如上の問を休上座に致さば、他に祇對して道はん、燒葉爐中に宿火無し、讀書窓中殘燈有りと。」

元宵上堂、祝聖、「大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云。燈節令辰、虔んで寶香を蒸し云云。今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬歲、陛下恭しく願はくは、惟れ天聰明、惟れ聖時憲あり。惟れ臣欽若、惟れ民風從ふ。」

垂語、「少室の一燈、龜を證して鼈と作す、試みに天外に出頭して看よ。珊瑚枝枝月を檸着す、有り麼。」

提綱、「十五日以前、金烏急に玉兎速かなり、十五日以後、泥牛吼え木馬嘶く。禪閑年に厄す、宣州の杲風子。㊃黃楊木に參得す、機閃電を運す。㊄首山の念法華、喚んで粗竹篦と作す。胡打亂打、㊅全提半提、張三鮑三で酒を喫すれば、李四醉つて泥の如し。口吧々地、東を問へば西を答ふ。」杖を拈じて、「來也來也、杖たり兮杖たり兮、向上宗乘の事、未だ夢にだも見ざること在り。㊆遠法師甚に因つてか虎溪を過ぎざる。呵呵呵。天は

㊃黃楊木はつげの木なり、其の性長じ難し、年毎に長さ一寸を增す、園にあへば即ち退くと、悟所に坐着して撥轉の手脚なきにたとふ。

㊄首山省念禪師、風穴延沼の法嗣。竹篦を拈じて衆に示すの語に曰く、「汝等若し喚んで竹篦と作さば即ち觸る、喚んで竹篦となさずれば、即ち背く、諸人宜しく喚んで甚麼とかなさん」と。

㊅今提は公案の全部を提示するに半鹽の火を撥いて燠芋を尋ねて食す、寒湯頭に垂る、未だ嘗て答へず、使者笑つて曰く、「且く尋者にすゝむ、湯を拭へ」、壞曰く、「我れ豈に工夫して俗人の爲に湯を拭ふことあらんや」といひて、竟に起たず、使者歸つて奏す、德宗甚だ之れを欽奇すと。

㊇那は彼などに同じ。

白雲と共に曉く、五更の鷄を待つこと莫れ。」

自序、「宗休、㊈脩吭矮身、㊉方朔を滑稽傳に載す。㊋巧脣薄舌、㊌子雲を太玄經に嘲る。慙愧慙愧。」

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門東西班、丈室左右の侍、耆宿、單寮蒙堂、前資辨事、一會の海衆、諸位禪師、㊍多寶塔中の二如來、迹を開き本を顯す。楞嚴會上の四菩薩、尊を屈して卑に就く。感戴に堪へず、各〻乞ふ允容せよ。」

拈提、「記得す、臨濟松を栽うる次で、黃檗問うて曰く、『深山裡に松を栽うること許多して甚麼かせん。』濟曰く、『一には山門の爲に境致と作し、二には後人の爲に標榜と作さん』と。黃檗の問端、花を移しては蝶の到るを兼ぬ、臨濟の

㊈晉の惠遠法師、廬阜にありて世間に出づることなし、平生客を送りても虎溪を過ぐることなし、若し虎溪を過ぐることあれば虎悲鳴せりといふ、時に陶淵明、陸靜修の二人、皆有道の士なり、或時惠遠を問ふ、その歸る時、法師之れを送りしに、三人の談論甚だ愉快なりしかば、覺えず虎溪を過ぎ、暫くして之れをさとり、相見て大いに笑ひしといふ、故に後人、虎溪三笑の圖を作る。

㊉長頸小身の意なり。

㊋方朔は東方朔なり、事文類集に曰く、「伏日に詔して從官に肉を賜ふ、太官日晏くして來らず、東方朔獨り劍を拔きて肉を割く、同官に謂ひて曰く、伏日は當に蚤く歸るべし、請ふ、賜を受けんと。即ち肉を懷にして去る、太官之れを奏す、朔入る、上之れを問ふ。朔、冠を免じ、謝して曰く、朝來りて賜を受くるに、詔を待たざるは何ぞ無禮なるや、劍を拔き肉を割くは、一に何ぞ壯なるや、之れを割く、多からざるは何ぞ廉なるや、歸りて細君に送る、何ぞ仁なるやと。上笑ひて曰く、先生をして自ら責めしめ、乃ち反りて自ら譽めしむと。又酒と肉とを給ふ」と。

㊌子雲は楊雄の字、嘗て太玄經を作る、人の嘲るを聞き、之れが嘲解を作る。

㊍多寶如來の舍利塔なり。釋迦如來、靈鷲山に於て法華經を說き給ふ時、その半にして塔地下より出づ、空中に住る、塔中聲あり、釋尊の說法を證

答處、㋐石を買ふては雲を得ること饒し。人有り若し如上の問を致さば、只だ他に對して道はん、能く萬象の主と爲つて、四時を逐ふて凋まずと。」

結夏上堂、祝香して、「大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、飛龍天に在り、肅宗帝、位に靈武に卽く。㋑客星座を犯す、嚴先生詔に炎劉に應ず。一絲九鼎、萬春千秋。」

垂語、「禁網を劈破して、三期を守らず、敎外の旨を聞かんと要す麼。杜鵑啼いて落花の枝に在り、有り麼。」僧有り、衆を出でて云く、「兩箇の黃鸝、垂柳に啼く、㋒臨濟の賓主歷然たり。一雙の胡蝶葵花に上る、達磨の兄弟來る也。祖帥禪は且く之れを置く、願はくは祝聖の一句を聽かん。」師云く、「王寶殿に上れば、野老謳歌す。」進んで云く、「寒巖四月始めて春を知る。」師云く、「律呂調陽。」僧云く、「趙州古佛、僧に示して曰く、『鉢盂を洗ひ去れ。』其の僧使ち悟る、此の意如何。」師云く、「水を掬すれば月手に在り、花を弄すれば香衣に滿つ。」進んで云く、「學人未だ悟らず、請ふ師慈悲。」師云く、「三十棒。」進んで云く、「㋓荊山に到らずんば、爭か璞を得て歸らん。」師云く、「侍者禪に參得し了れり。」

㋐五岳の雲、石に連りて起る時は、石は雲の根也と、賈島の詩に、「橋を過ぎて野色を分ち、石を移して雲根を動かす」と。

㋑虞士般光、字は子陵、漢の光武の故人なり、齊國にあり、羊裘を着て澤中に釣る、徵し至る、亦屈せず、帝、光と同じく臥す、光足を以て帝の腹に加ふ、明日太史奏す、客星御座を犯すこと甚だ急なりと。帝曰く、朕故人嚴子陵と同じく臥するのみと。

㋒臨濟爲人の施設、四料簡と共に接化の方便として用ひらる、賓中の賓、賓中の主、主中の賓、主中の主これなり。

㋓楚人卞和、玉璞を荊山に得、奉じて之れを厲王に獻ず、厲王玉人に之れを相ぜしむ、玉人曰く、石なりと、故に王、

提綱、「十五日以前、翠巖の眉毛、一莖兩莖落つ。十五日以後、黃葉の拄杖、七尺八尺餘る。護生は須らく是れ殺すべし、殺し盡して始めて安居。是の故に能仁、九句を剋期す、蜂房を獅子窟と作す。濡首、三處に度夏す、龍光、斗牛の墟を射る。龍蛇凡聖、泥玉車書、崑崙の核子、機に隨つて呑吐し、虛空の布衫、手に信せて卷舒す。」杖を拈じて、「黑面翁側に在り、出で來つて軒渠して云く、『西天の勝人冰、株を守つて兎を待つ。東土の鐵彈子、木に緣つて魚を求む。』嘗に佛性を瞞頂するのみならず、況んや復た眞如を㋔儱侗するをや。然も恁麼なりと雖も、這裡何を以てか親疎を分たん。」卓一下して、「陶潛㋕東林の社に入るに懶し、在在の青山庵を結ぶ可し。」

自序、「宗休、這の雜道人、贋長老と稱す。㋖北岳の移文に愧づること有り、恐らくは東坡が詩案に坐せられん。汗顏泚顙。」

謝語、上堂の次で、「共しく惟れば、養源東堂大和尙、古道の顏色、宗門の爪牙、克家の的流、禪源を末派に分つ。無邊の眞照、佛日を中天に揭ぐ。㋗泰瞻斗仰に任へず、誰か㋘涇濁渭清を辨せん。」

和の左足を刖る、武王位に卽く、又之れを獻ず、同じく又右足を刖らる、和乃ち荊山の下に璞を抱いて哭すること三日、淚盡き、之れに繼ぐに血を以てす、王之れを聞き、其の故を問はしむ、實を以て告ぐ、王乃ち玉人に璞を理めしめしに、果して玉を得たり、彼の連城の玉之れなり。

㋔未だ器を成さざる形。

㋕東林の社は明神宗の頃、顧憲成なるもの、淸流の徒を集めて一大民黨を作り、黨勢大いに盛なりしが、宦者事を爲すに至り、遂に亂れて明滅ぶ。

㋖南北朝の時、齊の周顒、字は彥倫、鍾山に隱れ、後詔に應じて出でて海鹽縣の令と爲り、却りて此の山を過ぎんとす。會稽山陰の人、孔稚珪、鍾山の草堂を過ぎ、之れを感みて北山の移文を作る、顒を

次に惟れば、大心東堂大和尚、氣、諸方を呑み、腳、實地を踏む。千萬世の林際、後人標有り。七八生の雲門、知識種無し。吾れ間然すること莫し。自愛珍重。

又惟れば、山門の兩序、滿堂の四衆、諸位禪師、兩序鵠立雁行、四衆象旋獅擲、甚だ希有、甚だ希有。摩利山に登れば、片片皆栴檀。也太奇、也太奇。金剛窟に入れば、寸寸是れ藥草、集めて而して大成す。豈に小補と曰はん、各乞ふ道照せよ。

拈提、「記得す、偃溪の聞禪師、結夏上堂に曰く、『十字街頭、大圓覺海、色を逐ひ聲に隨ふ。家風落賴、甚の西天の樣子をか討ねん。東倒西擺に一任す』と。偃溪の提唱、古今に絶唱す、言端語端、尋常未だ臭氣を免れず。頭正しく尾正し。只だ是れ知音に逢はす、我が窓前の月に和して、君が石上の琴を彈ず。」拂一拂して、「唵齒臨唵部臨。」下座す。

冬節上堂、祝聖して、「大日本國山城州平安城正法山妙心禪寺云云。陛下恭しく願はくは、道有つて㋓四夷守り、征無くして萬邦安からんことを。」

垂語、「冬日線を添ふ、一釣竿と作す、有り麼。向上の事を知らんと要せば、子陵灘を話すること莫れ。」僧有り、衆を出でて云く、「眞照無邊、漢女宮中一線日長し。太平象有り、魯侯臺上五色雲興る。宗風を振起し、叡算を祝延したまへ。」師云く、「早朝不審、晩後珍重。」進んで云く、「枯木花を開き、虛空迸裂す。」師云く、「果然。」僧云く、「記得す、松源冬至上堂に曰く、『㋐暑運推し移り、日南長至』と、是れ恁麼の祥瑞ぞ。」師云く、「日日是れ好日。」進んで云く、「陰陽に涉らざる底の一句、得て聽く可し麼。」師、拂を以て禪牀を擊つて、「聞く麼。」進んで云く、「和尚道ふ底と松源道ふ底と、還つて親疎有り麼。」師云く、「親しき者は問はず、問ふものは親しからず。」進んで云く、「南山に鼓を打てば北山に舞ふ。」師云く、「迦葉門前風凜凜たり。」進んで云く、「諸佛の知慧、解し難く入り難し。謹んで答話を謝す。」師云く、「少年の僧に㋒孤負す。」

提綱、「㋑元亨利貞、一氣に始まり、常樂我淨、一心に本づく。一心卽一氣、一氣卽一心。是の故に暖律輕輕として灰を飛すときは、則ち雲物淘湧す。凍雨霏霏として雪と作るときは、則ち山嶽平沈す。小人道消して玄造を斡回す、君子道長じて群陰を剝盡す。淨躶躶露堂堂、東西自在を得たり。明歷歷白的的、㋔南北商參を分つ。石女空中に手を拍し、木人石上に琴を彈ず。㋕雲韶夷韎を掩ふが如き、只だ是れ知音に逢はす。韎角の挂杖子、聞き得て忍俊不禁、長河を攪して酥酪と成し、大地を變じて黃金と作す。

㋓泰山を看、北斗星を仰ぐ意にして、唯だ瞻仰などに同じ。

㋔淫水は濁り、渭水は清む、合流三百里、清濁湛ぜず、借りて以て物事の區別明かに定まるに喩ふ。蘇軾の句に、「胸中淫渭分る」とあり。

㋕左傳昭公二十三年に、「古は天子守り四夷に在り、德遠くに及び、四夷代つて之れが守りを爲す所以なり。」

㋐日影の推し移ること。

㋑そむくことなり。

㋑易に「乾は元亨利貞」とある、傳に、「元亨利貞は之れを四德といふ、元は萬物の始め、亨は萬物の長、利は萬物の遂、貞は萬物の成なり、惟だ乾坤にこの四德あり、之れを春夏秋冬に配す。」

㋔商及び參に各二十八宿の一星なり、其の分位南北にあり。

㋕雲韶は虞舜の樂、夷韎は四夷の樂なり。

㋐慈明の臭老婆を罵つて、傍提横案。臨濟の㋑白拈賊に逼つて、活捉生擒。㋒㋓耐なり豪壯座主、劍を說いて周宋の㋔鐔に誇る。然も此の如くなりと雖も、一陽未だ萌さざる底の時節、諸人何の處に向つてか參尋せん。」

卓一下して、「暗に玉線を穿ち、密に金針を度す。」

自序、「宗休、全俗全眞、青油幕下に坐して、謝宣の面を作す。至愚至陋、明鏡臺前に臨んで、演若が頭に迷ふ。憐察せよ。」

總謝、上堂の次で、「共しく惟れば、山門兩序、雲堂の萬衲、問話の禪客、諸位禪師、百萬の衆を舍衞に領じて、步步獅擲象旋。七十子を㋕孔門に列ねて、箇々龍蟠鳳逸。蓋し大厦を支ふる者は一木に非ず、況んや六瑞を感じて而して四花を散ずるをや。嗚乎、盛なる哉。」

拈提、「記得す、古德冬節上堂に曰く、『物有り天地に先つ、之れを仰げば彌〻高し。形無うして本寂寥、之れを鑽れば彌〻堅し。能く萬象の主と成りて、之れを瞻るに、前に在るかとすれば、四時を逐ふて凋まず、忽焉として後に在り』と。古德の拈語、佛に入る可し、魔に入るべからず。山僧也た一一他に代り去らん。物有り天地に先つ、紫金光聚、河沙を照す。形

㋐慈明楚圓禪師なり。
㋑白拈に盜賊を働くものをいふ。聯燈錄に、「雪峰曰く、臨濟大いに白拈賊に似たり、雪竇曰く、夫れ善く竊むものは鬼神も不知」と。
㋒㋓耐は心に煩悶すること、忍ぶべからざること。
㋔鐔は劍の「つば、」又は小劍をいふ。
㋕孔子の門下傑出せるもの七十、其の中又十哲を拔く。
㋖釋尊在世の時の居士なり、維摩詰、維摩羅詰、淨名、又は無垢と稱す、毘舍利城の長者なり。
㋗支那山西省代州五臺縣、今の西安府の東北一千六百華里の地にある五臺山をいふ、一に清涼山ともいふ。華嚴經菩薩住所品の、「東北方菩薩住所あり、清涼山と名づく、過去菩薩あり、常に中に住す、彼に

無うして本寂寥、天上人間意氣多し。能く萬象の主と成りて、曾て文殊に敕して徒衆を領じて、四時を逐ふて凋まず、毘耶城裡に㋘維摩を問はしむ。」

歲旦衆に示して云く、「古に道く、『元正啓祚、萬物咸新なり』と、元正啓祚の時、諸人如何が一轉語を下さん。山僧一偈有り、大衆に供養し去らん。千仞書を銜んで玉鳳翔る、元正啓祚吾が皇を祝す。春風吹き起す關山の笛、鼓を打つて梅花上堂と叫ぶ。」

歲旦上堂、「珍重す同行の木上座、今朝例に隨つて商量を打す。新年の佛法多子無し、三尺の龜毛箇の長きを添ふ。」

曉典座夏齋を謝する上堂、「吾が肥典座、鍋兒と叫ぶ、㋙五臺の雲を蒸して飯と作す時、大地都盧無底の鉢、㋚黃梅七百の僧を盛り來る。」

現に菩薩あり、文殊師利と名づく、一萬菩薩ありて常に說法す」と。無著文喜、五臺山にありて典座となる、文殊彌鍋上に現ず、無著遂に之れを打して、「直饒ひ釋迦老子來るも、我れ又打せん」といへる話柄、禪林に膾炙す。
㋘逢磨鏞傳第五祖大滿弘忍禪師、支那蘄州黃梅の人なり、會衆常に七百、六祖慧能之れに法を嗣ぐ。

㊀駿州大龍山臨濟禪寺語錄

侍者某編

山門、指して云く、「㊁長沙の七歩を超え、臨濟の三關を透る。更に那一關の在る有り、富士の雪、鐵壁銀山。」喝一喝す。

佛殿、「殿裡底何物ぞ、飛花晩風に舞ふ。看よ看よ、天は開く二十五の圓通。」禮拜す。

土地、「張大帝鬼神の爺、四百年漢家を護す。詩を以て汝に贈る、㊅思邪無し、思邪無し。」

祖師、「三蘆東に渡る、餘波未だ收まらず、今日捉敗了也、袁達李磨賊頭。」

㊂據室、「維摩の室、月を以て明と爲す、山僧が室、雪を以て明と爲す。別別」と。打つて云く、「三尺の竹篦子、毘耶城を打破す。」

㊃府帖、帖を拈じて云く、「塞外は將軍の令、舊邦其の命新なり。補衮調羮の手、正法輪を撥轉す。」

㊄山門疏、「㊆蘇々として文章波瀾濶し、陸海を呑み潘江を吸ふ。花簇々錦簇々、異代同名の夢窻。」

拈衣、「㊇黄梅夜半盧公に傳ふ、一絲九鼎、金輪峯下華姪に付す。大法千鈞。」搭起して云く、「無縫の鐵崑崙、兩肩擔ひ起さず。」

登座、「奮迅三昧より起つて、活獅子、馬と作して騎る。燈王佛燈王佛、我れに一座の須彌を還せ。」

祝聖、「大日本國駿州路大龍山臨濟禪寺、新住持傳法沙門宗休、謹んで寶香を焚いて、端に爲に、今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬歲を祝延したてまつる。陛下恭しく願はくは、國家萬國より安く、㊈玉燭四時を調ふ、多君苞桑の計、百世其れ本支。」（萬國を一に萬石に作る。）

檀那、「這の香、寶爐に爇向して源府君の爲に祿算を資倍し奉る。扶桑の弓を櫜にして、則ち東のかた齊の四履を盡す。青萍の劍を匣にして、則ち西のかた魏の三河を連ぬ。石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」

嗣法、「這の香、寶爐に爇向して、虛堂十世、前住大德後住妙心特芳老漢

㊀靜岡縣安倍郡安東村にあり、享祿四年駿河の太守今川氏輝の開基にして義元の建立に係る、開山は圓滿本光國師、舜創開山を寶珠護國といふ、後奈良天皇の勅願所にして、伽藍の修繕等、皆勅命により國司の行ひし處、舊寺格は中本寺、境致幽邃、伽藍宏莊、大書院の一室は德川家康、嘗て今川氏に人質たりし時、居住せし處なりと。

㊁長沙景岑禪師、南泉普願の法嗣、僧をして會和尚に問はしめて曰く、未だ南泉に見えざる時如何、會、良久す、僧曰く、見えて後如何、會曰く、別にあるべからず、僧還つて沙に擧似す、沙曰く、百丈竿頭に坐する底の人、然かも得入すと雖も、未だ眞となさず、百尺竿頭須らく步を進むべし云々」と。

㊂論語に曰く、「子曰く、詩三百、一言以て之れを蔽へば、曰く、思邪無し」と、詩は詩經三百十一篇の詩をいふ。

㊃住持人のよるべき室、方丈室中の義なり。

㊄公文、卽ち知府より降す文なり、校定清規に新住持入院の註に云く、「先づ敕黄を讀み、省劄、或は府帖、山門の疏、諸山の疏、次第に宣讀すべし」とあり。

㊅住持を請ずる山門の疏は、勸請を叙し、諸山の疏は駕を促すを叙し、江湖の疏と、道舊の疏は賀を展ぶるを叙すと。

法乳の恩に酬い奉る。」

垂語、「聖諦第一義、早く是れ便宜に落つ、諸佛出身の處を知らんと要す麼。薫風南より來る。參。」僧有り、衆を出でて云く、「綿蕝茅を束ぬ、百丈の規矩曾て紫詔を拜す。布金草を揷む、三代の禮樂、今緇衣に在り。賴に佛法東漸の時に値ふ。願はくは ㋓ 祖宗南頓の旨を示したまへ。」師云く、「三門舊に依つて南に向つて開く。」進んで云く、「允なる哉、㋺ 河、圖を出し、洛、書を出す。」師云く、「劃前に易有り、刪後に詩無し。」僧云く、「記得す、虛堂老祖、九九の數に丁りて徑山に再住す、敕有つて雪を祈る、謂つ可し奇外の奇なりと。」師云く、「寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺す。」進んで云く、「寒巖四月始めて春を知る。」師云く、「鳥鵲啼く處百花香し。」進んで云く、「老和尚、九九の數に應じて、敕許を賜つて初めて吾が山に住す、況んや雪の頌有るをや。僉曰ふ、老虛堂再び出世すと。」(出世を一に出現に作る。)師云く、「家醜を外に向つて揚ぐる莫れ。」進んで云く、「溪山異なりと雖も、雲月是れ同じ。」師云く、「別別、風に和して搭在す玉欄干。」進んで云く、「金春玉應、謹んで答話を謝す」といつて便ち禮拜す。師云く、「此れ

㋑ 森々は水の滿ちて廣き貌。
㋒ 大滿禪師、六祖慧能禪師に衣鉢を傳ふるを云ふ。
㋩ 四時調和するを玉燭といふのみ。
㋓ 弘忍禪師の禪、北神、南能の二派に分る、南能は頓禪なり、これ達磨の直傳なり。
㋺ 河圖洛書共に、周易と書經洪範九疇との根源をなす圖書にして、數理の祖なり、易の繫辭に、「河、圖を出し、洛、書を出す、聖人之れに則る、天一地二天三地四天五地六云々」と。孔安國の註に、「河圖は伏羲氏の天下に王たる、龍馬河より出づ、則ち其の文に則り、以て八卦を畫す、洛書は禹、水を治むる時、神龜文を負ひて背に列す、數あり、九に至る、禹遂に因りて之れを序し以て九類を成す」と。
㋻ 玉のかけたる如き帶環、君子

は是れ選佛場や、心空及第して歸る。」

提綱、「乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、龍山に秘在す。府主の請に因つて而して開堂し、住山の鈿斧を提ぐ、天子の詔を拜して而して入寺し、下瀨の ㋻ 玦環を鳴す。吾が祖昔徑山(一に雙徑を作る。)に住す、此の郎今百蠻を領ず。東海の兒孫、八十一の黃塵鳥帽、西湖の長老、五十三の白髮蒼顏、圓覺場中の列聖、象旋獅擲、通明殿上の侍臣、鶴立鵷班、黑漆の拄杖子魔佛を打し、寶劍の金剛王癡頑を斬る。」杖を拈じて、「正與麼の時、彌勒の下生を待たず、夜摩の瑠璃、兜率の瑪瑙、香嚴の本寂を印せず。㋼ 錢塘の鸚鵡、吳岫の鷓班。明月の珠光燦爛、流水の經響 ㋷ 潺湲。萬年の松、萬年の枝を抽く、以て規し以て祝す。炎天の梅、炎天の蘂を吐く、望み難し攀ぢ難し。潛珍、無盡藏を開き、良策、太平の寰を定む。」卓一下して云く、「㋽ 疎簾雪を見て捲き、深戶花に映じて闕す。」

自序、「宗休、九夷に居らんと欲す、魯叟匏瓜食はれず、將に ㋸ 三徑に歸らんとす。晉人松菊猶ほ存す。玆に英檀の命に逼られて、拒辭すれども允さず、强ひて猊座に陞つて ㋾ 野干鳴を作す。慚汗慚汗。」

白槌の謝、開堂の次で、「共しく惟れば、龍泰堂頭大和尚、瑞龍、大智雲を興す、池中の物に非ず。睡虎 ㋿

㋻ 浙江省杭州府にあり。
㋷ 水の靜かに流るる貌。
㋼ 白居易の詩に、「香爐峰の雪簾をかゝげて看る」と。
㋸ 歸去來辭に、「三徑荒に就き、松菊猶ほ存す。」陸通者または挂冠せし人の門庭を三徑といふ、又は自己の蝸牛をもいふ。
㋾ 獅子吼に對し、修道未熟なる人の胡道亂說を貶下して言ふ語なり。
㋿ 五千餘卷の經文をいふ。

多羅藏を典る、教外の宗を立す。衆の歸する所、也た誰か仰がざらん乎。玆に尊を降りて卑に就き、槌を鳴して法を證することを辱うす。激切屏營の至りに堪ふる無し。下座して必ず十笏室に趨つて、一炊巾を展べん。」

總謝、「又惟れば、四來の耆宿、一會の名緇、諸位禪師、獅子、狻を產す、無量の釋迦を㋲賢劫に出す。雞卵、鳳を生ず、河沙の妙德を心源に接す。菅に四天下の獨尊を仰ぐのみならず、況んや復た㋳十地上の大士と稱するをや。各各道體、起居萬福。」

拈提、「記得す、僧、松源に問うて曰く、『只だ大師郡王、一毫端に於て彈指を勞せず、是の如きの淸淨の寶刹を成就するが如きんば、昔の賢干と是れ同か是れ別か。』師云く、『動容に古路を揚ぐ、悄然の機に墮せず。』此の僧の問端、水を掬すれば、月手に在り、松源の答處、花を弄ずれば、香衣に滿つ。休上座亦職翁に代つて、聊か微を表し去らん。㋴乳峯碧を聳し、錦鏡輝を流す。」

㋲多數の賢人、世に出現する時期といふこと。
㋳菩薩より佛に至る迄、修行上の階級、即ち十住、十行、十回向を經て至る位にして、此の位を超えて等覺、妙覺と進むなり。
㋴雪竇山の別名、山中に錦鏡池あり、流れて深谷に下る、雙瀑並び落ち、恰も雙乳の流下するが如し、故に名くと。

尾州青龍山瑞泉禪寺語錄

侍者某編

山門、指して云く、「瑞泉の一滴、松源を激揚す。」左右を顧視して云く、「青龍を駕與する者、來つて箇の門に入れ。」喝一喝す。

據室、「扣玄室中、佛魔交接。」案を打つて云く、「草を打つて蛇を驚かし、花を移して蝶を兼ぬ。」

拈衣、「曹溪の㋑直綴に依俙として、靈山の金襴に彷彿たり。別別。」搭起して云く、「一把の柳枝收不得、風に和して搭在す玉欄干。」

祝聖、「大日本國尾州路丹羽縣青龍山瑞泉禪寺新持住傳法沙門宗休、謹んで寶香を焚いて、端に爲に今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬歲を祝延したてまつる。陛下恭しく願はくは、仁德春を回す、三王を四にし、㋺五伯を六にす。喜氣雪を消す、㋩白虎を右にし、青龍を左にす。彌樓山を仰いで壽山と爲し、㋥香水海を湛へて福海と作す。」

㋑直ちに嗣ぐの意なり。
㋺伯は諸侯の盟主の意にして、もと侯伯の伯と混ずるおそれあるより、霸の字を須ふ、齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、宋の襄公、楚の莊王を五伯といふ。
㋩四を白虎、東を青龍といふ、天の四方の星象によりて名く。
㋥須彌山の周圍をめぐる海なり。
㋭杜鵑なり。
㋬列子に、「渤海の東に五山あり、一を岱輿、二を員嶠、三

開山、香を拈じて、「梅花雪一枝を攀折して、住山薄福恩を報じ來る。端を方壺、四を瀛州、五を蓬萊といふ。」無く穿卻す崑崙の鼻、四海の香風是れより吹く。」退院、「自ら乃翁に代つて住山と稱す、三年の光景鬢斑斑たり。一聲の㋙杜宇袈裟角、㋚蓬萊の左股を割取して還る。」

㋑偈頌

佛涅槃　八首

鳥啼き花落つ涅槃臺、竺土の山河灰よりも冷じ、須彌千百億を割取して、瓣香喚び醒す臥如來。

西方に美有り花に背いて歸る、生死涅槃皆昨非、㋺無色界中多少の淚、洒いで細雨と爲つて春衣を濕す。

是れ正法耶邪法耶、㋩多羅八萬塵沙を撒す、番番の諸佛世に出づ、先づ梅花に始つて㋥楝花に終ふ。

㋭紫金光聚河沙を照す、識らず生耶是れ滅耶、東風に向つて斯の意を問はんと欲す、鶯に和して吹き折る一枝の花。

業風吹き起す二千年、大地山河佛骨羶し、今日一鎚に鎚碎し了る、鳥啼き花落ちて㋬又蒼天。

西に美人有り無賴の㋣査、袈裟一別天涯を隔つ、愁腸斷盡す崑崙の鐵、

㋑偈は梵音伽陀、頌は支那に於ける詩の六義の一、伽陀の譯語なり、偈頌は梵漢兼擧の名稱とす。

㋺三界の一、最上位にある天界、無所有所、非想非々想處是れなり、此の界はすべて形無く、たゞ識のみありて住す、故に無色界といふ、色界の衆生が色身の繫縛より離れて、進み入る境界なり。

㋩多羅は經卷のこと。

㋥あふち、高さ丈余、葉は槐に似て尖り、三四月頃花を開き、紅紫色なり。

㋭紫磨金ともいふ、紫の光澤ある黃金のことなり。轉じて又釋尊の御肉身をいふこともあ

猶ほ是れ春閨夢裡の花。

玄と說き妙と說く作麼生、一字の全く筆耕を借る無し、此の老元來太平の賊、果然として陷卻す鐵圍城。

大小の瞿曇度生と叫ぶ、看來れば食を奪ひ又耕を驅る、簾前の細雨花に濺ぐ涙、五百㋣由旬一化城。

佛生日　十首

他は是れ西方の一美人、銀盤浴し出して曉粧新なり、袈裟錯つて毒花に觸れられて、腸は斷ゆ㋥毘藍園裡の春。

東海の鯉魚㋭薄伽尊、㋬韶陽の棒下雨盆を傾く、塵勞八萬洗へども何ぞ盡きん、滿架の薔薇露一痕。

竺土の山河袈裟の中、不祥の兒梵宮王に坐す、滿身の泥水狗も何ぞ喫せん、一棒は他の跛腳翁に還す。

咄哉㋮丫角の黑崑崙、華堂を坐斷して獨尊と稱す、猶ほ寃讎を結ぶ二千歲、花を打つの風雨老雲門。

韶陽の棒下平なること能はず、㋯藥嶠の杓頭化生を弄ず、別に吾が家の

㋣産は樣、「いやだ」なり。
㋤輸繕那、輸闍那、踰延那、由延ともいふ、門量、又は合壓と譯す、印度に於ける距離を計算する名稱なり、一日の行程に名くるものにして、三十里或は四十里にして、六丁を一里としたるものなり、異說多し。
㋥藍毘尼園のこと、降誕會に用ふる花御堂、花亭のことなり。
㋭薄伽婆、世尊と釋す、佛の敬稱なり。
㋬雲門禪師をいふ。
㋮髮のむすび方の名、あげまき、小兒の結ふ髮なり。
㋯藥山惟儼禪師なり。
㋰臘月八日、釋尊が明星を見て佛道を證得したまひし聖日なるなり。

蠱毒水を潑いで、全身陷卻す鐵圍城。

未だ母胎を出でざるに三十棒、西天東土禍殃生す、薔薇誤つて微風に觸れられて、露は碎く水晶簾外の聲。

元是れ如來の淨法身、周行七步泥塵を曳く、藥山の杓柄長きこと多少ぞ、葉底の殘紅雨春を洗ふ。

露柱懷胎也太奇、果然として這の不祥兒を生ず、餘殃未だ了せず二千歲、洗出す薔薇の雨一枝。

韶老の棒頭天下の疼、等閑に敲き出す紫金容、若し耻を雪ぐ薔薇の雨無くんば、也た是れ闍梨飯後の鐘。

西天の老沙門、寃を報ずるに卻つて恩を以てす、花を獻じて春手に在り、水を洒いで月に痕無し。

佛成道　八首

昨夜南に向つて㋱北辰を見る、眼中八萬四千の塵、瞿曇老也た虛堂老、古今羞を識る一人も無し。

棒頭に眼有り火星飛ぶ、活瞿曇に逼つて鐵圍に陷らしむ、坐して㋳驢年に到るも道を成ぜず、滿山の風雨急に歸り來れ。

六年嶺北雪の生涯、錯つて星兒を認む老釋迦、成道任他あれ空劫の外、工夫猶ほ未だ梅花に到らず。

我れに瞿曇の活眼睛を還せ、六年間坐鈍遲の生、依然として未だ舊窠窟を出でず、西に㋲長庚有り。

㋳十二支に驢なし、故にいつ迄たつてもの意に用ふ。
㋲よひの明星をいふ、詩經に、「東に啓明あり、西に長庚あり」と。

り東に啓明。

苦なる哉天竺の古先生、雪北六年功成らず、錯つて無量の秤子上に墮す、三千の佛國一亳輕し。

雪嶺聞く時九鼎重し、明星を見て後一亳輕し、今朝縱ひ是れ成道と叫ぶも、猶ほ㋒梅花の老師兄有り。（老師兄を一に老主兄に作る。）

天上一枚の星を貪り看て、錯つて多羅八萬の經と作す、今日重ねて此の義を宣べんと欲す、黃鶯谷を出でて又叮嚀。

六年雪北不毛の地、一卷の兵書妄談を打す、星營中に落ちて諸葛死す、臥龍奮迅す活瞿曇。

智門蓮華の話

㋐智門公案の中を透得して、荷花雨過ぎて一枝紅なり、大唐國裡人の會する無し、吹き起す香風日本の東。

蟄龍

泥蟠豈に久しく地中に屈せんや、㋑桃花三月の風を待たず、別に衲僧霹靂の手有り、拈じ來つて拄杖を虛空に靠く。

須彌の枕子

㋒永平正法眼藏示衆に曰く、「天上の天花、人間の天華、天竺曼陀羅華、摩訶曼陀羅花、曼珠沙華、摩訶曼珠沙華、及び十方無盡國土の華は皆嚬裡梅花の屬なり。」梅華の恩澤なうけて花開するが故に、百億華は梅華の眷屬也と、梅花は卽ち佛祖廣大の心華にして、宇宙を一梅華と拈出するの標擬なり、以て知るべし。

㋐青原下七世智門光祚、香林澄遠の法嗣、僧との問話に曰く、「僧智門に問ふ、蓮花不出水の時如何。智門曰く、蓮華。僧曰く、出水の後如何。門曰く、荷葉」と。これ借事問なり、言名數句を離れて參究せんことを要す。

㋑傳說に曰ふ、「禹門に三級の浪あり、三月に至る毎に、桃花の浪漲る、魚よく水に逆ひ躍つて、浪を過ぐるものは卽ち龍と化し、風雷を起し其の尾を燒いて天に上る」と。

㋓破れすり鉢のこと。

㋔應庵曼華禪師の法嗣、密庵咸傑禪師なり。

㋕僧趙州に問ふ、狗子還つて佛性ありや、也た無や、州曰く、有り、僧曰く、已に有り、甚麼としてか這箇の皮袋に撞入す、州曰く、他の知つて故らに犯すが爲なり、又僧あり、問ふ、狗子還つて佛性ありや也た無や、州曰く、無、僧曰く、一切衆生皆佛性あり、狗子什麼としてか却つて又無なる、州曰く、伊に業識あるが

山形の枕子逍遙に任す、大仰機に當つて推せども搖がず、忽ち秋風に夢を吹き破らる、須彌百億小芭蕉。

仲秋、㋓破沙盆の話を頌す

七花八裂太虛空、正法元來汝が躬に在り、跱跳す㋔密庵の舊窠窟、秋天の明月一盆紅なり。

臨濟、半夏に黃檗山に上る　二首

風顚夏を破つて等閑に還る、驀地に踢翻す黃檗山、若し他の爲に一棒を行せずんば、尋常黑豆の老癡頑。

黃檗山頭に正宗を滅す、喝雷棒雨活機鋒、尋常尾を擺ひ頭を搖かし去る、濟水那邊に大龍と化す。

鐵狗

銅頭鐵額黑崑崙、紫金光聚の尊を活喫す、㋕趙州の皮袋裡に入らず、一聲月に吠ゆ落花の村。

雲門箭の一字

雪千峯を覆ふて天未だ晴れず、那僧の問處大遲生、箭の一字雷霆の舌、

吹き散ず檐間積雨の聲。

佛法は一隻の船の如し

慈明の一隻舟に駕起して、垂絲千尺凡流を截る、風を罵り雨を喝す浪花の底、金鱗を釣らずんば誓つて休せず。

㋺鰲山に雪に値ふ　二首

店上未眠の僧一枚、今朝成道六花堆し、當時若し是れ巖頭老ならば、鰲山に和却して踏倒し來らん。

㋻三人一隊の野狐精、何事ぞ連聲に老兄と叫ぶ、箇々看來れば白拈賊、鰲山成道假銀城。

靈雲、桃花を見る

呵呵大笑す豁然の時、觸發す春風桃一枝、娘生本來の眼を打失す、靈雲も亦暗證の禪師。

鐵拄杖

一條の拄杖虛空に靠く、鐵樹形成つて全く功を絕す、若し南泉をして正令を行せしめば、普賢妙德落花の風。

須彌の筆

東海松蘇利に涵して傾く、須彌百億一毫輕し、分明なり紙上の燈王佛、跳つて西來五字の城に入る。

㋺雪峰義存禪師が師兄巖頭全奯の提撕を受けて、鰲山に在つて大悟成道せしを云ふ。

㋻巖頭、欽山文邃及び雪峰三人、友を結び遍く宗師を訪ふ。

成就四法

妙の一字佛も宣べ難し、元是れ蓮に非ず普賢に非ず、四法成るを待つ遲八刻、花は開く天地未分の先。

大江和尚、百丈に住するの日、祖塔を拜する偈有り、其の韻に依る

百丈山高し向上の禪、㊥眞丹國也た扶桑の邊、縱然ひ㋺野鴨飛び過ぎ去るも、只だ大江春水の前に在り。（扶桑を一に搏桑に作る。）

㊥支那及び日本をいふ。

㋺百丈野鴨子の公案をいふ。

追悼

不二和尚、西源翁を悼むの韻に次ぐ

翁吾れに負くか我れ翁に負くか、猶ほ寃苦を添へて蒼穹に哭す、他家親しく白雲の子を得たり、天外の青山父の風有り。

鄧林和尚を悼む

久しく龍潭と響く多少の風、平生四海の一禪翁、雷霆の意氣皿盆の口、紙燈を吹滅して霜葉紅なり。

玉衡座元を悼む

玉衡座元は、吾が衡梅祖翁の徒なり。㋑大愚の祖堪を守つて而して晨香夕燈怠る無し焉。一日造化の兒に觸れて、㋺溘然として逝く矣、寔に享祿四年春二月㋩五寞なり。吁、吾が門の不幸、焉れより大なるは莫し、訃を聞く者、嘆息せざる靡し。予も亦偈を作りて以て諸徒の一哀を助くと云ふ。

㊁璇璣は北に轉じ㋥玉衡は南、五十年前二十三、吾れ豈に知に酬ゆるに㋭

㋑宗薬大愚と號す、智門祚に嗣法す、寛文年中、朝廷特號を諸相非相禪師と賜ふ。

㋺俄かに變ずる貌。

㋩五寞は五日に同じ。寞は寞莫にして、蓂の時に生じたりといふ瑞草、月の一日より十五日までに日毎に一葉を生じ、十六日より晦日迄には赤日毎に一葉づゝを落せりといふ。

㊁一種の玉、又北斗七星の第二位の星なり。

㋥星の名なり。

㋭一瓣の香をいふ。

一瓣無からん、鼻端先づ晩梅に向つて參せよ。

㋬景堂和尚を悼む

㋟大心の禪子活機鋒、三尺の㋠龍泉正宗を滅す、㋡□舌猶ほ在り雷聲□、雨點□□□長松。

天龍寺眞乘院祝英座元を悼む

龍門十日折り殘す花、其の人を見ず感慨加はる、無色界中多少の淚、西山の雨と作つて袈裟に洒ぐ。

宗順杜陀を悼む

三十才名惜むべき哉、胸中の書傳寒灰と變ず、家山一片の好風月、春ば梅窓に在り歸去來。

大藏西江軒雪窓首座を悼む

大藏五千の文字禪、西江の一滴錯つて流傳す、花に先つて吾が首座行腳せり、春雪吹き殘す牕の半邊。

謙仲讓首座を悼む

空しく記す同名㋛南嶽の碑、閻浮五十七年移る、薫風は吾が徒の惱を解かず、吹き折る炎天の梅一

㋟小城の人なり、初め景川隆に參じ、其の心印を傳ふ、後、妙心寺に出世し、永正享祿の間、二回尾張の瑞泉寺の住持たり、天文十年十二月賊の爲に切られて寂す。

㋠初め景川の跡を繼いで大心院に住す、故に爾かいふ。

㋡銘鼎の名。

㋢鈌字不明の處。

㋛六祖慧能の法嗣、南岳懷讓禪師の讓りなとゝ、故に之れをいふのみ。

枝。

宗慶庵主を悼んで瑞應和尚の韻に和す

瑞應堂上老師、家兄宗慶庵主を追悼す、余高韻を攀して一哀を助く。

識らず家兄何の日か來らん、疎鐘落日決然として離る、老松世を閲して雲壑に臥す、定んで奘公東に指す枝有らん。

韻を次いで譽禪尼を悼む

龍女の寶珠㋐一漚を認む、今古に輝騰して價何ぞ休せん、荷花紅碎く新地の雨、疑ふ是れ芭蕉秋に耐へざるかと。

某禪尼を悼む

返魂一炷鐵崑崙、報せんと欲するに元來是れ恩にあらず、大義渡頭千古の恨、落花流水江村を繞る。

天慶祐公禪尼を悼む

卒に一偈を賦して、玉何藏主に寄せて、天慶祐公禪尼を悼む。以て㋑

朞年の齋筵に赴かざるの罪を償ふと云ふ。

去年今日風光に別る、斷盡す梅花鐵作の腸、小玉聲中人見えず、枕屏の殘夢醒めて猶ほ香し。

㋐一つのあわなり。
㋑非は一めぐりして、又新たになるより、年の始めをいふ。

韻を次いで先天居士を悼む

橘家の跨竈乂跳樓、昨日は慈恩今は讎と作る、劍樹刀山芭蕉の雨、風流ならざる處也た風流。

光翁亘公大禪定門を悼む　細川六郎殿

遠き者は聲を呑み近き者は悲しむ、頭を回せば冬日影西に移る、牡丹一閏春は夢の如し、王老庭前㋒陸を召す時。

韻を次いで德勝居士を悼む

八十年の非今日知る、虛空消殞す身を轉ずる時、無去無來の處に藏れんと欲す、月に叫ぶ梅花孤雁の枝。

宗鼎宗斑二禪門を悼む

龍金㋓鼎に吟じ虎山に藏る、凡鱗を脫卻して一斑を露はす、父子不傳眞の消息、依然として花は帶ぶ舊紅顏。

天澤和尚十三回忌

恭しく以れば、吾が大法兄、前住龍峯天澤大和尚、㋔大梅の梅子にして、而して龍雲の鼻祖なり。外、朴直を示し、內、溫雅を懷く。㋕癯然として衣に勝へず、頗る古衲子の風有り焉。潛行密用、誰か其

㋒陸亘大夫、字は景、支那蘇州吳郡の人なり、唐の至德年中、御史大夫となる、夙に坐禪を好む、初め南泉に見えて卽ち問ふ、古人瓶中に一鵝を養ふ、鵝漸く長大にして瓶を出すこと能はず、鵝を損することを得ず、和尚作麼生か出し得ん。泉、大夫と召す、陸應諾す、泉曰く、出せりと。大夫玆に於てか省悟する處ありと。此の因緣を語るものなり。
㋓鼎、斑は暗に名字を打するなり。虎山は虎丘山なり、闡悟克勤の法嗣虎丘紹隆禪師、此所に禪風を擧揚し、大慧と共に克勤下二甘露門と稱せら

の彷彿を窺はん。熱喝痛棒、誰か其の機鋒に觸れん。謂つ可し、百世の臨濟なりと。愚昔遊方に志し、一歩を發するの初め、老兄を妙法精舍に扣く。三到九登、霜辛を喫すること殆ど數歳なり、夙緣の感ずる所、恩讎酬いがたし矣。老兄一日、師命を受け、遂に瑞泉の法席を董す、緇素歡呼、遐邇欣伏す、祖道の光輝、焉れより盛なるは莫し。瘴雨の濡す攸、蠻烟の染む所、俄爾として徼恙、溘然として化を戢む。一門の不幸、惜む可き哉。其の徒履を尾の犬山に瘞め、像を攝の龍雲に圖す。爾來、ノ烏積み兎久しうし、指を僂するに、今玆にの永五戊辰、孟春二十有五莫は、乃ちホ十三白の辰なり。其の高弟妙法和尚、ヘ齋筵を先廬に設け、齊しくフ龍象の衆に供す矣、至れり矣。愚も亦默止するを獲ず、叨りに村偈を唱へて、以て厥の丹悃を共にす。蓋し深心を將つて塵刹に奉ずるのみ。伏して乞ふ昭亮せよ。

元是れ吾が家の老大龜、先師に嗣いで先師に冐はず、金闕傳外人の會する無し、閒卻す春風花一枝。

ムム景川和尚三十三回忌、松岳和尚香語の韻に依る

ノ馬祖の大梅法常、譯千に印可せし時、大梅に因みて梅子の熟するにきかしたる語なり。

ヒ皆せたる形容。

ハ日月の重るをいふ。

ヘ後柏原天皇の永正五年なり。

ホ十三年目の忌辰。

ヘ亡靈供養の意なり。

フ書宿に同じ。

ムム諱は宗隆、伊勢の人、幼にして圓明寺に投じて剃具、後桃隱の鎚下にあること十三年、桃隱の寂後、龍安寺の雪江環に依る、京の妙心、龍安、尾張の瑞泉、丹波の龍興、伊勢の大樹寺等に歷住す、明應九年の春、大心院に寂す。

ヲ北斗、牽牛星の繞る途をいふ。

ワ無間地獄をいふ、五逆罪、謗法の罪を犯せるもの此所に生る。

塔を大龜と號す多少の年、雷遷り電繞る斗牛のカ躔、胸中の五逆藏すこと得ず、熱鐵花開くワ阿鼻の烟。

イ景堂和尚七回忌、韻に依る

德爵齒の尊以て加ふること蔑し、吾が禪鸚鵡拏茶と叫ぶ、岐山雪白し象王の袴、銀色の普賢來つて花を獻ず。

普門寺某三回忌の香語

再び普門を現ず南海の涯、栴檀オ沈水佛陀耶、拈じ來れば物物他物に非ず、小鐵圍山太白華。

普門寺明巖座元三十三回忌

普門示現老師翁、曆數卅三汝が躬に在り、春王正月の朔を待たず、一爐の沈水クの木犀の風。

寶泰寺大器座元七年忌

吾が首座曾て行腳し來る、爐香未だ冷かならず七年移る、ヤ崑崙の鼻孔無功德、炎天梅蘂の詩を聽取せよ。

不孤軒德首座十三年忌

カ諱は玄訥、山城の人なり、始め景川隆に參じ、其の心印を傳ふ、景川の寂後、大心院に住す、後勅を奉じて妙心に出世す、永正享祿の間、二回尾張の瑞泉寺に住持たり。

オ香木の名なり。

ク木犀、香木なり、沈水に似たる香氣あり。

ヤ崑崙の意、叢林種々混雜して用ふ、此所は莊子の混沌の意をいふ、卽ち「元氣未だ分れざるなり、耳目を穿ちて死す」とあるこれなり。

百億の須彌㋓小博山、八萬の閣浮一沈水、十有三年㋔德孤ならず、菊は秋香を餘し梅は蘂を吐く。

以心傳公小祥忌

大永六年季春十有一日、迺ち以心傳公の小祥忌辰なり。聊か㋕伽陀一篇を唱へて、以て菲薄の奠に充つ。

記得す去年今日の事、鳥啼き花落ちて一回新なり、當陽拈じて小香爇と作す、喚び醒す春閨夢裡の人。

大玄宗濟上座三七日忌　　勢州の人

臨濟の三關打破了、吹毛磨し盡して急に提撕す、滿林霜隕ちて秋光冷じ、一曲の㋖伊州殘月の西。

汝雲妙慶㋗大姉五七の忌

梅湖藏主、祖妣汝雲妙慶大姉五七忌の爲に、預め齋を設く。手から㋘六喩經を謄寫し、貫華一章を唱へて、以て撫育の厚恩に酬ゆ。愚、聊か其の韻を攀づ。

生死海中一漏無し、涅槃岸畔同流を絕す、半雛の殘月眞の沈水、手に信せて拈じ來る專ら爲にする秋。

㋓博山は香爐なり、海中の博山に形どる、下盤に湯を貯へ、雲氣香を蒸す、海水の四方に環るに象ると。

㋔論語の里仁に「德孤ならず、必ず隣あり」と。

㋕偈頌のことなり、德を頌する所の詩の體にして韻文なり、宗門古來の禪詩、禪偈、頌、頌古と稱するものは、押韻平仄必ず詩の體に倣つて作る、現今用ふる法語、香語等に至る迄、其の作法專ら詩の體による、又經とも伽陀とも稱することあり。

㋖伊勢の人、故に點出するなり。

淵了正源信士㋗卒哭忌に薦す

丹州の人事、一色幕下の忠臣、遠山氏淵了正源公、今玆に永正丁卯夏五下八の日に丁りて、命を輕んじ義を重んじ、陣前に戰死す矣。所謂重賞の下に必す勇夫有る者か。蓋し忠臣は孝門に出づる者なり、傍に觀るだも忍びがたし、況んや復た父母兄弟の情をや。遂に野偈一章を作りて、以て百日の奠に當つと云ふ。

㋘都盧大地法身の香、心源に薰徹して十方に透る、一色明邊君自ら看よ、秋天舊に依つて遠山長し。

遠山氏某七年忌

七年一枕㋙黑甜の餘、父の風を慕ひ兮父の書を讀む、烏鉢遠山限り無く好し、先廬の脩竹影蕭疎。

月溪常圓三十三年忌

刹那三十有三秋、劍樹刀山解脫樓、信せずんば回光返照して看よ、一天の明月江に入つて流る。

聖泉居士三十三回忌

㋗善女人、善信女をいふ、今は大居士、居士の對稱として、大姉の號を戒名に付す、如來在世中、既に大姉の語を用ひ給ふこと、太子瑞應經、行忍鈔等に見ゆ。

㋘金剛經應化非身分三十二に、「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」と、此の偈中夢、幻、泡影、露、電を稱して六喩といふ。

㋙一百日の忌辰をいふ。

㋚すべてといふ意なり、碧巖第三十四則の評に、「寒すれども熱を聞かず、熱すれども熱を聞かず、都盧是れ箇の解脫門」と。

㋛支那南方の俗語、午睡を黑甜といふ。

霄漢に透り也た黄泉に徹す、這箇の一香三十年、自家門外の雪を掃はず、只だ看る春の早梅の邊に在ることを。

㊀先考十七年忌

佛恩に酬ゆるか祖恩に報ゆるか、㊁露の一字老雲門、劈開す十七年前の面、屋後の青山笑つて言はず。

柴屋居士十七年忌

先に東關に入るは山を看んが爲なり、主人去つて十七年間、松門㊂柴屋依然として在り、只だ恨む名を聞いて顔に對せざることを。

某三十三回忌

武閥曾て此の郎を失してより、幾乎三十有三霜、端無く拈出して恩に酬い去る、秋後滿山楓葉香し。

先妣三十三年忌

眞箇娘生の舊面皮、元來子母相知らず、一恩三十三年の後、雪は重し梅花臘月の枝。

宗歡宗喜父子五七日忌

君臣父子㊃三綱を整ふ、命を戰場に殞して忠孝彰る、劍樹刀山百雜碎、當陽拈じて本來の香と作す。

㊀先父をいふ、父死する之れを考といひ、母死する之れを妣といふ。
㊁雲門云く、「露、露堂々、古佛露柱、體露金風。」若露現、不覆藏の意を表す。
㊂居士號を打す。
㊃君臣、父子、夫婦の道、之れを三綱といふ。

宗室禪門十七年忌

熱喝嗔拳五逆の兒、阿鼻の火坑を掀翻し來る、恩に報ゆるが是か也た讎に酬ゆるが是か、雪を吹く炎天の梅一枝。

古月妙圓禪定尼七周忌

一千の佛母老㊄摩耶、百萬の人師老釋迦、今日恩に酬いて消する底の物、臘天の風雪七梅花。

華屋宗榮百年忌

曾て華屋より泉臺に落つ、㊅荏苒たる光陰一百回、我れに江南の寶薰の在る有り、秋風吹いて月中の梅に入る。

駿陽の僧の爲に、其の慈母追室妙清禪定尼を薦す

恩を報ずる一瓣の㊆鷓鴣斑、深きことは海の深きに似たり高きことは山に似たり、山は是れ士峯天下の白、相逢ふて識らず慈顔に對することを。

旭芳宗泉禪定門三十三回忌

蝸牛角上一英雄、功名を留取す㊇麟閣の中、碧眼黄頭夢を說くことを休めよ、天堂地獄大槐宮。

㊄釋尊の母君なり。
㊅長びく意。
㊆形鶉に似て稍大なり、背部は灰蒼にして、柿色の斑點ありと、又香の異名なるか。
㊇麒麟閣をいふ、漢朝、功臣の像を畫きて後世に殘せしもの、以て麟閣に畫くとは功名を止むることなり。唐劉芝芝の詩に、「將軍樓閣神仙を畫く、一朝病に臥し相識無し」と、卽ち是れなり。

玉叟玄繼居士一周忌

忠臣元孝門の中より出づ、近代麒麟第一の功、五月牡丹花夢の如し、午簾雨過ぎて微風を起す。

宗琳居士七年忌

今日相逢うて一笑新なり、分明に記し得たり七年の春、簷頭滴滴薔薇の雨、洗ひ出す阿爺の淨法身。

春陽宗照信女十三回忌

春陽秋露十三回、杜宇聲中喚べども來らず、別に㋺聖胎長養の處有り、一枝身を結ぶ綠苔梅。

瑞雲開基玉峯大姉十三回忌

秋風葉落つ十三年、老淚衣を濕す何の夙緣ぞ、崑崙を劈破して香片と作す、瑞雲吹き起す玉峰の前。

明叟宗鑑禪定門七周忌

天文八祀八月二十九日、乃ち明叟宗鑑禪定門七周忌の辰なり。孝子預め仲春二十九蓂に於て、供佛齋僧の次で、㋑苾蒭衆に命じて、㋺一乘妙典を頓寫す。仍つて小比丘宗休が手を倩ふて、這の松子膜を焚いて、以て罔極の恩に酬ゆと云ふ。其の偈に曰く、

㋺聖胎は佛の種子を受胎する此の肉身、長養は增長養生の意。

㋑比丘に同じ、乞士、除饉、勤息、勤事男ともいふ、又破惡、怖魔の義あり、男子の出家をいふ。

㋺法華經をいふ。

這の香佛祖不傳の傳、懷中に秘在すること已に七年、今日看來れば松子膜、㋩碧落を衝開し黃泉に徹す。

春溪智雲大姉七周忌

今玆に文丑㋥孟春二十六蓂、廼ち宜春軒主翁の萱堂、春溪智雲大姉の七回忌なり。㋭休也、七年の前、夜雨燒香し、七年の後、春風燒香す、蓋し夙緣の感ずる所か。偈を作つて以て孝子の一哀を助く。

七年の春夢老婆婆、爲に勸む一杯紅杏の霞、誰ぞや前身戒和尙、香烟散じて百東坡と作る。

㋩碧天をいふ。
㋥孟春は一月を云ふ。
㋭宗休自ら云ふなり。

詩

㋑大雲山龍安寺歲旦　四首

龍安龍峯の一龍孫、當處に豁開す甘露門、春風多少の力を借らず、大雲吹き起す盡乾坤。　龍寶國師の上堂を擧す。

大雲山裡孟春寒し、敢て諸方の熱瞞を受けず、臘雪吹き添ふ新白髮、花に逢ふて猶ほ舊時の看を作す。

佛法年頭無卻つて有、祖師の鼻孔舊か新か、㋺乾元の一氣㋩隗より始む、花も亦黃金臺上の春。

大王萬福春來也、花は滿つ扶桑六十州、若し眉毛長きこと幾尺と問はゞ、報じて言へ西嶺雪千秋と。

德林和尙歲旦の韻に次ぐ

新年舊歲事如何、昨日今朝也た任他あれ、翁は德春に輝き我れは鬢雪、㋻菱花半掩ふて獨り高歌す。

㋑京都府御室の東にあり、當村は初め衣笠左大臣實能の別業にして、傍に一宇の佛殿を營みて、德大寺と號せり、其の後同公有の世にいたり、細川勝元請ふて自家別莊とす、文明五年勝元の歿するや、遺囑によりて龍安寺と名け、妙心寺の僧義天を聘して開祖たらしむ。

㋺昌の元亨利貞の元にして、春の氣をいふ。

㋩士の優れたるを招かんとするには、先づ劣者を用ふべしとの故事。戰國策に、燕の昭王、位に卽き、身を卑くし幣を厚くして、以て賢者を招く、郭隗先生曰く、(中略)今王誠に士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ、隗すら且つ事へらる、況んや隗より賢なるものをや云々」と、隗の意氣たるや、實に陽春の氣なり、自ら隗に比するか。

㋻古の名鏡、靈寶なるが故に錢を掩ふなり。

㋼莊子に「千金之珠は必ず九重の淵にあり、而して驪龍頷下にあり」と。又庄穎に「明月の神珠、九重の淵內驪龍頷下にあり」と。

㋽杜工部の絕句に「窓に含む西嶺千秋の雪、門に泊す東吳萬里の船。」蓋し之れを飜し來るものか。

㋾はなだ色の書衣。唐の太宗の詩に「蒹編斷復續、縹軼舒還卷」と。編は萌黃色なり。

㋿易經、書經、詩經、禮記、春秋、樂記。樂記亡びて周禮を以て

歲旦

年年何ぞ用ひん新舊を問ふことを、佛法南方古今を絕す、屋後の梅花無盡藏、門前の柳色萬黃金。

尾州青龍山瑞泉寺歲旦　二首

托出す㋼青龍頷下の珠、春光爛熳として天衢に接す、滿堂花に醉ふ三千指、佛法新年一點無し。

鴻鈞一氣天關を轉ず、楊柳眉を舒べ花顏を解く、萬古瑞泉流盡きず、七珍八寶湧いて山の如し。

河州東吳庵の歲旦　三首

新年の佛法有か無か、拄杖慇懃に來つて吾れに問ふ、纜を解く春風舟一隻、千秋の雪を載せて㋽東吳に到る。

新年の拄杖舊同參、今日相逢ふて俗談無し、法幢を建て今宗旨を立す、一莖の春草活伽藍。

地軸斡回し天輪を轉ず、造化功成りて一氣新なり、侍者報じて言ふ花萬福と、太平の春は太平の人に屬す。

儒士某少年の試毫を和す

結髮師に從ふ伊洛の涯、㋑縹囊緗帙色交加す、天工春風の手を試みんと欲して、先づ開く㋒六經三史の花。（開を一に發に作る。）

童子試毫の韻を和す　五首

硯池波暖にして梅を浴する辰、月は是れ㋓毛錐字字新なり、復た長繩の鶯日を繫ぐ無し、讀書終日餘春を惜む。

梅花の標格雪の精神、一歲新なる時詩も亦新なり、持して渠儂に贈る㋔寸陰の璧、今より惜むべし少年の春。

春風筆を呼んで新正を賀す、竹は平安を報じ花は太平、誰か㋕蒙求中の一句を把つて、雛鶯に敎へて詩を學ぶ聲を得ん。

廿四番の風此れより吹く、㋖鯉庭の桃李競うて開く時、小童若し是れ㋗鄒人の子ならば、禮を學んで如何ぞ詩を學ばざらん。

內苑花開く胡蝶の風、新詩樣に入つて墨痕濃なり、讀書道ふこと莫れ來年在りと、春再び回らず顏紅ならず。

希周㋘髫年の試毫を和す

之れに烏ふ。三史は史記、前漢書、後漢書ないふ。

㋓毛錐は筆なり。

㋔大禹、尺璧を惜まずして寸陰を惜むと。

㋕唐の李瀚の選する書、經史中より事實の相類するものをとりて、問々相對せしめ、記誦に便ならしむ。

㋖孔子の子を伯魚といふ、其の生るゝに及び、魯の昭公二鯉を賜ふ、因つて名となすと、其の詩は「以て興すべく、以て觀るべく、以て群すべく、以て怨むべく、之れを近くしては父に事へ、之れを遠くしては君に事へ、又多く禽獸草木の名を知る」と、論語に見ゆ。

㋗孔子のことないふ、鄒は孔子の生地なれば、孔子の徒ならばの意なり。

㋘髫髮を垂るゝ位の少年。

仁氣一たび陶して花木濃なり、春城處として恩風ならざる無し、奇才何事ぞ朱崖の外、玉堂雲霧の中に在るべきに。

高野山に題す

高野山高うして點塵を絕す、松杉路を夾んで古碑泯す、花は熏す雲霧烟霞の底、自ら是れ㋙龍華三會の春。

藤代に題す

山水尤も奇なるは天下に多し、花香月影看よ如何、㋚瀟湘の八景又二を添ふ、吹上の沙和歌の浦波。

鴉山に題す

北苑の風烟君頒つ可し、吳僧茗を煮て鴉山を說く、鴉山好しと雖も誰か商略せん、我が前丁後蔡の間に待つ。

富士山に題す

何の年か㋛鼇背山を負ひ來る、百億の須彌點埃を絕す、四十由旬士峯の雪、眼高うして看て㋜天台に到らず。

人の士峯に題する韻に依る

㋙龍華は樹なり、華龍の如しと、當來の彌勒、此の樹下に於いて釋迦の未だ度ぜざるものを度し、次に其の餘を度す、凡そ六十八億人、之れを第一會と云ふ、次に六十六億、次に六十四億と、故に龍華三會と云ふ。

㋚瀟湘は支那湖南省にある瀟水、湘水の二河の名、永州に合して瀟湘といふ。此所山水明眉、景色佳絕なり、瀟湘の夜雨、洞庭の秋月、遠寺の晚鐘、遠浦の歸帆、山市の晴嵐、漁村の夕照、江天の暮雪、平沙の落雁、これをいふ。

㋛海中のおほきなすつぽん。

㋜支那浙江省台州府天台縣の北にあり、智者大師の開く處。臨海記に曰く、「天台山は超然として秀出す、山八重あり、之れを見るに一の如し、高さ一萬八千丈、周圍八百里」と

㋐坡仙聞く昔斯間に到ることを、獨り愛す全身雲水の間、乾坤を白盡す士峯の雪、眼高うして宋地山無きに似たり。

松風石

出し盡す　㋓扶餘萬里程、松陰六月風を以て鳴る、老來殘暑を推すに力無し、㋔石に嗽ぎ流に枕して此の聲を聽く。（扶餘を一に夫餘に作る。）

繼鹿尾に花を見る　尾州

鹿野の春を移して斯地に看る、千年の象教一枝殘る、幽人指點す花か雪か、片片風に和して玉欄に上る。

茅野に花を看る

雲山櫻を擁す千萬里、多年天外に金峯を望む、花を出でて還つて又花に入り去る、春夜朦朧たり古寺の鐘。（千萬里を一に千萬重に作る。）

小僧に贈る

古寺歸り來つて閒に曾を記す、十年の前事谷陵と成る、山禽語らず人の問ふ無し、一榻の秋風白髮の僧。

播陽の太守赤松兵部大夫に寄す

あり。

㋐東坡居士をいふ。

㋓今の盛京省奉天府開原縣治なり。

㋔隱遁して山中にあるをいふ。晉書に「孫楚、字は子荊、操卓絕爽邁、不群陵傲する所多し、經曲の譽なかく、年四十、始めて鎭東軍事に參じ、馮翊の太守に終りぬ、初め少時、隱遁せんとして、王濟に謂つて、「枕ㇾ石漱ㇾ流」と云ふべきを誤りて、「漱ㇾ石枕ㇾ流」といふ、王濟曰く、流は枕すべきに非ず、石は漱すべきにあらずと。楚曰く、枕流は其の耳を洗はんとす、漱石は齒を厲かんと欲するなりと。」

風流の太守久しく名を聞く、水遠く山長し情更に情、手を拍して呵呵相見し了る、老僧門外に松聲を送る。

㋑韻を洞下の僧に次ぐ

鯨波萬里の長きを遠しとせず、袈裟角草鞋を裹んで香し、青鷹室に入る果して何の徵ぞ、記すや否や　㋒浮山殘夢の牀。

韻を次いで夢庵老人に寄す

湘山は黛の如く洞庭は鬚、月色朦朧として雨氣濡ふ、中に畫師寫し難き處有り、詩僧閑に石屏に倚つて孤なり。

宗藝喝食落髮　丹州の人俗姓井上

丹山此の鳳凰兒を產す、六藝文章㋓羽儀好し、井上の碧梧風動せず、巢に栖んで高く聳ゆ萬年の枝。

㋔歐陽修が秋聲賦を讀む　二首

㋕醉翁亭の畔響㋖颼颼、聲は西南に在り定めて秋なる可し、今夜暗中に摸索して識る、梧桐一葉亦曹劉。

聲は西南に在りて醉翁を迷はす、暗に識る秋意の梧桐に屬するを、宋下四百年の天下、吹醒す山川

㋑次韻は詩の韻を前後易ふることなく其の儘用ふるをいふ。

㋒浮山法遠禪師、葉縣歸省禪師の法嗣、歐陽文忠公、師に參じて大いに省ありといふ。

㋓易の漸卦に、「鴻陸に漸む、其の羽を用ひて儀とすべし、吉」とあり、儀法をいふ。又、殊退之燕喜亭に、「知以て之れを謀り、仁以て之れに居る、吾之れを去つて天朝に羽儀する、遠からざるを知る。」また義表の意あるなり。

㋔收めて文章軌範、古文眞寶にあり。

㋕歐陽公が廬陵の太守たりし時、營みしもの、醉翁亭の記あり。

㋖風の聲にいふ、張正元の賦に、「颼颼として凄し」と。

黄落の風。

盆石に題す　　京南宗珠の請

奇石持し來つて天より翁に與ふ、㋐九華何ぞ必ずしも壺中に在らん、青螺涌くが如し平沙の上、復た江山の日東に出づる無し。

某が來韻を和す

月には秋を話り兮花には春を話る、天に問ふ何の幸ぞ吟身に伴ふ、詩歌自ら風流の種有り、白髪三千雪巾に滿つ。

松岳和尚茶話の韻に和す

潙嶠の夢を原ねんと欲す、侍者茶を點じ來れ、茶罷み夢醒めて後、鐘聲月に催さる。

松岳和尚茶話の詩に云く、「茶は禪味を兼ねて可なり、能く俗塵を避け來る、且く車を停めて話らんと欲す、楓林暮色催す。」

㋑策彦西堂の大明國に赴くを送る

此の老禪機衆流を截る、南遊何の日か㋒大刀頭、海門風定つて鯨波穏かなり、一葉舟中四百州。

㋐茶の異名なり。
㋑名は周良、謙齋と號す、洛北鹿苑寺に入り、心翁安に法を嗣ぐ。天文六年防州の太守大内義興、築前博多の新墓寺碩鼎に命ずるに入明の使節を以てし、師に屬するに其の副使を以てす、天文八年再び遣明正使として入明し、世宗皇帝に謁し、大いに優遇せらる、

策彦西堂、再び大明に赴くを送る

千里鶯啼いて遠く人を送る、白頭何の日か又春に逢はん、歸舟早く西湖の月を載せて、我れに梅花面目の眞を呈せよ。

仁澤老禪、㋓岐陽に歸るを送る

詩家第一の碧瞳胡、歸り去つて黄花有れども無きが若し、九月岐陽定んで微雪、㋔關山の梅樹㋕背盧都。

津首座、東關に歸るに餞す

㋖柳樑擔ひ來る士峯の雪、袈裟帶び去る御園の花、㋗寃家何事ぞ寃苦を添ふ、杜宇一聲天の一涯。

㋘希庵老禪の越に赴くを送る

誤つて杜鵑と作す君聞く莫れ、淵明去つて後晉に文無し、花に先つ歸雁知んぬ何事ぞ、飛んで越山深處の雲に入る。

梅江藏主、關西に歸るを送る

山雲海月の情を話らんと欲すれば、春風使を奉じて京城を出づ、君聽け三疊㋙陽關の曲、鶯は花邊に向つて聲を惜まず。

㋒大刀頭は岐阜を云ふ。
㋓岐陽は岐阜を云ふ。
㋔故郷の義なり、又支那遵化縣西北三十里にあり、山逢關に近し、故に名く。又樂府に、關山月の曲あり、離別に多く關山を用ひて遠別の隈風と爲すと。
㋕無言の貌。
㋖杖に作る木なり、杖を云ふ。
㋗仇敵をいふ、忘れられぬ意に用ふ。
㋘諱は玄密、山城の人なり、始め建仁寺の月谷嶋を拜して剃具し、雲嶺瑾に依ること久し、去つて美濃惠溪寺に往き又武田信玄の請に應じて、甲斐の惠林寺、長興寺等の諸剎に止ること數年、歸つて天龍寺塔頭の妙智院に靖居す、天正七年六月一日寂す。
㋙故郷に歸る隱語、刀の頭に環あり、環還音相通ず、古詩に「何の日か大刀頭」と。

三省先生を送る

卜は龜に匪ず分筮は蓍に匪ず、斯心㊐四聖未だ曾て知らず、機前に劃破して君に與へて看せしむ、六月梅花㊁太極の枝。

明山藏主、東に歸るを送る

再會期し難し老顏を奈せん、東遊萬里白河の關、殘紅新綠滿山の雨、㊃

杜宇等閑に呼び得て還る。

哲上人、肥陽の古寺に歸るを送る

渠儂何事ぞ高城を憶ふ、話り盡す三年海月の情、西陽關を出でては能く記取せよ、落花啼いて送る杜鵑の聲。

天得首座、岐陽に歸るに餞す

海東得得來和尙、祖師の心を傳へて宗大いに興る、萬里の鄕關猶ほ未だ忘れず、雲を逐ふて飛び去る老㊂烏藤。

僧の九州に歸るを送る

㊄甘棠の芟舍先宗を慕ふ、秋客衣に入つて歸意濃なり、再會期し難し吾れ老いんたり矣、海西月落つ五更の鐘。

て、明叔浚に參じ、遂に言外に徹す、永祿の始め、勅を奉じて妙心に住し、其の名聲下に高し、武田信玄の三請に應じて惠林寺に入り、久しからずして美濃大圓寺に還る、文龜元年賊の爲に傷を得て寂す。

㊃送別の時、唱ふる詩をいふ。唐の王維が元二の安西に使するを送る詩に、「渭城の朝雨輕塵を浥す、客舍青青柳色新なり、君に勸む更に一盃の酒を盡せ、西陽關を出づれば故人無からん」と、後人之れを陽關の曲となし、三疊して之れを唱ふ、蘇軾の詩に、「陽關三疊君須らく秘すべし、腰西を除却して歌を解せず」と、三疊は三重にドじ。

㊄聲聞、緣覺、菩薩、佛の四をいふ。

㊅天地陰陽未だ分れざる以前を

功岳座元の駿陽に歸るを送る

㊆松三保に連る衣を掛くる藤、天女花を獻じ龍燈を點ず、來るも亦無心歸るも亦好し、㊇孤雲倦鳥一閑僧。

㊈重陽の前日十洲の鄕に歸るを送る

茅鞋櫻笠草裂裳、曉に長安殘月の家を出づ、怪しむ可し斯の行節に先つて去ることを、㊉淵明終に黃花に負かず。

眞安藏主、藝陽に歸るを送る

誤つて他鄕を認めて故鄕と作す、巾瓶相侍す五年强、衣を拂つて好し去る家山の路、㊋秋海棠の西夕陽ならんと欲す。

宗擴藏局の舊梓に歸つて母を㊌省するを送る

那處の春山か故鄕ならざる、㊍孃生の面目露堂堂、歸り來つて老僧に呈示して看せしめよ、秋は信州の紅海棠に在り。

楓林殘照　高雄山に遊んで作る　一首

楓橋何事ぞ等閑に過ぐ、山は晚秋に到つて勝槩多し、一麾を把つて落日を回さんと欲す、烏藤亦是れ魯陽が戈。

㊆不如歸の意を等閑に呼んで願みぬとなり。

㊇拄杖をいふ。

㊈史記の燕世家に、「召公の西方を治むるや、甚だ兆民の和を得たり、召公鄕邑を巡行し棠樹あり、獄政事を其の下に決す、諸人皆其の所を得、職を失ふものなし、召公卒して棠樹を懷ひ、敢て伐らず、之れを歌詠し甘棠の詩を作る。」即ち詩の召南に、「蔽芾たる甘棠、剪る勿れ伐る勿れ、召伯の茇りし所」と、先宗の德を比するなり。

㊋彼の邁昭が「天津風雲のかよひぢ吹きとぢよ、乙女の姿しばしとゞめん」の意を出したるなり。

㊌淵明が歸去來の辭に曰く、「雲無心にして岫を出で、鳥飛びに倦んで還るを知る」と。

秋花に在るか春楓に在るか、夕陽斜に挂く滿林の紅、紅園み緑擁す寒山の路、吟じて㋑牧之が詩句の中に入る。、

杜鵑を待つ

彷彿として去年杜鵑を聽く、暮雲深く擁す蜀山の邊、一聲定めて曉天の雨なる可し、窓は長松に掩ふて獨り眠らず。

藤繞庵

地を江南に卜す南更に南、藤蘿深き處鬢毳毳、花を垂れ蔓を挂く三千尺、春風を縛住して一庵と作す。

花を待つ

最も怪しむ㋺東君の馬前まざるとを、詩を爲つて誰か㋭祖生が鞭を著けん、三千一念花を待つ意、白髮の閑僧柱に倚つて眠る。（「爲る」を一に「作る」に作る。）

葉底の殘紅

細雨香を浥して新緑深し、墻を過ぐる黄蝶枝を繞つて尋ぬ、滿城の春色㋻永嘉の末、一片の殘紅正始の音。

㋷九月九日、菊の節句なり。
㋸歸去來の辭に、「三徑荒に就き、松菊猶ほ存す」と。
㋹群芳譜に、「秋海棠、一名八月春、」また花疏に「秋海棠は蟋好、宜しく幽砌、北窓の下に之れを種うべし」と、時節を云ふものか。
㋺見舞ふことなり。父母及び其の親戚等に用ふ。
㋻母のことなり。
㋼杜牧之が山行の詩に、「遠く寒山に上れば石徑斜なり、白雲生ずる處人家あり、車を停めて坐ろに愛す楓林の晚、霜葉二月の花よりも紅なり。」
㋽東君は太陽をいふ。史記封禪書に、「五帝東君は雲中司命の屬」と、註に「東君は日なり」と、然れども後世多く春神の稱とす。
㋾先鞭のことなり、晉書劉琨傳に、「琨、祖逖と友たり、親故

春池の梅影

池亭只だ㋿横斜を愛するが爲に、曾て難波より此の花を移す、道者の家風若し相似たらば、晴瀾月を吹いて袈裟に上らん。

蟄鶯

嫩鶯蟄戸未だ曾て開かず、幽谷寒深うして雷を待つに似たり、溫顧若し氷雪の底に通せば、春風先づ起せ臥龍梅。

五月の菊

夏に在る黄花秋に在るに似たり、山房五月㋿小笆の秋、一枝雨に臥す㋾義皇の上、元嘉以後の秋を待たず。

秋後山を觀る

斜風黄落す雨斑斑、一鳥啼かず秋後閒なり、司馬灰寒し數峯の色、元嘉の時節獨り山を觀る。

紅雨

朝に遊履を埋めて跡雪を凝す、暮に疎簾に洒いで影花かと訝る、是れ㋿巫山神女の夢なる可し、紅と爲り雨と爲りて君が家に到る。

に與ふる書に曰く、我れ戈を枕にして旦を待つ、志逆虜を梟せんとす、常に祖生の吾れに先んじて鞭を著けんことを恐る」と。
㋿永嘉玄覺禪師、六祖大師の法嗣。初め六祖に參じ、錫を振ひ祖を廻ること三匝して、三千の威儀八萬の細行を論じ、衆を驚し、無生の意を得て激賞せられ、留まること一宿して、心印を付せられ、一宿覺と異稱す。乃つて花の殘るを意味するものか。
㋾梅をいふ。林和靖の詩に、「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏」と。
㋿竹の籜なり。
㋾人品の高きことをいふ、太古の伏犧時代より以上の人といふ意。書言故事に、「晉の潤明、夏日北窓の下に高臥す、風あり颯然として至る、自ら

涼螢竹を度る　三首

(ル)秦皇竹帛積んで堆を成す、螢火稍消して灰よりも冷じ、小碧窓前無月の夜、涼に乘じて空しく寂寥を照し來る。

腐草螢と化す涼意微なり、雨の時影を添へて月の時希なり、光を分つて照さす書窓の夜、脩竹叢の西緩緩として飛ぶ。

新竹綠濃にして花も如かず、微涼暑を吹いて郊墟に入る、夜來螢も亦(ヲ)殷人の鑑、昔時聖に非ざるの書を照すこと莫れ。

寒雁

旅雁聲寒し蘆葦の涯、江風曉に徹して吹くに堪へず、霜辛雪苦翅翮短し、歸意花を待つて花較遲し。

竹窓雪を聽く

十年塵夢の迷を喚び醒す、半窓の雪竹響高低、斯聲畫堂の上に到らず、何事ぞ荊公獨り臍を噬む。

松寺に鵑を聽く　三首

耶溪の古寺月斜明なり、箇の長松を留めて杜宇鳴く、何事ぞ君に問ふ歸意切なる、一聲卻つて千聲に彷彿たり。

謂ふ、秦皇以上の人」と。

(ヌ)楚の襄王夢に巫山の神女と會せし故事。劉廷芝の公子行に、「雲と爲り雨となり楚の襄王」と、李白の清平調に、「雲雨巫山枉げて斷腸」と。

(ル)秦の始皇、先代の經書を集めて之れを燒き、天下の人を愚にすと。

(ヲ)殷の紂王の暴逆、遂に滅亡に歸する故、古人殷鑑遠からずといひて、無道を戒められたり。

耶溪の新綠花に勝るや不や、日暮れて杜鵑啼いて幽を出づ、雲は隔つ東關未歸の客、松聲好しと雖も卻つて愁を添ふ。

箇の長松樹新銘を換ふ、復た詩人の意を著けて聽く無し、啼落す若耶溪上の月、今より榜を挂けん杜鵑亭。

寒雲雪ならんと欲す

凍雲雪ならんと欲して層巒を擁す、半は疎簾を捲いて玉欄に倚る、陽臺に向つて暮雨と爲らず、梅花被底夢應に寒かるべし。

東川に杜鵑無し

南人の雪と北人の梅と、此の地に杜宇を尋ね來るが如し、未だ疑團を免れず無も亦好し、旅簷の殘雨客腸摧く。

水邊の梅花

梅は江南野水の涯に在り、人を驚す春色兩三枝、横斜影落つ黃昏の後、月を添ふ鷗邊也た一奇。

寺近うして鐘を聞く

殷殷たる疎鐘聞いて迷はず、海山近く接す(ワ)古招提、春來更に花を出づる色有り、一朶の紅雲斜月

(ワ)梵に拓鬪提奢、唐に四方僧物といふ、或は鬘といふ、別房施、又は對面施と譯す、後魏の大武帝始光元年伽藍を作りて、始めて招提の名を得たり、常住の僧物をいふ。

の西。

中華の書に日本の凝露臺を言ふ、戯に題す

日出處の東漢家を移す、㋐瑤臺凝露洛陽の涯、四海蒼生の渴を蘇す合し、養ひ得たり芙蓉八月の花。

旅宿の曉　題咏

異鄕客と爲つて先生に別る、月江村に落ちて五更ならんと欲す、白歸舟に集る士峯の雪、袈裟裏ます杜鵑の聲。

花の錦　和歌の題

㋓遊絲を剪取して百尺長し、春風織り出す錦衣裳、花前怪しむ莫れ無家の客、一枝を帶びて故鄕に還らんと欲す。

花前月を見る　和歌の題

清水の巖前に白櫻を愛す、花有り月あり㋔二難并す、玆の遊奇絕衰老を慰す、色を鬪はしめ光を爭ふ㋕不夜城。

梅の關　和歌の題

東風を鎖斷して香を漏さず、春遊の佳客詩腸を腦ます、鷄聲啼破す

㋐月の異名、又玉の臺、淮南子に「殷の紂王瓊室瑤臺を作る」と。

㋓「かげらふ」なり、沈約の詩に、「游絲空に映じて轉ず」と。

㋔賢主、嘉賓、之れを二難といふ、月と花とに比するなり。

㋕燈燭の光晝を欺くをいふ、後轉じて繁華熱鬧の地をいふ。

㋙函關の月、誰か識る花中に孟嘗有ることを。

扇面の八景　二首、各四景

㋙雁平沙に落つ月の上る時、洞庭七十二峯奇なり、湘南湘北雨か雪か、水遠く山長し歸去來。

落雁、秋月、夜雨、暮雪。

帆腹風を含んで歸艇輕し、市人は利を爭うて名を爭はず、半江日落つ漁村の外、寺數峯を隔つ鐘一聲。

歸帆、晴嵐、夕照、晚鐘。

山水の圖に題す　二首

人は柴門に倚つて月を期するや不や、斜陽落ちんと欲す釣魚の舟、西湖は十景瀟湘は八、紅樹蘆花一色の秋。

青箬綠簑張志和、斜風細雨十年過ぐ、山中好しと雖も月無かる可し、江湖詩景の多きに較ぶること莫れ。

竹間雨雀の圖に題す

竹間の雨雀㋚呂か劉か、爲に商山の羽㋛狄を借らんや不や、四海の英雄鴻鵠の志、大謀豈に稻粱の秋に在らん。

扇面の圖　三首

㋙孟嘗君、虎狼の秦を遁るゝとき函谷關を通らんとす、客の鷄鳴を能くするものありて良く之れを脫するを得たりと。

㋚蕭湘の八景、指呼の裡にあり、蓋し詩の詩ならんか。

㋚漢の高祖は劉氏、后は呂氏、遠謀あれども、劉氏を安んぜず、呂氏を安んずるの策なとろ。

㋛翼の古文なり。

天に先つて物有り之れを梅と謂ふ、畫師に憑り仗つて貢つて始めて開く、橋上の杜鵑枝上の雀、一編の㋕心易百花の魁。

花は趙昌に到つて眞に逼ると雖も、華光の墨も亦精神ならす、珍禽枝上吾れに向つて語る、今古梅を知る只だ一人。

海外遠く移る安石榴、花を開き實を結ぶ夏還た秋、辛酸寒苦備に嘗め得たり、眼は神農の一舌頭に在り。

墨芙蓉に題す

芙蓉寂莫たり水の濱、淡く㋙蛾眉を掃ふ冷㋚太眞、地に在つては枝を連ねんとは總べて虛語、秋風紅脆し㋛馬嵬の塵。

東坡が畫竹に題す

一竿也た足れり此の風枝、翠袖の佳人瀟洒の姿、坡老胸中三斗の墨、湘江の雨と作つて吹くに禁へず。

畫梅に題す

顏色馨香誰か眞を寫す、世に馬を相する㋟九方甄なし、詩僧若し花の來處を問はゞ、太極の光陰春を記せず。

㋕宋の邵堯夫、梅花心易を作る、後世の賣卜者等の大いによるこぶところとなる。
㋙美人の眉にたとふ。
㋚楊貴妃名は太眞、玄宗の后なり。
㋛驛名、安祿山の亂に、唐の玄宗の后楊貴妃、馬嵬驛にて殺さるとある、是れなり。
㋟藝文類集に、九方皐は良く馬を相するもの、伯樂の儔なり」と、列子に「九方皐能く馬を相す、秦の穆公之をして馬を求めしむ」と、蓋し之れならんか。

雞冠花の圖

頸は絳羅を帶び頭は冠を戴く、木雞鬪ひ倚る玉欄干、花中縱ひ孟嘗の客有るも、白雲の關を透ること千古難し。

海棠雙禽の圖

妍を鬪はしむ唐室幾千紅ぞ、寵は海棠春睡の中に在り、㋠李杜相雙ぶ二鳥の如し、君が爲に戯弄る落花の風。

黃蓮青雀の圖

漢苑の春風王母遲し、卻つて疑ふ青雀偶歸り來るかと、蟠桃未だ實らす三千歲、暫く黃花に倚つて一枝を借る。

扇面　畫かず

好箇の畫師此に到つて休す、紅粉を塗らず自ら風流、分明なり紙上の西來意、雪裡の芭蕉笑つて點頭す。

㋠李白、杜甫の詩をいふか。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之一　終

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之二

遠孫比丘衆等重編

像贊

出山釋迦像贊　二首

西竺の老沙門、寃に報ずるに卻つて恩を以てす。花を獻ずれば春手に在り、水を洒げば月に痕無し。香南雪北、路頭を失卻す、相隨來也、箇の老比丘。

文殊贊

獅子窟を把つて、活伽藍と作す。多少衆と問へば、㋑前三後三。

達磨贊

流蓬直指、落葉單傳、大唐國裡、將に謂へり禪無しと。徒らに柴米を費して、面壁九年。咦。吾が祖來也、月青天に在り。

問訊す梅か又杏か、九年面壁是れ拈華、一時に趕ひ出して棒を行ずべきに、魏主梁王作家に非ず。

㋑又「前三三、後三三」ともいふ、前後彼此相等しきをいふ、又無量、無數の意に用ふ。

同　半身

兀坐九年の春、花を拈ず開達磨、昔日㋺梁王に對す、驀面に何ぞ唾せざる。六宗受降と叫ぶ、葛藤㋩椿を蹈倒す。到る處人の冐ふ無し、空しく過ぐ龍慶江。足三國に跨り、眼㋥五天を貫く。東走西走、衣破れ履穿つ。

面壁九年、圄繢の裏に墮す、若し禪を會すと道はゞ、西天萬里。（この贊は足利義晴公の需により大永二年十月五日）

眼東震を看て、意西乾に在り、失卻了也、鼻孔半邊。

百丈贊

將に謂へり奇特、㋭大雄峯に坐すと、小叢林の漢、徒を匡し衆を立す。

臨濟贊

勢は沛公が先づ關に入るに似たり、吹毛盍ぞ老癡頑を斬らざる。言ふこと莫れ佛法多子無しと、黃檗山頭に棒を喫して還る。

四睡贊

四睡一覺、人虎已に分る。無底の籃兒、峨嵋の雪を盛る。蕉尾の苔蓉、五臺の雲を掃ふ。豐干饒舌、我が同群に非ず。咦。寥寥たる天地知音少なり、唯だ松風のみ有つて問くに耐へず。

㋺梁の武帝なり、達磨との聖諦第一義に關する商量は、古來叢林の逸傳として存す。
㋩椿は馬を繫ぐ杭なり。
㋥五天竺の略稱なり。
㋭百丈山の別稱なり。

㊀ 布袋賛

二童笑裡に春を藏すに似たり、梅里の分身總に未だ眞ならず。布袋頭に向つて空しく打失す、長汀風月自家の珍。

神農賛

民を救ひ國を醫す世に逢ふこと難し、鹿皮衣を著けて聖容を顯す、大地都盧禪本草、舌頭に眼を具す只だ神農。

㊁ 鍾馗賛

終南の進士、闕北の忠臣、桂を攀ぢずと雖も、以て蘋を薦む可し。三尺の寶劍、四海の風塵、㊂李唐の主を輔けて、㊃楊太眞が爲にす。瘧鬼を驅逐し、邪神を折伏す、于今千古、法を護し人を護す。花を移して蝶を兼ぬ、誰が家か春ならざらん。

㊄ 福祿壽を賛す　㊅ 雪舟の圖

曾て塵土に降る、南極の老人、北斗裡に向つて、長法身を藏す。福海底無し、壽山嶙峋、眉毛生也、珍重す萬春。　德雲比丘　㊆ 大休叟。

㊀明州奉化縣の人なり、自ら契比と號す、常に一布袋を荷ふ、時人、長汀子、又は布袋和尚と稱す、一文錢を乞ふ偶に二一鉢千家の飯、孤身萬里に游ぶ、青目人を見ることまれなり、道を問ふ白雲の頭。」梁の貞明三年丙子三月寂す。

㊁唐の武德中、舉に應じて第せず、階に觸れて死す、後、明皇畫寢して夢みらく、一小鬼玉笛を盜む、上叱す、大鬼あり、被帽藍袍角帶して、小鬼を捉へ、その目を刻き擘きて之を啖ふ、上問ふ、答へて曰く、臣は終南の進士なりと、舉に應じて第せず、階に觸れて死す、旨を奉じて拘帶を解ひて之れを葬る、誓つて天下虚耗の妖孽を除かんと。畫家吳道子に命じて之れを畫かしむと。

㊂玄宗皇帝は李姓なり、故にいふ。

㊃楊貴妃をさす、玄宗の后、名は太眞なり。

㊄さいはひと俳諧といのちながきをいふ。

㊅諱は等楊、備溪齋、米元山主人、楊智客、雲谷軒等の號稱あり、備中の寶福寺に入りて得度し、天性畫を好み習經を事とせず、涙痕を點じて畫ける鼠の話斯界に喧傳せらる、壯年相國寺洪德禪師に侍し、又鎌倉に赴き、建長寺玉隱永璵に從ふ、明に渡り、四明山に登り、天章山の第一座となる、明主勅して本朝田子の浦の圖を畫かしむ。歸朝して、周防の雲谷寺に住す、永正三年二

紅粉を塗らず面花の如し、有漏の笊籬無賴の査。龐老賺過す兒女子、啼を止むる紅葉貧家に滿つ。

㊆ 白居易を賛す

江南野梅在り、空劫以前に開く、卽心の雪を掃はず、自然に春到來す。

北野天神　二首

萬里飄然逐臣と成る、比來天地の一詩人、三千の風月吟じ盡さず、松老い梅飛ぶ北野の春。　駿州長谷川越前の守藤原輝貞の請。

㊇ 寛延の聖代菅原に降す、宰官の身を現す一普門、三千の好風月を吟取して、梅花枝上に乾坤を定む。

渡唐天神の像　八首

詩語禪に通じ歌は神を感ず、冠巾の和尚假か眞か、梅香直に透る㊈龍淵の室、花は扶桑に向つて春を漏泄す。

北野の君元北闕の臣、徑雲深き處全身を現す、三千の風月一衣鉢、梅花に分付して總に眞ならず。

寛延王佐の才を棄擲して、鯨波萬里舟ならずして來る、徑山文武の大爐

鞴、身形を煉り得て早く梅に到る。

徑雲吼破す一聲の雷、禪熟し來るか詩熟し來るか、北野春寒し舊廬の雪、身を終るまで臥龍梅と作る合きに。

龍淵窟裡龍鱗を得たり、北野君の家別に春を置く、萬古乾坤開闢の後、梅花の世界一詩人。

龍淵の室を扣いて東來と叫ぶ、吹起す爐中文武の灰、徑山三月の桂を攀折して、拈じて北野一枝の梅と成す。

青衫白髮老袈裟、夢に非ず眞に作家に參見す、徑山三月の桂を攀折して、等閒に拈じて小梅花と作す。

四萬三千首の錦囊、徑雲月に敲く一禪牀、是非梅花の夢に付すべきに、虛名を惹き得て大唐に滿つ。

今宮大明神を贊す

扶桑六十六州の中、神德昭昭たり此の宮を仰ぐ、法を護し人を護す威猛の力、滿山の松竹も亦仁風。

鄧林法兄の像贊

㊀南浦の末派、西源の的傳。叢規井井、㊁瓜瓞綿綿。店上に雪に阻てらるゝは則ち吾れと素有り、

㊂本光國師なり。

㊃龍溫居士の女なり、常に居士に隨つて竹漉蘇を作り、之れを鬻いで朝夕に供す、居士將に入滅せんとす、靈照をして出でて日の早晩を見、午に及んで以て報ぜしむ、女遽かに報じて曰く、日已に中す、而も蝕ありと、居士戶を出でゝ見る次いで、靈照父の坐に登つて合掌して坐亡すと。

㊄白樂天なり。

㊅寬平延喜、宇多天皇及び醍醐天皇の年號なり。

㊆徑山方丈の額なり。

㊇詩は紹明、建長寺の大應國師なり。

㊈瓞は小瓜なり。

簾前に紫を賜ふときは則ち御に對して玄を談ず。㊀兎角日月を跳起し、龜毛乾坤を呑卻す。新寶林に住して、只だ虛堂の八十を缺く。老黃檗を掌して、臨濟百千を屑しとせず。誰か知らん正法眼藏、這の㊁瞎驢邊に滅向することを。滅不滅、再び㊂鸞膠を把つて斷絃を續ぐ。寶林の諸徒、鄧林翁の遺像を繪いて予に就いて贊を需む。事拒む可きに非ず、聊か野語を贅して、寶林常住の供養に充つ。　大永三年、㊃林鐘吉辰、劣弟宗休燒香拜贊。

三綱見禪師の壽像　洞家の僧

大陽の皮履を袈裟に裹む、再び異苗をして毒牙を抽んでしむ、寶鏡臺前本來の面、依俙として相似たり趙昌が花。

前住光通仙裔鶴禪師の肖像

眼中の丁謂、紙上の張公。毒氣未だ除かず、蜀川の烏頭子を師とす。文字立せず、㊄熊峰の絳衣翁を祖とす。板を鳴し床を敲いて、法道を輝光し、鎚を拈じ拂を竪てゝ、宗風を振起す。㊅蘇老の全機を奪ふときは、則ち古帆挂けて、後黃河北に向ふ。羲皇の㊆艮卦を畫するときは、則ち雜華資つて始む。紅日東に昇る。咄。眞の面目を看んと要す麽。猶ほ梅花有り路

㊀兎角龜毛は、非有、假有の理を表す語、龜に毛髮なきも、垢つきて毛の如く見ゆ、兎に角なきも耳長くして角の如く見ゆ、共に似て無きものなればなり。

㊁臨濟滅時、三聖、慧然に印可して、「誰か知らん吾が正法眼藏、這の瞎驢邊に向つて滅却することを」といへるに出づ。

㊂能く相續して斷絕せざる意に須ひる語。韻府に、「漢の武帝、時に西海より膠を獻ず、帝の弦時に絕ゆ、膠を以て之れを續ぐに、弦の兩頭遂に相著く、終日射れども斷えず、帝大いに喜んで續弦膠と名

未だ通せず。

竹溪筠長老、先師の像を圖して、予に就いて賛を需む。口に信せて亂道す。　天文龍集癸卯林鐘日。

前住普門泰雲安禪師の像賛

斯の老慈顔醉うて霞に似たり、蘭溪の剩馥其の芽を出す。端無く❶三摩地に入得して、宴坐す春風小白花。　天文癸卯秋八月、靈雲庵裕宗休賛。

密傳座元賛

他は是れ有鄰の貽厥、自ら玉峯の密傳と稱す。曲彔木上を坐斷して、❸甲子を問へば米年と答ふ。靈蹤を蟠龍窟に記し、正宗を瞎驢邊に滅す。眞個滅か不滅か、夕陽は長く我が西に在り。

小師等、持德密傳繼禪師の壽像を繪いて以て賛を需む。口に信せて亂道すと云ふ。

前住長法、春谷杲公藏主寫照の賛

天源流を分ち、太虛響を接す。洋嶼の禪蚌蛤の如し、異代同名、虎丘の機の蔡蒐に似たり。大藏掌に在り萬岳千峯、折拄杖頭十洲三島。曲彔木上、佛法會せず、嶺南の❹盧能、徒らに墮樵を拾ふ。俗氣未だ除かず、巖中の幼輿、空しく遺像を留む。咦。歲暮れ天寒し、松柏綠長し。　大永元年臘月日。

攝州西江開基、雪窓最公首座の像賛

龍寶處を護して、大藏の波瀾を激揚す。狐古丘に首して、少林の皮髓を分張す。三皇に彷彿として同じからず、半月に依俙として相似たり。首座行道也た❷威音の劫初、首座說法也た牽陀宮裡。英氣凜凜として生けるが如し、玉音❼琅琅として耳に在り。寶積の松何の色をか作す、❼境を奪はず人を奪はず。雪窓の蘭其の芽を抽んづ。是の父有りて是の子有り、雙徑の雲を眇視し、西江の水を吸盡す。還つて會す麼。這箇、❸聲、咄。衆角多しと雖も一麟足れり矣。

西江の開基雪窓最公首座、二神足有り、曰く、怡溪、曰く、溫叔。工に命じて師の像を繪いて、予に寄せて以て賛を需む。　大永甲申臘月吉辰。

季友契公首座の壽像

鏡谷の遺響、百里震驚す、❹龍津龍子、頭角❺崢嶸。五逆の子孫、電卷き雷走る。一喝賓主、雲起り風生ず。咦。❼黑漫漫地、慧日永く明かなり。

大藏の中興開基、華屋宗英首座大師の像賛

❷過去莊嚴劫に於ける最初の佛を威音王佛といふ、故に父母未生前、天地未開以前と同じく、過去際を表す語なり。
❼音の清み渡るを云ふ。
❼臨濟の四料簡、人境俱不奪は其の一なり。
❸聲はものを指す語なり。
❹龍生龍子に同じ、この父あり此の子ありなどに同じ。
❺高くけはしき形、金石崢嶸などと熟語す、頭角の超越して居るをいふ。
❼一面の暗黑といふが如し。

く。」風鱗より之れを製す、故に又此の名あり。
❸十二律の内、六月の律に當る故に六月の異名。
❹達磨をいふ。
❻巖頭全奯禪師なり。
❺八卦の一なり、一陰二陽の卦なり。
❶三昧に同じ。
❸年齡を問ふなり、一甲子は六十なり。
❷蔡蒐、虎のことなり。
❹大鑑慧能禪師なり。

大巌の金翅、直に獰龍を取る。九萬里の風に搏つては則ち禪源の派を接す。三千刹界を動しては則ち洋嶼の宗を探る。㋐尼總持の皮肉を脱す。明皎皎白的的、一法の所印、大愛道の遺蹤を躡む。鐵壁線路を通じ、須彌鍼鋒に跳る。眞相を看んと要す麽、花影月重重。

聖壽開基天慶祐大師壽像の賛

混沌眉を畫く、春山青く兮春水綠なり。燈籠合掌す、江月照し兮松風吹く。相逢ふて識らず、借問す是れ誰ぞ。人の頭を取り人の腰を取る。子湖の犬、㋑劉鐵磨を嗾む、吾が皮を得たり吾が肉を得たり。少林の狐、尼總持を誑かす、生涯只だ三事衲有り、聖壽以て萬年の基を固うす。收。

天慶大師頃ろ工をして壽像を繪かしめて賛語を老拙に需む。拙辭して曰く、「汝の德は大にして而して吾が才は短し矣。何ぞ江湖の名宿に投じ、其の名を衒ひ其の德を遺さゞる乎哉。」尼曰く、「大手筆無きにあらず、蓋し直指の才、單傳の器、難い哉。請ふ一二を叙して、以て無窮に垂れば足らん矣。」一言肝に銘す、再辭するに及ばず。舷を執つて其の上に贅すと云ふ。

永正十四仲春上澣日。

㋐逢磨大師の法嗣、梁の武帝の女にして、初め始祖に事へて弟子となり、道を悟り滅を示す、即ち逢磨の肉を得たるの人なり。

㋑潙山下の老尼、總貫を詳にせず、得法の後、機鋒峻嶮、當時の禪客と往來して、盛に宗旨を商量す。

四海九州唯だ一翁、茶經を傳ふる外新功を得たり。前丁後蔡春宵の夢、吹き醒す桃花扇底の風。

前の左㋒金吾、額田耕雲咲夫居士の像賛

紙上の張公子、袖中の㋓邵堯夫、漢室に輔弼として、洛都に優游す。蚤に左京兆に侍し、晩に左金吾に除す。衰衰たる源流、恭しく惟れば、出自を同じくす。草草たる居士、更に赤鬚胡有り。林際の寶劍を握住し、天澤の衣盂を劈破す。雛道者を笑ひ、贋㋔浮屠を罵る、綠蕪霜寒し。或時は兎を獵して一棚の㋕鶻を臂にす、㋖烏帽塵暗し。或時は狗を追ふて十影の駒に鞭つ、夕陽を送り素月を迎ふ。瓊筵を開いて花衢に坐す、孟津に次りて而して密謀す。八百人期せずして會す、淀河に臨んで而して戰死す。三千の卒前驅と爲る、惜しい哉名父子、遺恨吳を呑むことを失す。顏色猶ほ舊に依る、墨梅の圖と作す莫れ。永正十三霜季秋上澣日。

前の賀州の太守仁翁舜法禪定門畫像の賛

月を繪く者は光を繪かず、精神掬す可し。樹を種うる者は德を種うるが如し、靈壽根を深うす。㋗菟裘を江左に卜し、牡丹を洛園に賞す。喜んで兵書を讀んで、龍韜虎略の術を諳んず。勤めて王庫を知して、狗偷鼠竊の

㋒金吾は武官の名なり。

㋓邵雍、字は堯夫、宋の河南の人なり、學を爲す堅苦刻厲、寒けれども爐せず、暑けれども扇せず、德氣粹然、群居燕飲、笑語終日、人の善を言ふを好み、未だ嘗て人の惡に及ばず、神宗の熙寧十年卒す、年六十七、元祐中謚節と諡す、即ち百源學派の祖なり。

㋔浮圖とも書く、佛陀(Buddha)の訛なり、佛、佛寺、卒都婆等を指すことあり、此の所は僧侶を意味す。

㋕はやぶさ、くまたかをいふ。

㋖黑き帽子、又我國にてえぼうしともいふ。

㋗巻の都。左傳に「隱公曰く、菟

寃を禦ぐ。文武の道未だ墜ちず、典刑今尙ほ存す。竹椅蒲團坐禪、曾て爍可の迹を師とす。蓮漏香火念佛、晩に遠持の門を候ふ。積善の家餘慶在り、厥の子有り厥の孫あり。(鼠竊を一に鼠盜に作り、香火を一に香花に作る。)

右立入氏前の賀州太守仁翁舜法禪定門の肖像、孝子、老拙に就いて賛を求む。拒辭するに及ばず、口に信せて劔道す。　永正庚辰小春日。

徳雲院前の刑部通叟宗普大居士肖像の賛

一王一姓、六十六州、高く矢田の前蹤を躡んで、新に劔履を賜ふ。故より義家の後裔と稱す、丕いに㊂箕裘を纘く。誠なる哉千兵は得易し、眷みるに夫れ一人尤を拔く。㊃桃李園中群臣を宴して、而して月に醉ひ、梧桐名上刑官に處して、以て秋を司る。靈鷲の席を退いて釋を罵り、呼鷹臺に登つて劉に依る。玉笛高樓、如今枕上に閒夢無し。㊄錦繡閭里、少日才華貴遊に接す。其の和也靄靄然として、春の大地に行るが如し、其の量や浩浩乎として海の細流を納るゝに似たり。活處に機を投ず、將に謂へり、㊆丹霞居士元來德雲比丘、還つて參得す麼。收。

右德雲院殿前の刑部通叟宗普大居士は、乃ち遠州太守勝益の第三骨にして、而して叔父一雲叟の

㊂父祖の業を云ふ、禮記の學記に曰く、「良冶の子は必らず裘を作ることを學び、良弓の子は必らず箕を爲ることを學ぶ」と。

㊃李太白桃李園に宴する序に曰く、「瓊筵を開いて以て花に坐し、羽觴を飛して月に醉ふ云云」と。

㊄錦繡閭里。錦を着て故郷に歸るなり。

㊆丹霞、居士。丹霞子淳と龐居士となり。

裘に營ましむ、吾將に老せんとす」とあり、よりて後人致仕して隱居する所の稱とす、蘇軾の詩に「一林叢竹吾蒐裘」と。

猶子なり。壯歲藝に遊び仁に據る。謂つ可し亂代の英雄なりと。春秋三十八上、不幸にして逝す矣。山崩梁壞の歎無き克はず、仍つて孝子國慶、工に命じて像を圖し費を需む。費して以て遠大を祝すと云ふ。　大永第四三月二十有六日、前正法山大休叟龍安の室に書す。

牡丹花夢庵居士の像（肖稲の法號）

洛社の耆英、恭しく惟れば、本姓は久我に出づ。天曆の貴種、矧んや亦中院の先君たるを乎。㊇五濁、鳥曇鉢を現ず、三昧、膕浮圖を笑ふ。或時は藥草を採つて、仙窟を窺ひ、或時は芝詔を拜して帝都に朝す。㊈古今一千首を諷して、而して周詩に擬す。律、雅頌に合す、㊉源氏六十卷を講じて、而して台敎に配す。味醍醐に同じ、餘情を花鳥に託し、歸與を蓴鱸に催す。和歌、連歌、神を感じ鬼を感ず。內典外典、佛を學び儒を學ぶ。手裡の團扇千億の放翁、飄飄たる風襟月臆、頭上の長帽七世の坡老、蕭蕭たり雪鬢霜鬚、行李俗ならず、梧に隱つて吾れを忘る。偉なる哉、香孩兒の猪に屬するが如し。其の群を出で其の萃を拔く。翛然たり㊋漆園叟の蝶と化するに似たり。在るときは則ち人、忘ずれば則ち書、淸也淸也、還つて眞の形模を看んと要す麼。夢、庵に非ず、庵、夢に非ず、牡丹花春一株。咄。

㊇五濁。一には劫濁とて、天災、疫病など絶えず起りて時節の惡しくなれるを、二には見濁とて衆生惡見を逞しうして是を非とし、非を是とする等、顚倒の見解盛なること、三には煩惱濁とて、衆生が貪欲、瞋恚、愚痴等の三毒煩惱の興盛となること、四には衆生濁とて、衆生果報漸く衰へ、身體羸弱、精神痴鈍となれること、五には命濁とて、衆生の命根順次に短夭となれることゝ、かゝる世を又五濁惡世といふ。

花園の主大休叟、香を燒いて贊して、以て等淸禪者の需を梗く。　大
永㋑龍集戊子孟夏四葉。

一元院殿先天宗普居士の像贊

㋺溫公は宋地の大醫王、仁德民を育し國を治す。㋩眞卿は唐朝の一元老、才名古に輝き今に騰る。將に謂へり、蠶桃俗李と。由來甘草人參、父子家を興す、攝の刺史を領す。既に累代に及ぶ、君臣義を重んず、源京兆に奉じて、屢寸陰を惜む。衆星の韓斗、久旱の傅霖、薛嵩が業を繼いで、而して蹴鞠場を擅にす。牛梅牛泥牛雪、雅經の流を學んで而して和歌の道に通ず。一觴一咏一吟、其の詞語を華にすと雖も、胸襟に芥とせず。平蕪霜寒し、鷹を呼んで臺に登る、雁影陣陣たり。長楸日落つ、犬を追ふて鏑を鳴す、馬蹄駸駸たり。㋻政を禹謨舜典に考へ、武を齊鍔周鐔に試む。㋼黃石が一卷の書を傳へて、冠を以て履に苴く。碧巖百則の話に參じて、鐵を點じて金と成す。瞿曇を活喫して、㋽鱸の鱠炙の如し。彌勒を生呑して、鵝の㋾湯燖に似たり。言言也た褒也た貶、著著縱有り擒有り。機に當つては㋿毘耶居士の牀を倒す。㋿默處雷走る、手に信せて㋿鹽官國師の扇を拈す、意氣風凜たり。乾坤の內獨步と稱す、宇宙の間知音を絕す。笑ふに堪へたり化鵬の㋷蒙莊、扶搖萬里垂天の翼を折く。臥龍の諸葛と成る合きに、遺恨千載呑吳の心を失す。流水東に去り、殘月西に沈む。咦。㋿將相王侯豈に種無からん。枝枝葉葉皆檀林。

藥師寺國長公、先考一元院殿先天宗普居士の像を畫いて贊を需む。筆に任せて厥の大略を記すと云ふ。　享祿初元戊子菊月日、
正法山主大休叟。

越州の太守藤原朝臣松井雲江守慶居士の壽像贊　此の像贊、丹波桑田郡金剛山龍潭寺に在り。

㋿木公冬に榮ゆ、斯の郎能く晩節を持す。藤氏日に譽ふ、其の祖曾て朝權を執る。名四海に

㋑古今云々。古今集は延喜五年、紀貫之、紀友則、凡河內躬恒、壬生忠岑の四人勅を奉じて撰したる和歌集なり。
㋺源氏六十卷は、紫式部の作にかゝる源氏物語たいふ。
㋩漆園の叟。莊周、周の蒙の人、嘗て漆園の吏となる、故に謂ふ、其の著莊子蝴蝶篇に曰く、「昔莊周夢に蝴蝶となる、栩々然として蝴蝶なり、愉びて意に適ふ、周たるを知らざるなり、俄然として覺むれば則ち蘧々然として周なり云云」とあり。夢庵の夢字を點出するなり。
㋻龍集。龍は星の名、此の星年に一次周行す、集は次なり、歲次などに同じく年號の下に記する語なり。
㋼司馬光。司馬君實、宋の仁宗に仕へ、諫院に知たり、後累官して宰相に至る、太師溫國公を贈り、文正と謚す、著す所資治通鑑の外、文集八十卷等あり。
㋽眞卿。顏眞卿、師古五世の從孫、杲卿の從弟なり、少にして博學辭章に工なり、官太子の太師に至り、魯郡公に封ぜらる、書道を以て普く知らる。
㋾政を云々。禹謨、舜典は書經の內容を分ちたるものなり。
㋿黃石。張良少時下邳圯上に游び、一老翁に逢ひ、一卷の書を受く、曰く、之れを讀まば帝者の師たるべしと、異日、濟北穀城山下の黃石に見えしに、先の老翁は卽ち吾れなりと、具に其の書を見るに、乃ち太公の兵法なりと。
㋿隋唐佳話に「松江の鱸、所謂東南の佳味」と。
㋿湯燖、湯にて煮るなり、其の美味を食ふが如きをいふ。
㋿毘耶居士。維摩居士なり。
㋿默處雷走。卽ち維摩の一默雷の如しとあるより出づ。
㋿鹽官國師。鹽官は地によつて得たる名、齊安禪師なり、馬祖道一禪師の法嗣。
㋿扇を拈す。齊安と侍者との問答商量なり。鹽官一日侍者を喚んで我がために扇を過し來れ、者曰く、扇子破れぬ、官曰く、扇子既に破れなば、我れに犀牛兒を還し來れ、者到ふるなし、資福一圓相を畫いて中に一の牛字を書すと。扇子は圓形にして展疊自在法界一圓の樣子、鹽官手許にある一物を借りて、侍者の伎倆を驗す、犀中の扇子を持ち來れの語に對して、侍者は破れぬといふ、其だ力量あるが如し、次ぎに犀牛兒を還し來れに於いて一語の對ふる能はず、傍觀せる資福如實、空卽

喧しく、德㋕八埏に溢る。右㋖典厩源家に奉じては、則ち幕下の諸將を指麾す。前太守越國に任じては、則ち旁く野外の㋗遺賢を求む。進退禮を以てし、忠孝兼ね全し。世の騷亂に罹つて、而して蹤淡路に迷ふ。時の嘉運に遇ふて、而して生きて太田に還る。錦繡閭里を照し、旌旗山川を領す。加之、洋嶼の風を慕ひ、衣盂三拜し、龍潭の室に入りて、紙燈再び然す。㋙百八の摩尼、佛祖を轉回し、一條の白棒、乾坤を打定す。杜遞飄然たる孤僧、早く塵事を謝す。李源元來信士、未だ俗緣を盡さず。葛洪井畔秋老い、丹陽廓裡雲連る。咦。箕裘の業を續いで、子孫萬年。

前妙心現居龍潭大休叟贊。

皆享祿三祀龍集庚寅夏五吉辰、

平氏松田古巖宗松居士の像贊

㋚葛原の王子王孫、枝を引き蔓を牽く。松田の㋛難兄難弟、蔕を竝べ根を同じうす。文武の道を傳へ、忠孝の門に出づ。㋝五員を鴟皮に裹み、浙潮八月怒を發す。㋞靈均を魚腹に投じ、湘水五日魂を招く。腰間の劍霜雪を照し、手裡の扇乾坤を握る。噫。

享祿辛卯臘月日。

雲岫昌慶禪定門肖像の贊

是色、色卽是空の當體を現ず。卽ち此の消息を語るもの也。

㋙蒙莊。莊周を云ふ、蒙縣の人なる故にいふ、著書莊子逍遙游に、「鳥あり、其の名を鵬となす、背は泰山の若く翼は垂天の雲の若し、扶搖して摶ち羊角して上るもの九萬里、雲氣を絶ち、青天を負ひ、然して後に南を圖る、且に南冥に適かんとするなり」と。

㋚將相云々。史記の陳涉世家に、「肚土死せざれば卽ち已まん、死せば卽ち大名か擧げんのみ、王侯將相寧ぞ種有らんや」と之れを反語せしなり。

㋛松なり、晩節を持するに對す。

㋜八埏は地の極まる所、淮南子に「九州の外に八埏あり」と、又八殥に作る。

㋝典厩。馬寮の頭の唐名なり。

㋞賢者の用ひられずして林澤に

前の河州大守庄所重信公は、平氏芥河の華族、累代の武閥なり。去歲辛卯五月二十一日、造化の小兒に觸れて而して逝す矣。春秋四十七、齡未だ知命に及ばず、烏虖、惜しむべき哉。公存する日、洞家の僧之れに諱して昌慶と曰ふ、沒後余之れに字して雲岫と曰ふ焉。今茲に家嗣厥の像を繪いて、贊辭を圖上に需む。峻拒する克はず、卒に村偈一章を賦して以て其の請を塞ぐ。寔に享祿五祀壬辰夏五初吉なり。

葛原の奕葉正盛の孫、曾て玉門を出でゝ武門に列る、積善の餘慶猶ほ盡きず、一張の弓は挂く搏桑の曦。

石雲庵主太玄宗白居士壽像の贊

後生揚子雲有り、玄尙ほ白しと嘲らる。本姓は藤原氏たり、紫の朱を奪ふを惡む。雪を烹氷を敲く、茶烟半榻。花に酌み月に醉ふ、松醪一壺、㋟蓮社の十八賢を追慕して、大念佛小念佛、蒲團六七箇を坐破す。死工夫活工夫、其の右也日本の扇を拈じ、其の左也水晶の珠を轉ず。俗にして而して髮無し、僧にして而して鬚有り、僧に非ず俗に非ず、是れ甚の形模ぞ。吾が道一以て之れを貫く。參乎參乎。

あるないふ。

㋙百八の摩尼、摩尼寶珠の略、無垢、離垢、如意珠などと譯す、寶珠の名、龍王の腦中より出で、衣服、財寶、飲食等を生出するが故に如意珠といふ。或は帝釋の持てる金剛にして阿修羅と戰ふ時、碎けて閻浮提に落ち、變じて珠となれるものといひ、或は又過去久遠佛の舍利にして、其の佛の法既に盡きぬれば、變じて此の珠になるといへり。而して此處にては百八より成れる珠數のことをいふ。

㋚葛原、平氏は桓武天皇の皇子葛原親王の裔なり故にいふ。

㋛難兄難弟。兄たり難く弟たり難きをいふ。

㋝五員。五子胥、父兄楚の平王に殺さる、員吳に奔り、吳を導き楚を伐つ、遂に平王の尸を出して之れを鞭つ、後吳王

嗣子石黒詮尚、老父の壽像を繪いて賛を需む。厥の孝志を感じて拒む
こと克はず。書して以て行實と爲す。

越州の太守源朝臣額田西河宗昭居士の像賛

額田某、其の父宗昭の壽像を圖して、賛詞を予に需む。曰く、「某が祖父、世世越の中に家す、國の㋓騷屑に曁んで洛に入る。幾も無く屋を鳩嶺の麓に儆す、而して居ること年有り矣。㋔丙丁の灾に罹つて、家譜燒失す矣。再び洛に入り、右京兆勝元公に侍す。公の藥師寺元長に命じて、攝州の刺史を領ずるに及んで、父宗昭をして之れを輔佐せしむ。爾より以來、堅を蒙り鋭を執り、㋕百戰百勝、其の功亦大なり」と。予も亦宗昭と㋖方外の交有り、聊か小偈を摛つて其の請を塞ぐ

と云ふ。

合に麒麟殿閣の中に在るべきに、賢太守を佐けて忠功を立つ。化身千百億の春色、何事ぞ梅花放翁を畫く。

土岐樗月道珊居士壽像の賛

文王は是れ仁義の釋迦、岐下鳳を栖ましむ。儒童は彼の菩薩の孔子、㋗

夫差を諫めて從はれず、大宰嚭之れを讒す、王乃ち鴟夷の皮を以てし、之れを江中に浮ぶと。

㋒靈均、屈原の字なり、離騷經に曰く、「余に賜ふに嘉命を以てす、余に名づけて正則といひ、余に字して靈均といふ」と。魚腹に投ずは沙を懷いて湘水に沈むをいふ、即ち五月五日なり、楚人之れを哀みて此に日に至るごとに、竹筒に米を入れ、水に投じて之れを祭るといふ。

㋗運社十八賢。慧遠法師は支那東晉の人、道安に師事し、二十四歳より講説に從事し、五十一歳、關中の亂を避けて、襄陽より廬山に入り、池を穿ちて白蓮を植ゑ、同信の僧俗とともに、專心念佛を修し、白蓮社と稱し、社中百二三十

周末麟を獲たり。將に謂へり第一聖諦と、直に得たり百億化身。洞山五位の旗を竪つるときは、則ち氣魔壘を劇る、般陀八正の彗を拋つときは、則ち胸俗塵を拂ふ。藝文武を兼ね、道君臣に合す。繡戸花に映ず。或時は㋙魯論を講じて名鄉黨に光れり。珠簾雪に捲く。或時は和歌を詠じて德鬼神を感ず。唐書東夷の國を載せ、建茶北焙の春を試む。㋚夷吾を方袍に被らしむ、錯を將つて錯に就く。放翁を團扇に畫く、眞に逼つて眞ならず。水尾濫觴、源流袞袞として竭くる無し。圯上に履を進む、家聲日日維れ新なり。之れを㋛留侯の菊に譬ふ、祝するに蒙莊が椿を以てす。咦。補衮調羹の手、正法輪を撥轉す。

右常陽信太莊江戸崎の城主、姓は源、世稱土岐治賴、字は樗月、諱は道珊庵主、自ら壽像を繪いて遠く寄せて賛を予に需む。予耄せり矣、固辭すれども允さず、仍つて俚語を摛つて以て公の實錄と爲す。

三友院殿前の右京兆松岳桓公大居士の賛（三友院殿は細川高國なり政元の養嗣子年四十八自刄）

川黨の領袖、源家の棟梁、文武の才を具して、多田滿仲に㋜藍氷たり。騎射の妙を傳へて、八幡太郎に權輿す。東西馬を馳せ鏑を鳴し、左右に犬

人、何れも當代の名士名僧たり。就中慧遠、慧永、慧時、道生、曇順、僧叡、曇恒、道闡、曇諦、道敬、覺明、劉程之、張野、月續之、張全、宗炳、謝靈運、雷次宗等は十八賢と稱せられたり。

㋙騷屑。風の音なり、劉向の賦に「風騷屑以て木を搖す」と、國の騷動をいふ。

㋚丙丁の灾。火災をいふ。

㋛方外。道の外、孔子曰く「莊子は方外に游ぶものなり」と。

㋜周末云々。孔子春秋を著し、「哀公十四年春、西の狩に麟を獲」といふ句にて筆をとゞめられたり。

㋝魯論。論語のことなり。

㋞夷吾。管仲なり、齊の桓公を佐く。

㋟留侯。張良なり。

㋠藍氷。藍より出でて藍より寒

を追ふて墻に逼らしむ。宰相古再び溫公を得たり、雲山觀を改む。京兆今十韓愈を合す、星斗光を增す。或時は耆英を洛社に會し、或時は義兵を晉陽に起す。本朝の風を移すときは、則ち歌を詠じて難波の什を學ぶ。上㊀巳の景を餘すときは、則ち詩を賦して曲水の觴を飛す。名四海に喧しく、威十方に振ふ。窓を照す螢囊、精を研き思を覃ぼして、藝術の圃を窺ふ。空に翔る鳧舄、鞠を蹴り腿を練つて、遊戲の場を擅にす。松を以てし、竹を以てし、梅を以てす。之れを三友院と膀す。蘭有り蓮有り菊あり、之れを四愛堂に擬す。加之、聖に在りては聖に同じ、凡に在りては凡に同す。腳下一條の紅線、佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す。掌內三尺の金剛、燕寢水枕戟森たり。龍安の夜話牀を連ぬ。人品高い哉、光風霽月、意氣凜乎たり、烈日秋霜。嘆。花を繪く者は其の香を繪かず。

天文龍集癸卯林鐘八蓂、前妙心大休叟宗休書。(大休叟宗休書を一に大休叟宗休禁香贊に作る。)

西月慶照信女の壽像

紫羅帳裡に衣珠を繫く、百陋恰も㊁一妹に逢ふが如し、濃抹淡粧限り無き意、丹青只だ合に西湖を畫くべし。

坂井備前守香林宗遠の像

く、水よりいでて水より冷かなること。

㊀上巳の景。王羲之、會稽山陰に蘭亭を作る、三月上巳之れに會して、曲水の宴を催し、序を作る、人口に膾炙す。

㊁一妹。一人の美人なり。

此の郎の勳閥敢て誰か論せん、古より忠臣孝門に出づ、只だ㊂劉を安んずる一周勃のみ有りて、㊃秋霜三尺乾坤を定む。

是雲宗拂の像

高屋氏諱は宗拂、字は是雲、世〻積德の門たり。形俗に處すと雖も、頗る塵表の物なり。天文庚子夏五初一日、造化の小兒に觸れて、溘然として逝く矣。孝子追悼に堪へず、畫師に命じて寫照す、滿面の霜凜凜として生けるが如し。一日、一僧に紹介して肖像に贊せんことを求む。吁、予の感ずる所の者は孝なり、其の志擲つ可けんや、叨に一偈を題すと云ふ。

名は高し屋裡の主人公、五十一年春一夢、鼓を打つて看來れば都べて不會、雲雷吼裂す太虛空。

蘭庭常秀の像

山田氏蘭庭常秀道人は、予が入室の參徒なり。蓋し天衣の下に秀鐵面有るが如きなり。不幸にして逝す矣。嗣子彌太郎、工に命じて其の像を圖す、一日持ち來りて贅語を予に需む。之れを展ぶれば、凜乎として餘勇生けるが如し、感無きこと克はず。仍ち偈を作り請を塞ぐと云ふ。

㊂劉云々。漢の高祖は劉氏、后は呂氏なり。周勃、高祖に事へ、戰功多し、高祖崩じて呂氏の蔓るを憂へ、呂后崩ずるに及び陳平と計り、諸呂を誅して代王を迎へて位に卽かしむ、是れを文帝とす。

㊃秋霜三尺。劍なり、漢の高祖、三尺の劍を提げて天下を平定すとあるより出づ。

弓は強を挽き兮矢は長を用ふ、吾が法社を護して金湯と作す、曹溪鏡裡本來の面、花に清香有り月に光有り。

天文十三甲辰八月日。

自賛

百億の須彌條拄杖、三千刹界小袈裟、無法を將つて大龜氏に付す、梅里の下生春花に在り。

山偈を賦して愉龜年に付す。大永癸未林鐘初吉、正法當住大休叟。

這の無明禿、㋑悪顒皤腹、㋺脩吭矮身。達磨の華を拈じて、錯を將つて錯に就く。靈山の月を畫いて、眞に逼つて眞に非ず。苔帚自家の雪を掃ひ、袈裟御園の春を帶ぶ。瞎漆桶、笑㋩閭閭たり。誰か道ふ蓋苴の勤巴子と、從來蓬髪の休上人。咄。

享祿庚寅林鐘吉辰、元從座元の爲に、花園宗休贊す。

蛇を畫いて足を添ふ竹篦子、電を種ゑて根を尋ぬ木面翁。若し是れ機に當つて正令を行せば、韶陽臨濟落花の風。　右韶首座の請。

我れに定相無し、惡を逐ひ邪に隨ふ。㊁金伽梨を著けて、佛界に入り魔界に入る。黑豆の法を用ひて、主家と作り賓家と作る。人天の眼を瞎して、暗に塵沙を撒す。自ら威獰を逞しうす。門に當る一

㋑悪顒皤腹。愚頑便々たる腹をいふ。皤は腹の大なるありさま、又腹下の白き所をいふ。

㋺脩吭。吭はのど、又はのどぶえにて、頸の長きをいふ。

㋩和き敬む貌、中正の貌、論語に「上大夫と言へば闇々如たり」と。

㊁金伽梨。伽伽梨衣なり、三品九種の袈裟の總稱なり。

隻の艾虎、誰か毒氣に觸る。室に據る三尺の筠蛇、西源の派脈を續ぎ、東海の津涯を窮む。咦。臨濟の樹を扶起して、春風又花を發く。

天文八稔龍集己亥三月初吉、松源十三世花園大休叟宗休、玄津首座の請に應じ、靈雲丈室に書す。

三十年胡亂、元來掠虛頭、喚んで馬と作すときは則ち馬、喚んで牛と作すときは則ち牛。錯錯、靈雲を見んと要す麼、桃花水を逐ふて流る。

太原座元、予が㋓幻質を繪いて贊を求む、筆に任せて其の上に贊す。

天文龍集乙巳夏五、花園に住する大休叟書す。

吾が扶桑國、佛日再び㋒暾す。白拈の臨濟を捉敗し、㋔黑頭の松源を罵倒す。咦。唯だ一喝を餘して、五逆雷奔す。

暾首座の請に因る、大休叟自贊、天文乙巳夏五㋕念八。

此の像贊は參州渥美郡長松山太平寺に在り。

龍にして而して頭上に角無く、蛇にして而して眼裡に筋有り。朝に西源の水を吸盡し、暮に南浦の雲を吐出す。其の名を聞かんより見んには如かず、其の面を見んより聞かんには如かず。一髮より重く、千斤より輕し。囫囵。拈じ來つて天下、人に與へて看せしむ。拄杖花を開いて春十分。

㋓幻質。肖像を云ふ。
㋒暾。旭日なり、朝日の出づるが如く輝きそむるを云ふ。
㋔黑頭。俗に云ふ頭の黑き鼠と謂ふが如き意、白拈に對するなり。
㋕念八。二十八日をいふ。兼明書に曰く、「吳王の女、名二十、而して江南の人二十を呼んで念と爲す、故に北人は避けず」と。

胸中の五逆藏す能はず、我れを阿鼻熱鐵の牀に坐せしむ。臨濟の兒孫普天の下、唯だ一喝を餘して商量せんことを要す。

祖台首座、予が幻質を繪いて贊を求む。偈を作りて以て其の請を塞ぐと云ふ。　天文丙午八月初吉、前妙心大休叟宗休書す。

道號頌上

石庵　韶首座

㋑雲根を坐斷す老衲衣、半巖の春雨禪扉を掩ふ、銀山鐵壁迸開し了る、百鳥花を銜んで別處に飛ぶ。

月航　津首座

江水秋を涵して玉兎輝く、孤帆高く挂く截流の機、廣寒八萬四千の戶、一葉舟中に稠み載せて歸る。

東庵　宗暾首座

吠瑠璃界一㋺封疆、孤峯を坐斷して牀を下らず、佛日再び暾す明歷歷、眼頭高く挂けて扶桑に在り。

天庵　祖台首座

㋩月斧雲斤法梁を架す、乾坤を把つて一封疆と作す、大機大用大人の境、坐斷す普賢三昧の牀。

梅意　宗雲

萬里西來の閒達磨、門前の湖水波瀾を起す、㋥暗香疎影黃昏の後、月は天心に在り君自ら看よ。

㋑雲根。石なり。
㋺封疆。國境なり。
㋩月斧雲斤。天宇によりて工巧するなり。
㋥暗香疎影。西湖處士の梅の詩に「疎影橫斜水淸淺、暗香浮動月黃昏」と。

義岳　忠

高標卓爾として直に超宗、塊視す㋭華山の千萬重、勢層雲に薄る何の似たる所ぞ、秋天一朶㋬玉芙蓉。

友室　益

知心古より世間に無し、此の芳鄰を卜して德孤ならず、入得すれば他の梅と月とに還す、㋮鴛鴦未だ繡工夫を了せず。

蘭谷　金

㋯蕙弟罷參の地を同じうすと雖も、許さず梅兄入室の春、元是れ曹溪の那一滴、流芳千載果して何人ぞ。

月堂　淸

秋風鼻を撲つて桂花香し、始めて心空及第の場に到る、光境俱に忘る底の時節、呵呵として手を拍して禪牀を下る。

花庵　春

㋰熊峰鷲嶺一枝同じ、移して此の門に入つて分外紅なり、只だ主人の意安樂なるが爲に、太平日として東風ならざる無し。

㋭華山。李白華山の落雁峰に登り、此の山尤も高し、呼吸の氣、想ふに帝座に通ぜん」と、卽ち之れなり、岳によりて識出す。
㋬玉芙蓉。富嶽を形によりて又芙蓉峰といふ。
㋮鴛鴦云々。盧照鄰の長安古意に、「比目鴛鴦眞に羨むべし、雙去雙來君見えず、生憎や帳額孤鸞を繡す」と。
㋯蕙弟。蘭によりて蕙草の榮枯する處、その餘衆と地を同じうするに喩ふ。
㋰熊峰。熊耳山なり、達磨を葬りし處。

春溪

太古乾坤一氣浮ぶ、冬に非す夏に非す又秋に非す、綠楊芳草東西の岸、牧し得たり潙山の老牸牛。

南芳　金

曹溪の明鏡臺を打破して、梅花の面目塵埃を絕す、㋜重離六畫分開して後、四海の薰風此れより來る。

天覺

㋛一を得て以て清く一を得て寧し。㋝世尊錯つて是れ明星を認む、了然として動せず如如の體、㋞月は屋頭に在り花は瓶に在り。

太虛

堅に乾坤を蓋ひ横に十方、法身邊の事露堂堂、誰か知らん手を長空の外に㋟撒して、塞雁影沈んで秋水茫たり。

天先　性

蒼蒼何の色ぞ坤維を蓋ふ、直に得たり㋠純清絕點の時、㋡羲皇の春一劃を待たず、梅は開く太極已前の枝。

澤翁　濡

㋜重離六畫。易の離爲火、☲☲ないふ。
㋛一。卽ち涅槃妙心なり。
㋝世尊云々。臘月八日未明、明星を看て悟道し給ふを云ふ。
㋞月云々。李翺の藥山禪師に贈る詩に、「我れ來つて道を問ふ餘說無し、雲は靑天に在り水瓶に在り」と、蓋しこれより脫出し來るものか。
㋟手を撒す。手放して歩むを云ふ。
㋠純清絕點。卽ち太極以前なり。
㋡羲皇云々。伏羲氏なり、結め

天地由來積德の門、主人大坐直に軒に當る、㋣雲夢八九胸中の芥、㋤龐老西江何ぞ呑むに足らん。

桂峯

東土の二三奕葉を聯ぬ、西天の四七芬芳を發す、孤危峭絕攀ぢ難き處、熊耳叢高うして秋色長し。

陽甫

一氣生ずる時天靄然、別春何ぞ必ずしも梅邊に在らん、金烏飛び上る扶桑の樹、達磨元來禪を會せず。

一翁

元來天地是れ同根、四海の中獨り尊と稱す、行道威音空劫の外、强ひて王老に兒孫と喚ばる。

照嶺　眞

㋥影㋦杲杲たる時空寂寂、峭巍巍の處坦蕩蕩、三千刹界光明藏、百億の須彌日月長し。

靈源　性

㋣雲夢。雲夢の澤を云ふ、司馬相如が子虛賦に曰く、「楚に七澤あり、名づけて雲夢と曰ふ、方九百里、其の中山あり、其の山は卽ち盤紆茏鬱、隆崇峻崒、岑崟參差として、日月蔽虧す、交錯糾紛として上靑雲を干し、罷池陂陁として下江河に屬す」とある是れなり。
㋤龐老西江。龐蘊居士、馬祖に參問して曰く、萬法と友たらざる者是れ什麼人ぞ。祖曰く、汝が一口に西江の水を吸盡するを待つて汝に向つて道はんと。居士言下に大悟す。
㋥杲々。あきらかなること、詩に「杲々として日出づ」と。
㋦禹門。鯉、禹門三級の浪を越ゆれば龍となると。
十嬰。少好の貌なり。
㋧三要。臨濟禪師爲人の機關、

神龍豈に是れ池中の物ならんや、凡鱗を脱卻して㋓禹門に登る、白浪滔天意氣を添ふ、由來水は崑崙より出づ。

榮中　恩

少林の毒種扶桑に遍し、天下一株の蔭涼、子葉孫枝繁茂の處、秋風㋔嫄桂久昌昌たり。

玄虛　聃

㋕三要印開す衆妙の門、依然として天地是れ同根、佛老深談の旨を知らんと欲せば、㋖黑漆の昆侖空裏に奔る。

玉溪　音

蒼龍窟裡夜沈沈、波浪聲收つて萬壑深し、明月清風無價の寶、高山流水㋗沒絃琴。

劫外

行道威音王以前、虛空手を拍して同年と叫ぶ、少室別傳の旨を知らんと欲せば、枯木花を開く時節緣。

悅巖

第一要、第二要、第三要なり。

㋖黑漆の昆侖。黑漆は眞黑なるといふ、昆侖は渾淪に同じ、物の圓渾するに名づく、黑漆は其の色を形容するなり、炭團玉の如き黑きものが夜の眞闇を走るといふことにして、有にして有ならず、無にして無ならず、有無を超越するといひ、宇宙の妙用を表示する語なり。

㋗沒絃琴。絃のなき琴なり。

㋔嫄。空生。須菩提なり、佛十大弟子の一人、解空第一を以ての故に名く。

㋓禹門。毛の長き鯉、それより轉じて長く垂るるにも云ふ。孟浩然の詩に、「綠岸毿々楊柳垂る」と、此處文意且く疑を存す。

破顏の尊者同參と叫ぶ、宴坐の㋘空生講談を費す、禪味忘るる時眞の法喜、石屏の雨花響㋙毿毿たり。

見外　參

若し文字語言の中に見さば、更に那邊に向つてか我が宗を立せん、笑ふに堪へたり善財の强ひて尋覓することを、德雲は妙音峰に在らず。(見を一に形に作る。)

龜伯　哥

舞袖風に翻る老飲光、篪を吹く仲子㋚宮商を絕す、餞行の一句明朝吉なり、海上の蓬萊日月長し。

一是

萬法空に歸して點塵を絕す、非を知る㋛四十九年の春、當陽直指す卽心佛、今日看來れば日下の人。

鐵船　梵盈首座

渾鋼を打就して勢太だ頑なり、浪花雪を捲いて銀山を倒す、㋜古帆高く挂けて後の消息、海西の風月を載せ得て還る。

となるもの、商は金に屬する音なり。

㋛四十九年。莊子に「伯玉行年五十にして、四十九年の非を知る」とあるより出づ。

㋜古帆云々。大應國師、慮堂和尙に謁す、堂便ち問ふ、古帆未だ掛けざる時如何、師曰く、蟾蜍眼裏の五須彌、堂曰く、掛けて後如何、師曰く、黃河北に向つて流る、堂曰く、未在、更に道へ、師曰く、某甲恁麼、和尙又作麼生、堂曰く、黃河北に向つて流る、師曰く、和尙人を謾ることなくんばよし、堂曰く、參堂し去れ、命じて賓客を典せしむ。

松屋　宗林監寺

棟梁の材大にして幾か年を經たり、厨庫山門境致全し、十里の風聲聽けば愈好し、三條椽下安眠を打す。

仰岳　祖泰尼

望む可し從來攀づ可からず、一峯屹立して雲間に挿む、針峯頭上に跨跳し去つて、塊視す須彌百億の山。

春窓　祖椿尼

東皇第一の功を借らず、戶牖を豁開して百花紅なり、端無く心猿を促敗し了る、喚び醒す ㋐ 南華化蝶の翁。

古巖　秀桂尼

阿僧祇劫の長きを歷盡して、嶮崖萬仞瞻望を絕す、空生舊時の看を作すこと莫れ、花落ちて毳毳春雨香し。

一宗　宗統尼

㋑ 東震二三派脈を傳ふ、㋒ 西乾の四七同流と叫ぶ、天龍の佛法多子無し、玄風を振起して指頭を豎つ。

㋐ 南華云々。莊周の別名なり、唐の玄宗の朝、莊子を封じて南華眞人となす。
㋑ 東震二三。六祖大鑑禪師をいふ。
㋒ 西乾四七。二十八祖達磨。

龍川　秀濟尼

四海五湖同一如、雲を挈ひ霧を戞んで淸虛に上る、禹門激起す桃花の浪、首を回らせば諸方點額の魚。（戞を一に擾に作る。）

花屋　宗因尼

九衢の車馬芳塵を競ふ、吾れは吾が廬を愛して別に春を置く、鳳樓修造の手を借らず、桃紅李白美なる哉輪。

月溪　妙光尼

勝遊何ぞ必ずしも南樓に在らん、綠淨く春深うして氣秋に似たり、獨り許す寒山口を開いて笑ふことを、氷輪西に落ち水東に流る。

江甫　秀淸尼

流水觴を濫べて波勢增す、海東の ㋓ 扶木日初めて昇る、門を出でゝ一咲人の會する無し、達磨元來宋の少陵。（宋を一に曾に作る。）

梅窓　理淸尼

物有り天に先つ名未だ安んせず、誰か戶牖を穿つて香に瞞せらる、犧皇の一劃華嚴の易、㋔ 小碧紗前月に和して ㋕ 攤す。

㋓ 扶木。扶桑に同じ。
㋔ 小碧紗。小窓に張りし碧紗なり。
㋕ 攤。散ずる意なり。

心溪　宗田尼

佛祖元來不傳を傳ふ、㋐琮琤として日夜響潺湲、意中の消息耳中に得たり、雨と爲る泉聲檻前に落つ。

汝舟　祖川尼

運濟す支那四百州、桅竿菅索凡流を截る、㋑殷人去つて後良弼無し、空載す蘆花明月の秋。

春庭　訓

神光雪に立つ二三尺、達磨花を拈ず八九年、別に東君の信息を傳ふる有り、黃鳥話し盡す玉階の前。

湖隱　賀

雲は南浦に歸り水は西源、朝市山林皆煩有り、高臥安眠何の處か好き、白鷗門外鶴の乾坤。

春學　篤

燕子日長し花の發く初め、少年叢中三餘を惜しむ、西祖の西來意を知らんと欲せば、先づ㊀東丘東魯の書を讀むべし。

褒英　名讃、一華の的子、雪村の孫

㋐琮琤。玉の唱る音。

㋑殷人。殷王帝辛、妲己を寵し、酒池肉林を作り、長夜の飲をなす、庶兄微子、大臣箕子、比干屢々諫むれども聽かず、遂に比干を殺し、箕子を囚ふ、此くの如くにして、遂に武王に滅ぼさる。箕子、微子、比干は皆良弼の臣なり。

㊀東丘。東家の丘にして孔子を云ふ。孔子家語に「孔子の西家に愚夫あり、孔子を是れ聖人なるとを知らず、乃ち曰く、彼は東家の丘なりと。孔孟子は魯の公族孟孫氏の後たり、並びに東魯と云ふのみ、即ち孔孟の書を云ふ。

春秋の筆力勢雄なる哉、千萬人の中俊才と稱す、將に謂へり少林消息斷ゆと、雪村深き處一華開く。

旭峯　東

金烏海を出でゝ一飛輕し、先づ高山を照して若英に昇る、德雲相見の處に拶到すれば、黑崑崙大光明を放つ。

直庵　順

乾坤を揑聚して毒拳を堅つ、㊁采椽斲らず自ら天然、德山臨濟門の入る無し、雪月風花一老禪。

梅室　春

是れ㋔西湖處士の家にあらず、老禪の方丈南涯に住す、猊牀三萬二千の月、一夜の工夫只だ花の爲にす。

菊裔　匀

花晩節を持して曾て移らず、㋓晉後の風流隱逸の姿、三玄三要の語を㋕檃栝して、小笊猶ほ霜に傲る枝有り。

古帆　順

㊁采椽斲らず。堯の堂の高さ三尺、土堦三段、茅茨翦らず、采椽斲らずと、采は柞の木也、また一說に山より采り來るままの木を云ふと、奢らざるをいふ。

㋔西湖處士。林和靖なり。

㋓晉後云々。淵明歸去來に「三徑荒に就き、松菊尙ほ存す。」周茂叔の愛蓮の說に「菊は花の隱逸なるものなり」と。

㋕檃栝。ためぎ。曲れるを正す木、淮南子に「其の曲規に中るは檃栝の力」とあり。

鐵船陸地に波を起し來る、空劫の前未だ挂けざる時、五須彌を把つて一片と成す、東西南北風の吹くに任す。

月浦　宗光

遠く㋐海嶠を離れて雲衢を出づ、永輪を推轉して凜凜乎たり、影波心に落つ般若の體、蚌胎吐出す光明珠。

林叔　梵靖藏主、夢窓國師の雲孫

恭しく以れば遺仙自出を同じうす、靈徹に相逢ふて記何ぞ曾てせん、一衣一鉢西湖の月、梅花樹下の僧に分付す。

安芳　榴

寥寥たる心事自ら平均、珍重す歸家穩坐の人、四海の香風吹けども起たず、花を開き實を結ぶ漢園の春。

梅湖　鶴藏主

疎影暗香家に到る句、隨波逐浪截流の機、僧有りて若し花の來處を問はゞ、春は孤山雪後の枝に在り。

玉海　善琛藏主

元自ら圓成磨けども㋑磷かず、珠合浦に還つて物咸新なり、夜來榛着す珊瑚樹、月白く風清し無價の珍。（價を一に家に作る。）

㋐海嶠。海山に同じ。
㋑磷。論語に、「磨けども磷るかず」とあり。磨滅變形せざるより、外物に汚されざるを云ふ。

材庵　承國門下の僧、諱を輪と曰ふ

林に凡木無し一封疆、這裡容る可し獅子の牀、作家宗匠の手を借らず、百千の日月雕梁に挂く。

春芳

溫然一氣東より來る、花は開く破顏微笑の時、諸佛番番世に出づ、梅蘭蓮菊時を同じうせず。

怡庵

花門闌に滿ちて喜色加はる、夜垣何ぞ㋒馬箕が家に比せん、主人安樂活三昧、暮山の雲を拾ふて閒に茶を煮る。

喜春

㋓歡悰に堪へず積善の家、㋔韶光九十日に相加はる、一枝の佛法多子無し、先づ破顏微笑の花に付す。

芳園　菊

小牡丹花以て加ふる蔑し、㋕東籬の秋色君が家に屬す、少年叢裡首を回して看れば、晉後の風流猶ほ花に在り。

柏庵　元梁

㋒馬箕。馬祖道一禪師の家は簸箕を作るを業とす、故に綽名して、馬簸箕といふ、馬箕はその略なるべし。
㋓歡悰。よろこびたのしむ。
㋔韶光。美しく輝くこと、是れ春光九十日をいふか。
㋕東籬の秋色。菊花をいふ。

指示す庭前那一株、九年面壁㊐碧瞳胡、若し趙老の雙華甲を論ぜば、太古の㊋莊椿半途に在り。

玉英　宗哲

晩成の大器天球を琢す、千萬人中獨り尤を拔く、色自ら粹溫何の似たる所ぞ、黃花愛し看る晉の風流。

喜雲　宗慶尼

曾て十地を經たり眞の菩薩、終始㊁無心岫を出で來る、持して以て君に贈る怡悅すや否や、風一朶を吹いて天邊に落つ。

菊溪　宗芳

金莖一滴壽無疆、離落水邊猶ほ霜に傲る、四海香風吹けども起たず、花に逢ふて問取す幾㊍重陽。

月岑　宗珠

指し來る不是話し來る非、鷲嶺曹溪共に機を顯す、今夜天外に出頭して看よ、山河大地光輝を發す。

器伯

玉に似たるを珪と名く磨すれども磷かず、㊋六瑚八簋其の人を得たり、神を祭ること在ますが如し

㊐碧瞳胡。逢磨なり、面貌によりて之れなしいふのみ。

㊋莊子逍遙遊篇に「上古大椿といふ者あり、八千歲を以て春となす、八千歲を以て秋となす」と。

㊁無心云々。淵明歸去來の辭に「雲無心にして岫を出づ」と、雲字を打するなり。

㊍重陽。九九の節句なり。

㊋宗廟に用ふる黍稷を盛る祭祀の器なり、簋は一斗二升を入るべしと。

廟堂の上、北野の梅花南澗の蘋。（澗を一に磵に作る。）

柏翁　宗郝

庭前雪に立つ歲寒の姿、古佛趙州酬い得て奇なり、天地同根同甲子、蒼髯の叟も亦萬年の枝。

春庵　正意上座

屋を環る皆山醉翁と稱す、蒲團紙帳春風に坐す、袈裟撩亂たり三杯の酒、興は簷花細雨の中に在り。

西伯　壽兌

竺土の大仙傳ふるに心を以てす、龜毛の葉を抽んでゝ翠森森たり、端無く轉じて東來意と作す、吾が祖の㊌甘棠一樹の陰。

檀溪　宗香首座

摩利山中雜樹無し、枝枝葉葉香風を起す、海外に流傳す眞の消息、此れより曹源一滴通ず。

桃谷　周仁尼首座

洞中の春色人間に異なる、路は㊏武陵溪上より還る、秦皇の爲に塵垢を洗はず、飛花水を逐ふて日に潺湲。

覺林　妙等尼

㊌甘棠。召公奭の茇りし所、後人其の德を頌して甘棠勿剪の詩を作る。

㊏武陵。昔武陵の人、魚を捕るに溪に緣つて行き路の遠近を忘る、忽ち桃花林に逢ふ、漁人之れを異とす、深く入れば小口あり、開けて土地平廣、良田美地あり、村人來り、皆問ふ、自ら云ふ、先世秦の亂を避けて此所に來ると。